
リミテッド・スタッフ！ ～超能力先輩稼業～

熊乾ドウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リミテッド・スタッフ！ ～超能力先輩稼業～

【Nコード】

N5718X

【作者名】

熊乾ドウ

【あらすじ】

高校生・打川慎五^{うちかわしんご}は、

居候の家出少女・狩野名依^{かのうめい}と共にアルバイトを始めた。

業務内容は「超能力開発の訓練補助」。

自分よりも年若い「超能力者たち」の訓練に付き合い、その戦いと成長を見届けるのが彼らの業務である。

常識にかからない生活が始まったが、それでも彼は淡々と暮らし続けていく。

彼と彼女と少年少女たちの、とりとめのない日常のお話。

<00> 少年少女の遊戯 (前)

—
—
—
—

“ ああ、ちくしょう、なんという奇遇な場所だ ”

—
—
—
—

眼下には広々と田園が並んでいる。

緑に染まった平野を見下ろす高台の土地、その隅にある白く小さな建造物の屋上。

木製の板が敷かれた展望デッキで一人、見はるかす風景に意識を沈めていた。

何も変わらぬ見慣れた光景に目を細め、それからおもむろに空を仰ぐ。雲はまばらに薄く伸びて、夕暮れの空に消え入るように引っ掛かっていた。

「シンゴおー、そろそろ行こう。準備できたよー」

不意に声をかけられ真下に目を向けると、メイ——狩野名依（かのう・めい）が笑うようにデッキを見上げていた。

「ああ。あと3分は待ってろ、そう急ぐこともないだろ」

「えー、暗くなっちゃうよ？とにかく自転車は出しとくからねー」

言いながらメイは、隣に建つ家の方向へと小走りに去って行った。足取りは軽く、遠目にも機嫌の良さを伺えるほどだったが、よくよく思い返すと彼女が不機嫌だったような所など見たことがない。付き合いが浅いとはいえ、そういう明るさや人当たりのいいところがメイの美徳なのだろうと思う。

：彼女が居候するのを考えなく許した事も、そのあたりに一因があるとは言えるが。

自称『謎の家出少女』メイが家に来てから、そろそろ二か月経つくらいだろうか。違和感をペロりと呑みこんでしまうかのように、彼女は生活に馴染んでしまった。

柵にもたれかけていた身体を後ろに起こし、階下に降りてゆく。つつかけるように靴をぞんざいに履きながら外に出ると、からからと自転車を押しながら、彼女がこちらに寄ってきた。カゴには二つの手提げバッグが入っている。

「じゃあ、行くか。忘れ物は？」

「ないよー。生まれてこのかた、した覚えもないなあ」

「：普段そういうこと言ってる奴ほど、肝心な時に忘れそうだけだな」

話しながら家の前の道路に出ると、メイは足を止めて顔だけをこちらに向けた。

「どっちから行こうか、表？それとも裏？」

「表でいいだろ。時間にゃ余裕もあるし、ゆっくり歩きたい気分だ」
「あいあい、じゃあ行きますかー」

また向き直って、彼女は自転車を押し始めた。そちらが公道である『表』の坂の方向になる。下りに差しかかるときにふと高台の方を見返したが、人気は感じられなかった。それも当然ではある。こ

の小高い台地の頂上に暮らす人間など数えるほどしかない。

広がる草地を撫でるように揺らし、ひとつ風が吹いた。

夕暮れの色彩と相まって一抹の物悲しさを覚えたが、歩きながら風情にすり替えてしまうことにした。

しばらくはゆるやかな坂が続いたのち、平坦な開けた場所に着く。
この台地の中腹、とでも言うべき一帯である。

中学校といくつかの運動施設があるので、台地の頂上に比べると当然人の出入りも多く、少し先に行けば区画整理された団地があり家々が並んでいる。店舗はコンビニくらいしかないのだが、学生需要が高いのか地域シェアの関係か、割と繁盛しているようだった。

吹奏楽の金管楽器、野球の掛け声、テニスの打球音……部活をする声の下をくぐるような心持ちで、斜面を背にして建つ御旗岳（みはただけ）中学校の前を通過する。やや時間も遅いからか、下校している中学生の姿はほとんど見当たらなかった。

「元気だねえ、中学生はー」

「大会が近いんじゃないのか、もう6月だしな。この時期はあつという間だ」

「そんなもんなの？ 私には感覚が分かんないな、運動部だった覚えもないし」

「そーいやお前、何部だったんだ？ 運動以外って言うと、ベタに文芸部とかか？」

「んー：そういうわけでも……」 「おー、打川先ぱーい！」

と、会話を遮るほどの元気な声が後ろから掛かった。

すぐさま滑り込むように自転車がこちらを追い抜いて、声の主が振り返る。

「どうもー！お二人して、お出かけっスか」

「…ああ、青山か」

「ういー、そうだよ、シロくん。っていつでもまあ、お仕事なんだけどね」

小柄な体格に、伸び始めの坊主頭。

青山司朗（あおやま・しろく）はここ御旗岳中の1年生であり、3つ年下に当たる。

もちろん「先輩」と呼ばれるのは間違いではないが、別段在学中に面識があったわけでもない。ここ最近になってからの知り合いであり、仕事先以外で顔を合わせることも考えてみれば初めてであった。

「それはどうもお疲れ様っス。今日は誰の番でしたっけ？」

「ええと、今日は猪吹（いぶき）と…もう一人は確か、愛中（あいなか）って子だな」

「あれ、シンゴは愛中ちゃんと面識なかったっけ？」

メイがそう言うということは、先んじて会ったことがあるのだろうか。

「記憶が確かならな。まあとにかく青山、おまえの番はもう少し先だったはずだ」

「そうですか、や、わざわざスンマセン。それじゃあ、お先失礼しますね！」

早い動作でお辞儀をして、青山はペダルを押しこむように力強く漕ぎながら走り去った。

「元気だねえ、シロくんは」

「それだけ取り柄みたいな奴だからな」

性格はともかく、お世辞にも彼の『成績』は良いとは言えない。

聞けば学校での彼は、人懐っこい人気者であり運動能力も学力も高水準だというが、こちらで管理している成績上では目を見張るものがなく凡庸である。後ろから新人が追い上げてきたら、いずれ追い越されてしまうだろう。

「こっちも仕事だし、評定に手を抜くわけにもなあ…」

「強くなくてもいいと思うけどねえ、私は。争うだけが能じゃないもの」

会話にどこかしらやるせなさを漂わせつつ、平坦な道を抜け、また坂を下り始めた。

— — — — —

きょう指定された場所は、家からはさほど遠くなかった。

国道から脇に折れて、森林沿いに伸びる舗装の荒れた道を進む。

と、五時を回った為だろうか、街灯が点き始めた。道の端に灯る柱の間隔はまばらではあるが、まだ陽は落ち切っていないため、暗さで先が見えないという程でもない。

しばらく歩くと、“工事中”の文字と、その下にピクトグラムが描かれたごく一般的な看板が目に入った。踏み外したかのように傾いで立っているそれを見てか、先を歩いていたメイが立ち止まる。

「ここみたいだね。他にないと思うし」

「工事現場…といっても、様子を見るに今は放置されてるようだな」

看板の端に注意してみると、“休工中”と赤地に白で書かれた小さなテープが貼られているのが見て取れた。

ぐるりと見渡せば、夕映えに暗く陰を落とす森に向かって、荒れ

た土地が開けている。

茶色の薄い土を踏みながら、現場の内側へと足を踏み入れてゆく。メイが先んじて自転車を押したまま入っていたが、奥の方を見るや一度立ち止まった。目を凝らすまで分からなかったが、積まれた鉄骨に腰を掛けている人間がいる事に、そのとき初めて気がついた。

…といってもそれは不審人物ということもなく、ここに来るべきメンバーのうちの一人であり、知人にして後輩だった。

猪吹隣人（いぶき・りんど）。御旗岳中の1年生である。

「お、メイさん。それにシンゴ先輩。早いなあ」

「ん？…ああ、猪吹か。お前ほどじゃねえがな、まったく暇な奴だ」

「何ですかあ、それ。ホントは忙しいんですよ、俺ってー」

「というと、部活か？」

「いや、俺は帰宅部ですけどね。ほらー、他だとそのー…何だろ、勉強とか？」

「そうかー、んじゃ帰っていいぞ。今日の授業の復習でもしたらどうだ」

「えー。冷たいなあ、先輩…」

「あはは、まあ、いつものことじゃない？ていうか勉強大丈夫なの、イブキ君」

「メイさんまで！？ああもう、言っとくけど俺、割と成績良い方ですからね！」

流すように笑いながら、メイは鉄骨置き場に歩み寄って、その陰に自転車を止めた。

「んん、まだ時間には早いけど…メイ、バッグ取ってくれ」

「はいはい、準備しとこっか」

差し出したバッグの中から、ボールペンの挟まった黒いバインダーを取り出す。これにはプリントを何枚か挟めてあり、一番上になっている一枚目には、今日行われる事項の要旨が記載されている。携帯電話を取り出し、ライト代わりに文字を照らして確認する。

遠慮のない気軽さで、猪吹が横から覗きこもうとしたので、隠すようにバインダーを抱える。

「部外秘だ」

「えー。ま、分かってますけど。んじゃあ内容だけ教えてくれませんか」

「…そのくらいなら構わんが、どうせすぐ分かるだろうに」

「試合ですか」

「そうなるな。前もっての告知もなかった事だし、公式な対戦ではないが…」

「試合！ よっしゃ、今日は遊べそうだ」

「調子乗ってると怪我するぞ。準備運動でもしてろ」

浮かれる猪吹を構うのをやめて、メイと打ち合わせをすることにした。

段取りを簡単に確認していると、遠くで小さく自転車のブレーキ音がした。そちらに目をやると、足音を立てて近づいてくる影が二つあった。片方の長身の男は知り合いだが、もう一人の小さな影――水色のジャージ上下を着た少女は、初めて見る顔だった。

「お疲れ様です、真崎（まさき）さん。そちらは…」

「愛中だ」

真崎は無愛想に短く言ったきりで、継ぐ言葉はない。

こちらを見たその少女が、替わるようにすっと前に出た。

「あ、どうも。愛中です、愛中久澄江（くすえ）。よろしくお願い

します」

「ああ、よろしく。監督補助の打川（うちかわ）慎五です」

「やー、愛中ちゃん。こないだぶり」

「狩野さんも。今日は、お二人なんですネ」

「うん、つまりはそういうこと。お相手はイブキ君だけど、知っているかな？」

「ええ、学校で何度か」

少し離れたところにいた猪吹に、愛中が軽く会釈をする。猪吹はにかつと笑い、手を挙げて挨拶に応じた。

「もうそろそろ、開始時間ですか？」

「ああ。着いたばかりで悪いけど」

「大丈夫ですよ」

折よく、真崎がぬつと近付いてきて、猪吹もいつの間にか隣に立っていた。

「…全員の出席を確認した。ミーティングを開始する」

「はい」「はい」「うす」「はいっ」

「立会人は俺、真崎だ。主監督は狩野、補助と進行は打川。あとは任せる」

「了解です。真崎さん、光源をお願いできますか」

「……………」

返事はないが、真崎は聞くとともに輪から外れて歩きだした。地面を睨むように見ながら十歩ほど歩き、やがて立ち止まる。

そして、右足を浮かせ…地面をぐつと踏みつけた。

光が来た。

踏みつけた場所を起点に、波紋を描くように地面に輝きが広がっていく。

今いる工事現場の空き地一帯、入口に近い道路際まで拡散は続き、

ちょうどその辺りに終端が切り取られたところで、この現象は鎮まった。

白色の光は優しく、目を傷める心配もなさそうだ。

「（真崎さんが『使う』の、初めて見たなあ）」

傍らの猪吹が、つぶやくように小さく喋る。自分が「これ」を見るのは二度目だろうか。メイと愛中は、さしたる反応もなく、ただこちらの指示を待っているようだった。昼日中の明るさを思わせる空間の中で、ざっと手元の用紙を確認してから、説明を再開する。

「：猪吹には少し話したが、今日は試合形式の戦闘訓練になる。能力の使用も許可するが、様子を見ながら慎重に扱うように。試合後は両者の同意があれば再戦をしてもいいし、訓練に充てても構わない。：それと、評価についてだが、勝敗によつての異動は無しだ。とはいえ評定には影響するから手は抜かないほうがいい、とは言っておこう」

「試合での勝敗条件は？」愛中が間合よく聞いてくる。

「『背中に貼ったシールに、生身で接触された場合』に負けとなる。メイ」

「はいはい。貼っちゃうから、二人ともそのままねー」

手にした緑色の丸いシールをひらひらさせながら、メイがまず愛中の後ろに回る。シールの直径は5センチほどで薄いものだが、どれだけ走りまわっても不思議とはがれることはない。

「愛中、この形式は初めてか？」

「ええと、そうなりますね」

「大丈夫だよー、すぐ慣れる慣れる。：はいOK、次はイブキ君ね」背中をぽんと叩き、次は猪吹の後ろへ。

「ういす。俺は3度目ぐらいですねえ、これ」

「そっか。じゃ、先輩だね」

愛中がくすりと猪吹に笑いかけた。手元の資料を見るに、学年は彼女の方が一つ上であるらしいのだが、見た目にはさほど年齢差を感じない。

「さて、説明はそんなところだ。他に質問はあるか」

「いえ、大丈夫です」「同じく」「こっちも貼ったよー」

「じゃあ始めようか、時間も頃合いだ」

それを合図に輪を崩して、おのおのが移動を始める。先ほど真崎が踏みつけた場所あたりに、猪吹と愛中が向かい合って並ぶ。そして向かい合う二人と等距離の位置に、メイと俺が少し離れて立つ。真崎は空き地の端の方で腕を組み、遠巻きにこちらを見ていた。

「二分前だ。準備しとけ」

言いながらバインダーを緩めて、プリントを下に挟めていた二枚目に差し替える。そこには、いま向かい合っている二人の情報が簡単に記され、その下に評価用のチェックシートが並んでいた。すぐに記入する事項はないが、ホルダーからペンを外し右手に持つ。

猪吹は屈むようにして地面に手を当て、指の先で土をつまんだり、ノックするように地表を叩いたりしている。

愛中はきよろきよろと辺りを見た後、猪吹から見えないように背を向けて、石を拾った。それから弄ぶように両手の間を行き来させて、何やら調子を確認しているようだった。

ややもせず時計を確認すると、長針が横にまっすぐ伸びて指定の時間を指していた。

「17時15分、規定の時間だ。試合を開始する」

二人が準備をやめ、距離を取り直した。メイに目線をやると、小

さく彼女はうなずいた。

用意が出来たとみなし、両者に最終確認の名乗りを促す。

この場合は『下位者』である猪吹の方からになる。

「クラスC－19、猪吹隣人、通号『クレイ』」

「クラスC－16、愛中久澄江、通号『トータル』」

互いに過剰な気負いはなく、満ち満ちたやる気が顔に浮かんでいる。

「試合は時間制限なし・反則なし、ただしこちらの判断によっては止める。…確認は以上。問題ないか」

慣例通り、二人は答えない。

互いを注意深く見つめ合い、緊張を強めている。

確認から、きっちり5秒が経過するのを見て———口火を切った。

「…はじめッ！」

<00> 少年少女の遊戯 (後)

猪吹は相手を見据えながら身をかがめ、一步踏み出して地面に右手をつく。

愛中は距離はそのままに左半身を引き、足だけを踏み直して出方を待った。

互いに不意を打つような仕掛けはない。

譲られるように先手を得た猪吹は、まず地面を歪ませた。

手をついた地表がどろりと潤み、濃色に変容した土がうごめくように右腕に誘われ、肘関節までを覆ってしまった。手甲のように包まれた右腕を中継に、さらに土がうねうねと伸びて、左腕にも手甲が出来上がる。

両手をつなぐ「土の縄」は手枷のようで、地表から同じように伸びるもう一本はのたうつように震えていて気味が悪い。

手枷たる縄はさらに両端を伸ばし、一本の棒を形成した。先端が独特に丸く膨らんでいて、さながら槌（ハンマー）かメイス、あるいは不格好な槍のごとき形状を取っている。

「いいですねえ、思った通り土壌が豊かだ。畑にでもなればいい」
口端を吊って、猪吹が誰にともなく笑みを見せた。愛中に反応はない。

猪吹は戦闘準備を完了させたという体であったが、それでもその場からは動こうとしない。

猪吹は十中八九カウンター狙いだらう。

以前の試合でも彼は、間合いに飛び込んできた相手を殴打するという流れでペースを奪っていた。それを知ってか知らずか、愛中に

動きはない。彼女は能力の片鱗も見せないというあたり、使用準備はどうに終わっているということだろうか。

戦いぶりを知っているであろうメイにちらりと目線を投げると、ごく小さく言葉を返してきた。

「（誘うよ。動く）」

すると確かに、愛中が動きを見せた。

構えを解くように息を吐き、それから何食わぬ感じで歩き出した。真っ直ぐではなく、左斜め、こちら寄りに向かっている。

悠然と歩を進める様に、余裕たっぷりと言いたげな表情を浮かべていた。

「（わざと…演技か？）」

つぶやきに対するメイの答えを待つより早く、今度は猪吹が大きく動いた。

ザラツ、というような音を鳴らして、手元から地面に伸びていた土縄をぶつりと切った。その断面から白い砂がこぼれるのを見たかと思うと、すぐさま地面を蹴って走り出す。10メートル弱の間合いがたちまち詰まり、後方に振りあげられた『槌』が愛中の肩を狙いすまし、唸った。

音もなく、動きは止まった。

愛中は、一瞬のうちに抗っていた。

彼女が突き出した左手のまさに寸前で、『槌』はぴたりと止められていた。

土塊と掌が、異種のつば競り合いをしている。手は槌に触れてはいない。彼女の能力が、あるべき物理法則に反するように展開されているのか。

引き分けたまま互いがそこから動かず、しかしながら、すぐに変化が現れ始めた。

三日月のような“へこみ”が、槌の表面に横向きに現れ、さらにもうひとつ線対象に描かれていく。

さながら、猛獣が噛んだ跡のように。
見えざる力が徐々に槌を、猪吹を、呑みこもうとしている。

と、不意に均衡が崩れ、両者がそれぞれ後ろに飛びのく。
先に間合いを取ったのは、意外にも愛中の方からであったようだ。

「まいったなあ」

左手をぶらりと垂らして息をつき、半身に構え直しながら愛中は言葉継ぐ。

「そう芯が通ってちゃあ、砕けないや」

今度は猪吹の方が応じずに、しかし愛中をきっちりと見据えている。槌の表層に付けられた『噛み跡』は消えていたが、その先端はいつのまにか球形に変化していた。再び場は膠着したが、先ほどより間合いは狭い。

これもまたわざとなのだろうか、愛中が自分の左腕の方へと目を逸らす。

それから右手でジャージごと手首を掴み、ゆっくりと、腕まくりをした。

真崎の作った光源にしらじらと照らされ、肌色が照り返る。

しかし誘いに違いないその動作は看過され、結果としてともかく、愛中の左腕が露わになった。それから愛中が構え直し、ひと呼吸を

ゆっくりとつく。

なおも猪吹は、じっと沈黙を守っていた。ほんの十秒ほどが、流れの滞った大地に落ちた。

さっきの今でか、愛中はことさら誘わず、猪吹はやはり容易には動かない———と思ったその時。

猪吹が、地面を蹴った。

武器を持つ両手の位置は低く、今度は槌を振り上げての攻撃かと思われたが、その予想はすぐに裏切られた。

両手を同時にぱっと開き、武器をその場に捨てたのだ。

いささか面食らった様子の愛中に向かい、捨てた武器を跨いで猪吹が迫る。

「なっ……！」

愛中は左手を掲げ、何はなくとも防御の構えを取るが、さらに猪吹が転じた。

愛中の眼前3メートルで突然急停止して、すぐさま右腕を内側に振り切る。

「——ッ！」

彼の食いしばるような声ならぬ声と共に、ジャリリリリツと石を擦るような音がして———

次の瞬間には、猪吹の『手甲』の先端が無くなっていた。

破れた内側は暗いが、ちらちらと右手の指先が見え隠れしている。

では、無くなった部分はどこへ行ったのか？…その答えはすぐに分かった。

愛中が左手を掲げたまま、肩を上下させて息をしている。

その掌の先にテニスボール大の土塊が浮かび、しゅるしゅると風切音を鳴らして空転していた。

“猪吹が不意を打って手甲の一部を切り離し、愛中に向けて投擲

を試みた”。

彼女がその過程を正確に理解できたかはともかく、しかし結果として弾丸は左手に収まった。そして猪吹の動きは硬直したように止まっており、もはや武器はなく、間合いはごく近い。

奇襲は失敗——少なくとも、そうは考えられたのだろう。

愛中は迷わなかった。

沈黙した猪吹に引導を渡すべく、今度は自分から迫る。反応が来ないうちに、まっすぐに背中を取ってしまえばそれで終わりなのだ。

力なく、猪吹が揺らいだ。こうべを垂れたまま後ろに下がり、がくりと膝を曲げる。

先ほどの一撃を放って力尽きたのか、あるいは失策による失意からか。だが、愛中が手を緩める理由はない。

猪吹はなお力なく、しかしゆっくりと顔をもたげた。

——にやりと、小憎たらしく笑った顔を。

「！」

彼の身体の陰になった左手の先に、先ほど捨てた槌の下端が握られていた。

「おおおおおおおッ！」

夜空を切り裂く気合いと共に、長い鈍器が低い軌道で振り上げられる。

同時にもうもうと砂煙が巻き上がり、辺りの視界を覆いつくした。

……。

……槌は当たらなかった。

振り切りはしたが、片手ということもあってか、明らかに先の一撃よりも速度が落ちていたのだ。愛中は襲いかかる武器を飛び跳ね

て回避するだけの余裕があつて——つまりはそれでお願いだった。

猪吹は両膝をつき、その途端に手甲がぼろぼろと崩れた。それは能力が解除された証拠であつた。

「…………ふう…………」

安心したような溜息について、愛中が再び歩み寄っていく。

「まったく。驚かされっぱなしだね、ほんと冷や冷やした」

「…………ああ。や、参りましたよ……。もう能力は打ち止め、す……」

息も絶え絶えといった様子で、猪吹が言った。

それから背中を見せるように頭を垂れる。

後頭部越しに、砂でくすんだ緑色のシールが見えた。

「それじゃ、私の勝ち……」

衝撃が来た。

シールに触れるべく屈んだ愛中の背面に、何かが激突した。

予期しない一撃に体が揺れ、そのまま前のめりに倒れる。

なんとか片腕はついたが、しかももう一度、背中にコツンと何かが当たる。

気付けば目の前にいた猪吹が消えていて——声だけが聞こえた。

「…………残念。俺の勝ち、です」

愛中の後方から猪吹が小さく言い、そしてその背から手を離れた。砂でくすんだシールに薄く手形が残り、それから音もなく、ひらりと剥がれ落ちた。

「…………それまで。…勝者、猪吹隣人」

宣言を聞いて、愛中はきょとんと目を瞬かせたが、地面の『それ』

を見ると理解したように目を閉じ、息を吐いた。

「……なるほどねえ…。はー、完全に負けたよ」

そこに、先ほど猪吹が振りあげた武器が転がっていた。

“先端”だけが、無くなった状態で。

先端の球部分だけを切り離して打ち上げ、時間差で落下させての攻撃――。

もちろん傍目には瞭然であったが、奇襲の連続と巻き上げた砂煙とで、当事者が気付くのは困難というものだろう。

猪吹の策が一手上回るような形で、とにかくこの一戦は幕を閉じた。

「愛中ちゃん、どう？ ケガはない？」

メイが近付きしゃがみこんで、心配そうに顔を寄せる。

「ええ、大丈夫です」愛中は事もなげにすつくと立ち上がり「びっくりはしましたが、痛くは無かったです」

「一応『粘土化』した土とはいえ…すみませんでした。何より、頭に当たらなくて良かった」

猪吹が珍しく、深々と頭を下げた。

訓練は怪我も織り込み済みとはいえ、極力避けたいところではあるのは確かだ。

愛中の返答に、自分も内々に胸をなでおろしつつ、二人に歩み寄った。

「いやはや、何と言おうか…見ごたえのある対戦だった。二人とも、お疲れさん」

「…あー、ども」「いえ、恐縮です、先輩の前でお目汚しを…すみません」

褒められたそれぞれが照れるように目を逸らし、その様子を見てメイがごろごろと笑った。

— — — —

「：それで、だ。結局どういうものなんだろうな、あいつの能力は」
訓練を終えての帰り道、時刻は午後九時を回った頃。

すっかり夜になった表坂を登りながら、傍らのメイに聞いてみる。
行きと同じように彼女は自転車を押していたが、カゴには手提げ
バッグにかえてコンビニの袋が入っている。当のバッグはこちらで
二つともを肩に提げているのだが、さしたる重さではなかった。

メイは別段こちらを向くこともなく、歩きながら問いに答える。

「んー、アイちゃんのこと？ まあ見ての通り、念動力ってやつだよ
ね」

「それはまあ分かるが」

「イブキ君と違うところは、対象を取らないタイプだっていうこと
だろうね。極端な話、土が無ければイブキ君は何もできないんだも
の」

「手厳しいもんだ。しかしまあ、残念ながらそうだな」

能力が一人一つと決まっているわけではないが、天が二物を与え
ないのと同じく、才覚も多岐に渡って花開くことはまずない。『土
を操る念動力』と自覚しているからこそ、あれだけの柔軟さと自信
を持った戦いが出来るのだろう。

「：アイちゃん的能力範囲は空間にあって、それも相対的な座標で
発生してる。左手の前だけ、だね」

「その分、効果は高いってか」三日月形に噛まれた槌が脳裏に浮か
ぶ。

「うんうん」メイは満足そうに肯いた。

「まあ細かいことは分かんないや、本人としてもそうだったみたい

だし。：でも個人的には、アイちゃんにはかなり期待してるんだー。
まだまだ伸び代があると思うし」

「へえ、そうかよ。なんだ、先輩らしい意見だな」

そう返してやると、メイが足を止めた。

ハンドルにもたれかかって腕に顔をうずめ、首だけでこちらを振り返る。

「ね、シンゴ」

「何だ」

「シンゴも、“先輩らしい”んじゃない？　そう思うよ」

「まあ、そうかもな」

足を止めずに、彼女の脇を通り抜ける。

メイは動かないまままでいたが、やがて、背中に向かって声を投げた。

「超能力なんて、使えないくせにさ」

他の人間が聞けば、それは例えば罵るように聞こえたかも知れないが、彼女の声にトゲは無かった。

腕に隠れた口元は、くぼむように笑みの形を作っているのだろう。

「ああ、そうだな。お前と同じ、一般人さ」

振り向いて、彼女に笑い返した。

「さっさと帰って飯にするか。動いてもねえのに腹が減っちゃった」
「うん！　じゃ、早く帰ろ」

メイが元気にそう言って、小走りに自転車を押して追いついてき

た。

超能力者たちの先輩としてコーチを始めて、もう二か月が過ぎた
だろうか。

しかし少なくとも今までは、日々は大事なく当たり前のように流
れている。

目ざましく、それでいて淡々とした日常。

俺とメイが選り取ったのは、そういう理想だった。

—
—
—
—
—

>00< 少年少女の遊戯 /了

—
—
—
—
—

<01> 登山客の上手な帰し方 (前)

「ね。今日、出かける予定ってある？」

コーヒーカップを片手に、テレビを見つめたままメイが聞いてきた。

先に朝食を食べ終わった彼女の食器は下げられていて、テーブル上には一人分だけの食事が残っている。彼女の問いにすぐには答えず、皿に食べかけの食パンを置いて、野菜ジュースを二口分ほど飲みこんだ。

「無いな」

食卓の向こう居間の先、引き戸を開け放した縁側の方に、何とかなしに目をやる。

優しい朝の陽光が、窓から廊下へと注がれて床を照らしていた。

「どこか行きたいのか。近場なら別に構わないけど」

「ううん、特に希望はないや」

「食い物も間に合ってるから、スーパーにも行く気は無いがいか？ 食いたいものがあれば買ってくるが」

「別がないよー。家でんびりしたい気分だから」

「そうか。じゃあそうしろ」

「うん、そうする」

それで会話を終えて、メイは残りのコーヒーをくいと飲み干した。

朝食を再開して、画面に映るローカルなニュース番組を頭半分ほどで聞き流す。

土曜日ということもあってか、今日は二人とも、『アルバイト』の出勤予定がなかった。仕事は平均して週に2〜3回。平日であれば午後に呼び出しがあって、たいてい訓練を手伝うのだが、土日祝

日にお呼びがかかることは滅多にない。

「そういやシンゴ、学校は？急がなくていいのー？」

「いまさら何言ってるんだ、今日は土曜だ」

「まあ冗談だけどねー。そういえばさ、中学生も土曜日って休みなの？」

「ああ。昔はそうでもなくて、午前だけ行ったりしたそうだけどな」

「へー」

「へーじゃねえよ、お前は通ってた中学の事を思い出しやあ分かるだろ」

「や、どこも皆そうなのかなー、って思ったからさ」

はぐらかすような調子で、テーブルに肘をついて手に頬を乗せる。どうも昔のことは聞かれないようだが、あまり避けるのもどうかと思う、ときおりこういう会話をしている。

「御旗岳中ってどうだったの？学校生活とか」

「まあ…人並みだったと思うけど。部活して、行事やって、受験したら終わってた」

「えー、いやいや。もっとう、感慨とかない？」

「無いな…：あ」

「何？」

「近いから登下校が楽だった」

「…：ああそう。ですよね。まー部活もいいけど、若者らしいイベントってなかったの？ほら…：恋愛とか」

「いや、興味が湧かなかったな。何と言うか、誰かに強く心惹かれるということが無かった」

「…：枯れてるねえ」

メイは呆れるように、わざとらしくため息をついた。

ちようどテレビの画面が切り替わり、これまたローカルな地域リポート番組が始まった。

「あ、もう8時か。ごちそうさま」

メイが席を立て、キッチンに向かった。

「おう。流しの洗い物はやっとかから、洗濯頼んだ」

「うい」

家事は分担しているが、特にメイが不満を漏らすことは無いし、手際も悪くはない。料理だけは手の込んだものこそ（自分ともども）作れないが、簡単な調理ぐらいはできた。居候という立場ではあるが厄介に思うようなこともなく、兄弟姉妹のような感覚で生活に馴染んでいる。

姉なのか妹なのかと言われると、返答には困るのだが。

何となれば俺は彼女の年齢を知らず、また外見的にもどっちでも通る感じではある。外聞もあることだし、便宜上に年上と年下どっちがいいかは、暇なときにでも聞いてみようと思う。

テレビから聞こえる笑い声をBGMに手早く食器を洗い、棚に戻し終えてからソファに座った。

さて、今日はどう過ごしたものか。

縁側を見ると、足を外にぶらつかせてメイが読書をしている。本を読むのは彼女の趣味だが、膝の上に乗せている書物は外見にも分厚く大きい。これは彼女が買ったものではなく、父の蔵書である。

父は家にはおらず、学者として海外をほったき歩いている。何とか豪放磊落といった人物で、血を分けてはいるがどうにも反りが合わない。ついていけなくなったのか、母は数年前に離婚した。

しかし考えの足らなそうな見かけの割に、相当な読書家であり、かつ本の蒐集家でもあった。書斎だけでは当然棚が足らず、収まらない分は隣接して建てられた物置にしまい込まれている。で、メイに見せた時に読みたそうにしていたので、自由に読ませることにしたのだ。父はことあるごとにやれ読めほら読めと俺に押しつけるくらしいの薦め好きだし（そのせいか自分は読書はあまり好きではなかったが）、まさか怒りはすまい。

「今日は何読んでんだ？」

「んー、ノンフィクション。救急医療関係の話だけど、読みやすいからわりと引き込まれる」

ついこの頃気がついたのだが、本について聞いた時、彼女は絶対にタイトルを言わない。近くにいる時に聞こうとしても、背表紙を隠そうとする。いい作品は教えたくないのだろうか。

「…最近読んだ中で一番面白かったのは？」

「異世界と江戸時代を行き来する歴史SFかな。破天荒だけど考証が丁寧だったよ」

「へえ」

内容に集中しているのか、こちらを見ない。読書の時間を邪魔するのも何なので、それで切り上げて自室に戻ることにした。

今日も何も無い、なべて事もない。

好天が続く空を窓越しに見て、とりあえず外に居ようかと、漠然と本日の方針を立てた。

— — — —

午前11時09分に来客があった。

たまたま携帯ゲーム機を手にしていて表示が目に入ったので、正確な時間であるはずだ。俺は隣接する二階建ての物置小屋の上、田園風景のほかに売りの無い展望デッキに居た。漫然と過剰にレベルを上げていたところ、やや聞こえにくい声量で下から呼びかけられたのだ。

「よお、シンゴ。こっちに居ると聞いたんでやってきたが」

「また勝手に入ったんですか。ちゃんとチャイム鳴らして玄関から

来てくださいよ」

「したって、お前は大概こっちじゃねえかよ。一応、狩野には許可を取ったんだが」

「縁側ですか。あいにくあっちも裏口です」

「うるせえ。道路側に正門がないおめえの家が悪いんだ」

言いながら、その男は外付けの金属階段をがんと踏みつけて登り、屋上へとやってきた。ワイシャツをだらしなくズボンの外に垂らして、小脇に丸めた上着を抱えている。

「いい若者が真昼間からゲーム三昧かよ」

「若者がゲームに興じるのは当然の収まりじゃないですかね」

「口の減らねえ奴だ。まあ、お前のどうでもいい趣味に口を出す気はねえけどよ」

「それで何の用です、川藤（かわとう）さん」

川藤はログテーブルをはさんで向かい、丸太を半分に切った長椅子にどっかりと座りこんだ。

「茶」

「ねえよ。……もとい、用意が無いです」

「はっ、冗談だよ。コーヒーとコーラ、どっちがいい」

抱えていた上着をこそごとと漁り、二本の缶飲料をテーブルに置いた。

「ああどうも、頂きます。じゃあコーヒーを」

「おうよ。そいじゃその代金分ぐらいは、話に付き合えよ」

「はいはい」

川藤は聞くところにはサラリーマンという話だが、具体的にどういう業種なのかまでは聞いたことがない。よくウチにまで足を延ばしてくるので、少なくとも営業なのかと思ったがどうにも違うらしい。まあ、この人のどうでもいい生活に口を出す気はないけど。年の頃は20代後半くらいだろうか。

「土曜も仕事ですか」

「いや、夜勤明けでな。帰りしなに寄ったんだ」

柵の下に目をやると、真っ黄色の派手な乗用車が止まっているのが頭半分だけ見えた。

「そりゃお疲れ様ですが、早く帰って寝た方がいいんじゃない？」

「事務所で寝て起きたら10時の半ばでな、そこそこは眠れたんですっかり目が冴えちまった」

「それで、まっすぐ帰るのも何だからとうちまで来た？」

「おうよ。まあここの風景は悪くないし、ちよいの間いるだけなら構わないだろう」

「ま、手土産も頂いという無下にはできませんけど。それで…」

缶の表面に冷たく水のしたたるコーヒーを振って、タブを開ける。

「御用向きは、本当にそれだけですか」

「ふん。そう急くなよ」

睨むように、あるいは笑うように、川藤が顔をゆがめた。

彼はまた上着を漁って、内ポケットから畳まれた白い紙を取り出し、ひょいと投げてよこした。

「そいつが次の日程だ。桐代（きりしろ）のやつが例によって捉まらないから、伝達が俺に回された」

「真崎さんではなく？」

「取り急ぎ…というかついでに頼まれたんだ。正式な評価表なんかは現地でもらってくれ」

かさりと紙を開くと、簡潔に“場所”と“時間”、それから“内容”が記されていた。

「試合じゃない…訓練だけですか。俺を捜してたってことは…」

「そうだ。今回はお前だけだな。参加は二人だな」

「…月曜の午後4時…？ ちょっと時間が早いな、下校してすぐじゃないですか」

「授業にかぶせるわけにもいかんだろう。こちらの都合でもあるし、その辺は目をつむれ」

訓練中の能力者には制限があり、決められた日時・場所の外ではまともに能力を使えないし、使わせない。訓練生はみな同時に中学生なのだが、極力生活を縛らないように調整はされている。

「参加の二人は部活などは？」

あいにく渡された紙には、参加者の名前は書かれていない。

「問題は無いと聞いている」

「ならいいんですけどね。部活があるなら、そっちを優先してほしいんですよ。中学生は中学生らしく、青春を謳歌するのが一番じゃないでしょうかね」

「かー、何だそりゃ。その言いよう、そっくりお前に返してやろうか、高校生さんよ。狩野とはどうなんだ」

「どうって、居候とはいえ家族のように暮らしていますが」

「……ふう、面倒な奴らだな。そろいもそろって偏屈というか……まあいいや」

話を不意に切って、川藤がコーラを傾ける。ごくごくぐりと旨そうに喉を鳴らしてから、おどけるようにうなだれて息を吐いた。

「……ときに、昨日はどうだったよ」

「猪吹と愛中ですか。月並みですが、面白かったですよ、ものすごく」

「だろうな。猪吹は小手先が器用で機転も利くちょこざいな奴だが、対する愛中も冷静に見えて一局逆転・一点突破のバクチ打ちときたもんだ。下手なアクション映画的一幕よりよほど面白かったろうよ。で、どっちが勝った？」

「え、ご存知ないんですか」

「夜勤だっつったろ」

「……そうですね、どっちが勝ったと思います？」

少し意地悪く言ってみせたが、しかし気色ばむでもなく、川藤がにっかりと笑う。

「愛中だろう。相手にもよるが、あれは初見では破れねえよ」

「……自信満々のところ申し訳ないですが、勝ったのは猪吹です」
はたして川藤は首をかしげ、肩を落として見せた。

「むう、そうか。まあ勝負は時の運だよ」

「メイもそうなんです、皆さん愛中を随分買ってますね」

「まあ、ああいう能力は面白いからな。猪吹も手数はあるが、基本がクラシックに過ぎる」

「パツと見では分からなかったんですが、根本的にはこういった能力なんです？」

「そうだなあ……。まずは昨日の試合について教えてくれるか」

かいつまんで対戦の進行を話すと、川藤はしきりにうなづくように顎を撫でた。

「……なるほど。つまりはこうだ。一合目：最初の激突の時に、愛中は決着をつけたかった。能力がまだ知られてない状態だったろうから、なおさらだな。愛中はその一手で『槌』を叩き落とす自信があった」

「そのまま続ければ、あるいは潰せたのでは？」

「いや、手間取った時点でカウンターは失敗、となれば引くしかない。よしんばそのまま力が食い込んでたにしても態勢は崩せねえし、猪吹の器用さで絡め手からペースに持ち込まれても不思議じゃない」

手甲を砕いての投擲が、ふと想起された。

「で、負け惜しみにひとつ、愛中は嘘をついた」
「嘘？」

「“砕けない”って一言だよ。まあ正確には嘘でもないが、愛中の能力で物体を砕くのは難しいんだ。そう言うことで、本調子なら砕けるかのような先入観をあわよくば植え付けようとした」

「どうにも分からないですね……。先に結論を教えてくださいよ」

「まったく、最近の若い奴は楽をしやがる。まあいいだろ」

残り少なかったのか、コーラ缶を一手に飲みほし、示すように親指と中指で目の前に持ち上げる。

「愛中の能力は、物体を『丸める』ことだ」

「……へえ？」

思わず呆けた声を出した顔がよほど面白かったのか、川藤はどつと破顔した。

「左手の前に来たモノは、何だろうが丸められる。能力場は球形に存在して、入ったものをグルグルとかき回して圧縮し、解除するまで閉じ込めてしまえる——そんなところだな」

缶の底面をこちらに向け、くるくる回してみせたのちにそつと置いて、さらに続ける。

「ただ例外があつて、他の能力者のフィールド：この場合は『槌』だな、そういう影響下にあるものには干渉しにくい。相手が三下なら事は別だが、どちらもCクラスで同格とっていい実力だ。そういうわけで愛中は“砕けない”。振りおろされた武器にせよ、投げ込まれた手甲の先端にしてもな」

「はあ……なるほど。合点は行きました」

「ま、それでも最後まで互角に持ち込めたわけだからな。大したもんだよ、互いにな。……つと」

きらりと陽を映す金色の腕時計を覗くと、川藤は立ち上がった。

「ちつと長居したな、帰るわ。また暇したらよろしく」

「そうですか、いや、話はためになりましたよ。どうも」

上着をぱつと着直して、背を向けて歩き出した川藤は、思い出したようにひとつ付けくわえた。

「：ああ、そうだ。能力の詳細だが、愛中には言うなよ。本人もちやんとは分かって無いはずだが」

「え。：何で、ですか？」

「この先の成長に関わるからだ。能力を自覚することは、力を強める反面で、先の可能性を狭めることでもある。特に愛中のようなタ

イプは前例も少ないからな、おのずとみな期待をかけるってもんだ」

「ああ：分かりました。覚えておきます」

「ふむ、素直でよろしい。じゃあな、あと缶は捨てといてくれ」

テーブルに赤い円柱を一本残して、てくてくと川藤は去って行った。

折しも、正午を告げるチャイムが遠くから響いて来た頃だった。

<01> 登山客の上手な帰し方 (後)

午後も天気は崩れなかった。

少しばかり雲は出たが、梅雨時には珍しい好日を保っていた。

陽ざかりの裏庭で、メイが洗濯物を干し始める。

その脇の縁側に立て膝で腰掛けて漫画を読んでいると、ふと喉の渇きを覚えた。

何か飲みながら漫画を読むのがこの上なく好きなのだが、手にしている読みかけの漫画は残すところ20ページもない。やや急ぐようにばらばらと内容を上滑らせて、いいところで続きに引いたのを見終え、立ちあがった。傍らに積んでいた続刊の脇に本を置き、キッチンへ向かう。

メイは吞気にシャツなどを両手でぱんと伸ばしているが、さして時間のかかる作業でもないだろう。コップふたと紙パックの100%オレンジジュースを丸盆に載せ、廊下経由でゆっくり戻り始める。

…縁側に続く廊下に出ると、席が取られていた。

メイは洗濯に夢中で気付かなかったのか、あるいは分かかって通したのか。

庭では二人が増えて、その場は総勢四人となっていた。

「やあ、これはこれは」

そこに座っていた人物が、こちらに気付いたように目を細めた。あおぐようにゆらゆらと動く指の先で、紺色の小ぶりの扇子がはためいている。

「……………どうも、お邪魔します」

その斜め前にぼつりと立つ少年も、こちらを認めてわずかに頭を

下げた。

葉村砂月（はむらさつき）と津島多々史（つしまただふみ）は、ともに御旗岳中の一年生である。性格はだいぶ違うが仲が良いように、連れ立ってうちを訪問するのも初めてではなかった。

「間の悪い奴らだな、これじゃコップが足りん」

「私はいいよー、後で」

伸びあがるように物干し竿にハンガーを掛けながら、メイがこちらに言ってよこす。にしたって、やはり一人分は足りないのだが。

「いやはや、何とも。駆けつけに良く冷えた飲み物とは、たいそう気の利いたことで」

朗々とした高い声を通り、なかば節をつけるように葉村が笑う。

こいつの物言いにも大概慣れているのか、傍らの津島が気にせず苦笑した。

「いいですよ、飲み物は別に。特にこいつには要らないです」

津島に向かって、閉じた扇子をピツと差し向け、葉村が返す。

「何たる謙虚か、しかしさても津島の子よ。そのように退いてばかりいては、いずれ取るべき財宝も取れまいぞ」

「まったく、その喋りは外ではやめなよ砂月。やるなら家か部室で存分にやってくれ」

そう言われてか、そつぽを向くように黙った葉村は、切るような所作でまた扇子を広げた。

「まあ気にすることもないが。せっかく来たんだろう、ジュースぐらい遠慮するな」

紙パックの口を開けて橙色の液体をコップに注ぎ、縁側にふたつ並べて置いた。

「…どうも」「いただきます」

殊勝に頭を下げてから、それぞれがジュースを手を取った。

「それで、なんか用事か？」

いちおう聞いてはみたが、ただ暇で遊びに来たのであろうことは言わずとも分かった。答えたのは津島の方だ。

「大した用じゃないんですけど、ちょっと相談しようかと思って」

「へえ。いいけど」

「その付き添いでやってきた」

葉村が扇ぎながら、割り込むように喋った。

「演劇部は休みか？」

「先輩の都合がつかないそうで、土曜だし休もうって話になって。んでヒマしてたところに多々史から電話があった」

年相応の話し方に改めた葉村の様子が、どこことなく可笑しかった。

「それで相談ってのは？」

「能力のことです」

「そこは分かるよ。進路相談なら先生にすればいい」

もっとも能力についても、真崎や川藤といった『立会人』に聞いた方が詳しいのは確かだろうけれど。彼らの連絡先は教えられていないはずだし、そうでなくとも話しかけにくいのだろう。

「他の人はすごい能力だって分かるんですけど…自分が何で選ばれたのか分からなくて」

「ふむ、確かに影響は大きいとは言えないものだが」

その能力が使われる様を思い出して、何気なく指で空を切ってみる。

津島の能力は通号を『タイプ』といい、『離れた場所に文字を書き込む』という力である。

有効範囲もきわめて広く、使いようで情報伝達には便利なものではあるが…

「他の人は、戦うことができる能力ばかりだから。剥奪もされずになぜ自分が残ってるのかが不思議なんです」

口ぶりからするに、深く思い悩んでるわけではなさそうだった。あどけなく、純粋な疑問なのだろう。

「別に、戦えるから凄いつて訳じゃない。平和な世の中で物騒な力を振りまわして何になる。だいたい、お前の能力は相当に希少なものでしょう」

「そうですけど、ほら、地味じゃないですか」

「…まあ否定はしない」

「ほらあ、やっぱりそう言う」

「何だまったく、女々しい奴だな。あるいは何だ、能力者を続けるのが嫌なのか？」

立会人たちは素質のある学生のスカウトに訪れるが、本人が拒めば能力を無理に開花させたりはしない。能力が使えるようになった後でも、やめたいと言えばすぐに一般人に戻してくれる。実際、何人かはやめた者もいるようだ。理由は大体、『時間が取れないかららしいが。』

「そういうわけじゃなくて。今はクラスEですけど、できれば力を磨いて…戦えるようになりたいんです」

「…ああ、他の連中みたいに試合がしたいのか？」

少し照れたように視線を逸らして、こくと津島がうなずいた。

「ふん、つまり多々史は補欠で終わりたくないんだろ」

「うっさいなあ、砂月。お前だってどうなるか分からないじゃないか」

「試合で負けるつもりは無い、ほれ」

扇子を開いたまま、地面と平行にして目の高さまで上げる。集中するようにふっと短く息を吐き、指先で扇子を素早く畳む。ぱちりと小気味良い音が鳴ると、さらに続けて一つ、扇子の先から音が鳴った。

風が吹くような…いや、“風が吹いた”音だ。

指し示していた方向には干された服があり、真っ白なシャツの裾が、ぱたぱたと揺れた。ちょうど最後のハンガーを掛け終えたメイが、時ならぬ風に「おお？」と首をかしげた。

「∴この通り、力は有り余っている」

「まったく、許可なく力を使うな。態度が悪くとも降格の対象にはなるぞ」

「ち、とかくに面倒な渡世よの」

芝居がかった物言いだ葉村は毒づく。

「指定場所でも無くても使えるんですね」

「どこでもってわけじゃないが、今ここでは偶然使えたって事だろう。制限もされてるだろうけど、葉村の能力はシンプルだからな」

猪吹が『土』なら、葉村は『風』の能力者と言っているだろう。

応用は難しいが、行使が容易で発動も早い。

「砂月、試合は何度かやったんだろ？ いいじゃないか、正直羨ましいよ」

「∴まあ、な」

本人の名誉の為に、あえて結果については触れないでおこう。

「まあ二人とも、そう深く思い悩むな。ストレスでスランプに陥っても馬鹿らしいだろ」

それでもとかく、能力の話はおしまいにした。

それからはメイと中学生組が三人して居間に上がり、レースゲームで対戦を始めてぎゃあぎゃあ騒いでいたりもしたが、自分は関せず縁側での漫画日和を堪能していた。

しばらく経った頃、メイが「コーヒー牛乳が切れた！」と禁断症状のごとく訴えるもんだから、公平にジャンケンで負けた方が買いに行くことになった。∴結果として、散歩がてらコンビニに向かうことになってしまった。ついでに惣菜のサラダと漬け物を買って戻ったところ、二人は暗くなる前に帰ったとメイづてに聞いた。

そうしてあつという間に日は暮れていき、一日は人を待たず終わりに近づいていく。

「さても初いやつらよの、打川の子よ」

「なんだおい、お前まで」

夕食と入浴を済ませてソファに横向いていると、今しがた風呂から上がったメイが後ろに立っていた。葉村の口調を真似てみたようだが、どうにもアクセントが変なのか滑稽に聞こえる。

「あの子たちの事だよ。一年生は無邪気でいいね、去年まで小学生だったんだものねえ」

「ああそうだな、精神年齢としてはお前と同程度かな。馬が合うのはそれでか？」

「む」

ふてくされるように、どさりと斜め向かいのソファにメイが身を下ろす。

「いいじゃないさー、純粹で結構じゃん。能力者ってみんなそうでしょ？」

「…そういえばまあ、そうかもな」

多少ひねたやつもいるとはいえ、基本的には素直な子が多いと思う。あるいはそれも、能力者としての素質を形成する一端なのかもしれない。

「偉そうにむくれて説教垂れてるだけじゃ、ずっと一般人のまままで終わっちゃうよ」

「それこそ説教だな」

ごろりと背の側を向いて寝返り、そのまま小さく伸びをする。

「あいにく超能力者にはなれんと、上の方々からお墨付きをもらってるしな。それに俺は一般人でいたいよ」

「それは私も同じだけどさ。残念だとは思わないの？」

「全然。一度きりの人生なら、人並みに穏やかに過ごしたいからな」
返事をあきらめたように、大仰にメイはため息をついた。

「部屋に戻るね」

「ああ。早めに寝ろ」

「そうだね、努力する。おやすみなさい」

立ちあがって、メイは廊下へと歩み去った。まあ大方、夜を徹する勢いで読書にふけるのだとは思うが。別に止める義理はあっても義務はない。

今日もいつのまにか終わっていたが、平穩であったことには満足している。

一般人は超能力の話をしていないとは思うが、関わったそれが自分を変えるわけでも…変えてくれるわけでもない。特殊なアルバイトを務めようと、本質的には非日常など自分と無縁なのだろう。

動くのがなんだか億劫に思えて、目を閉じて少しばかり仮眠することにした。

それを以ってその日付、6月15日の生活を終えた。

— — — — —

>01< 登山客の上手な帰り方 /了

— — — — —

<02> 密室バラバラ時間 (前)

月曜の憂いを総身に受けるように、窓はしつとりと降られじつとりと湿っていた。

褐色にぐずついた校庭を眺めているうちに終了のチャイムが鳴り、六時限目の授業もつつがなく完了。少しして連絡事項のないホームルームがはねて、あとは三々五々に下校もしくは部活へ向かう。

この日も早く下校しなくてはならなかったが、あいにく今週は掃除当番が割り当たっていた。場所は確か音楽室だが、時間が押しているので今日は遠慮したい。

「なあ、新見(にいみ)」

手近な同班の女子に声をかけると、彼女は振り返りながら机に寄りかかった。

「ん、何？」

「掃除当番なんだけどさ、今日は用事があって急がなくちゃなんねえんだ。そういうわけで何とか頼む」

「ふうん。いいけど、何の用？」

理由は言うまでもなくアルバイトなのだが、まさかそれで承諾はするまい。

おさまりのいい適当な嘘を用意していなかったことを、内心わずかに悔やんだ。

「……まあ、そっちで考えといてくれ。お前が考え得る一番都合のいい感じの理由を頼む」

「えー、勝手だなあ」

非難めいた文句とは裏腹に、口元は笑っていた。新見は普段から騒がしく乗りのいい気性なので、こういう形で水を向けてやる分には機嫌を損ねにくい。

「悪いね、んじゃ」

「はいはい。腹痛にでもしといてあげる」

早足で教室を出て、ごったがえす階段から昇降口へ下る。時おりすれ違うクラスメイトに生返事の挨拶を何度かしたのち、傘を開いて駅の方角に歩き出した。

この春から通っている尾岐山（おきやま）高校の特徴といえば、「尾岐市街の中心である尾岐駅に近い」ことくらいしか挙がらない。あとは運動部が割と強く、サッカー・硬式テニス・水泳あたりについては強豪であるらしいが、自分には関係が薄い。

自宅のある御旗岳地区とは2駅分離れており、通学には30分ほどかかる。着替える暇もないので、今日の指定場所には学生服のまま向かうことにした。今回については、メイは留守番だ。理由としては「一人で足りる」らしい事と、「指定場所が尾岐駅周辺」という事の二つだ。

確かに自分にとっては都合がいいが、中学生たちは電車時間を融通しなくてはなるまい。

さてその分の交通費は出るのだろうか、ささやかな懸念を抱いて歩いていると、駅は目と鼻の先であった。

（どのあたりだったけな…）

ポケットから紙を取り出し、片手で振るように広げる。

地図に付いた印、目標地点の上に“オキ駅前クレインビル”と手書きがしてあるのだが、いまいち大雑把な地図で分かりにくい。迷っては仕方ないので、立ち並ぶビルの看板をひとつひとつ確認しながら探していく。

目的のベージュ色のビルを見つけた時にまず思ったのは、何てまぎらわしい所だという感想だった。両隣のビルと、背丈も作りも色も、全く同じなのである。

三兄弟でもあるまいに仲良く建ち並ぶビルに呆れてから、ともかく敷地内の軒下に入り、傘を畳んだ。

携帯電話の背窓を見ると、時刻は午後3時47分。
間に合ったし、余裕もある。

自動ドアが開きビルの中へ進むと、一階のその空間は小さなロビーになっていた。

奥には受付があり、若いロングヘアの女性が座っている。

こちらに肅々とお辞儀をしてから、いらっしゃいませ、と雨に似合いの細々とした声を掛けられた。

「どうも、お疲れ様です。えーと、6階に用事があるんですが」

「かしこまりました。恐れ入りますが、どなた様からのご紹介でしょうか」

「え」

これに対する正答は“誰”だろうか。話こそ川藤から承ったが、現地での立会担当が誰かまでは聞いていなかった。わずかに答えあぐねたものの、ともかく立会人の名前を出せば取り次いでもらえるだろうと思い、

「…真崎さん、です」そう答えた。

「………」

確認するように、受付の女性が手元に目を落とし、それからまた細く答えた。

「…はい。承っております、どうぞ」

— — — — —

エレベーターに案内され、乗り込んでお目当ての数字をプッシュしてから、ふうと小さく息をついた。あまり広さのない箱が上昇していく。途中で止まることもなく6階に着き、扉がゆっくり開いた。

正面のごく狭いホールを道なりに曲がると、左右にドアが向かい合った二室が見える。

「どっちかは……ああ。見ての通りか」

左の部屋には何も情報がないが、右の部屋の脇には壁にコピー用紙が貼り付けられていた。雑に二か所ほどをセロテープで止めてあるそれには、マジックで大きく「桐代」と書かれている。

ともかく、ノックを2回。

「どうぞォー！」

聞こえた尻上がり調子の声に応じて、ノブを回して押し入った。

室内は簡素なもので、あるものといえば移動式のホワイトボードと、腰ほどの高さの木板テーブルが4つ。それが長方形に並んでいるものの、パイプ椅子は隅に重ねて立てかけられていた。

「なんだァ、二番乗りは打川か」

奥側のテーブル上に足を伸ばして座っていたのは、立会人の桐代（きりしろ）だった。あいにく、下の名前は存じない。

やたらと丈の長い灰色のパーカーに七分丈のジーンズを履いている、小柄な男性である。色白で綺麗な肌と整った顔立ちをしていて、遠目には女性と見間違えうほどだが、中身はまた別の話であった。

「ええ、どうも。中学生連中は遅れるのも仕方ないでしょう」

「そうかな？ あいつら今日は3時で上がりだよ、さっさと駅に向かえばヨユーだろー」

「初耳です。知りませんよそんなこと」

「ハハッ、言って無かったっけ？」

万事この調子で、とにかく一言でいうなら“いいかげんな人物”であった。しかしながら仕事自体はできる人らしく、訓練の立案は殆どがこの人の手によるものであるらしい。

「評価用紙をいただけますか。現地で貰うよう言われてたんですが」「あー忘れてきた」

「さいですか。予想通りで残念です。前回のコピーで代用して、後で本物を貰うことにしますね」

「ほう、そりゃ気が利くなあ」

「出来ることなら利かせたくないんですけどね…」

パイプ椅子を一つ手にとって広げ、桐代のはす向かいに腰を下ろす。

「何でまた今回は、室内でやるんですか」

「この雨に外でやりたいと？」

「まさか。でも、ここではやれることに限度があるでしょう？津島みたいな能力ならともかく…」

「津島や湊（みなと）なんかも呼ぶつもりだったんだけど。都合で無理だったさ」

「じゃあ誰が来るんですか。透視能力者とか、あるいは幻覚系？」

「僕が言わなくともそのうち来るだろー。せいぜい楽しみに待て」

桐代は尻を軸にして器用に一回転してから、テーブルの脇に着地した。

言われた通り静かに待っていたところ、数分もせず小さくノックの音があった。

「どうぞー」

桐代は奇妙な創作タップダンスを踊るのに夢中だったので、無視してこちらで答えた。

「失礼します…」

見覚えの無い女の子だった。

こちらと桐代を交互に見るようにしたあと、ドアを押さえたまま首をちょこんと傾げた。

「……ん？本当にここなんでしょうか」

「…まあ多分ね。変なのが踊ってるけど気にしないで。いちおう間違いだともずいから聞くけど、ご用件は？」

「あのう、ええと……訓練、です」

「良かった。俺は訓練の補助をさせてもらってる、打川慎五です」

「そですか、はい」

ちよつと緊張したような様子で、しかしドアから手を離して彼女は応じた。

「桜嶋唯音です。さくらじま、いおん。唯一の音って書いて、唯音」
まるで自らに言い聞かせるように、丁寧には彼女は名乗りを終えた。
「どうも。あっちでイカレてるのが立会人の桐代さん。会ったことは無かった？」

「はい……いつもは星倉さんか淡路さんなので……初めて見ました」
立会人の名前なのだろうけれど、どちらも聞いたことの無い名前だった。

「素行には問題があるけど、仕事は結果的にこなせるから安心して
くれていいよ。素行には問題があるけど」

「おーいーなんで二回言ったよ打川ア！黙って聞いてれば好き勝手
だなあ。減給するぞー」

「じゃあ本部から査定官を呼んだらどうですか？それで最終的に減
給になるのは誰でしょうかねえ」

やりとりに苦笑する桜嶋に椅子を勧めて、もう一人来るらしい能力者を待つことにした。

……4時ぴつたりには彼は来た。

ノックという前ぶれを経ずにボタンとドアを開け、その男の目が
迷いなく桐代を見据えた。

「枚垣行太（まいがき・こうた）です。訓練に来ました」
ぴしゃりと言ってドアを閉め、そのまま無表情に直立していた。
中学生にしてはかなり長身で、175、いや180cmはあるだろうか。

伸び過ぎの前髪は雨に濡れたのか、水が滴っていた。

「ああそう。じゃあ揃ったし始めるか」

事もなげに桐代が流して、ぴよいと机に飛び乗る。

交互に足を振りながら、彼は毎回恒例のとてもわかりにくい話を始めた。

「今日はせっかくなので、芸術の日にしたいと思うんだ」

<02> 密室バラバラ時間 (後)

芸術。

と言われてもあいにく秋には遠い梅雨時で、何が“せっかく”なのかは不明だ。

「：分かりやすくとは言いませんが、具体的に何をするんですか」
「科目は音楽と美術。ヤスカ津島を呼んで、どっちか片方にしたかったけどね」

回るようにステップを踏みながら、全く勝手に話は続く。

「僕はちなみに音楽の方が好きだな。ということで唯音ちゃんの方に付こう」

「ん、え？」

唐突に名前を呼ばれて、桜嶋はびくつと身体を揺らした。

「自然と打川は美術担当になるね。枚垣の旦那とよろしくやってくれ」

「桐代さん」

「何だい、打川」

「あいにく、さっぱりです」

「道具は廊下に置いてあるから、それ使って。ああ、唯音ちゃんはこっち」

会話にならない言葉をばらまきながら、桐代は飛び跳ねるように扉に向かう。ともかく廊下に出てみるかと後に続き、呼ばれた桜嶋も次いでおずおずと後ろにつく。枚垣は依然として直立していた。
(あれか?)

廊下の奥を見る。行き止まりの小さな窓に観葉植物があり、その陰にダンボール箱がひとつ隠れていた。

そのうちに二人は隣の部屋に入ったらしく、振り向いて見れば姿が無かった。

箱を両手で持つ。内容物がごろごろと転がるのか重心が安定しないが、持つことに支障が出る重さではない。

部屋に戻ると、じろりと枚垣の目だけがこちらを向いたが、相変わらずの姿勢を維持していた。指示を出そうにも、ともかく行うべきことを理解しなくてはなるまい。

箱の封を一身に担っていた、一筋のガムテープをびりりと剥がす。

中に入っていたのは、円柱、四角柱、それに三角錐・四角錐、もう一つは球。

それぞれ1つで計5つの立体が転がっていた。

…ああっと、いけない。

桐代の気性がうつったか、ごく適当な説明で終わるところだった。ともかく1つずつ掴み取って、テーブルの上に並べていく。サイズはどれも片手から少しはみ出す程度だ。

まず円柱は薄いビニール袋に包まれた灰色のもので、持ち上げた際に表面がへこんだほどに柔らかかった。

角柱は真っ白。円柱よりは形状がしっかりしているが、そう硬くはない。

「粘土ですね」

その場から動かず、枚垣が不意につぶやいた。なるほど灰色の円柱は油粘土、角柱は紙粘土といわれればそうである。

応ずるように彼を手招き、残る物品に関しても共に吟味を続けていく。

「この三角錐は…茶色で…木製だな。何の木かは分からんが」

「杉です」

「お、詳しいもんだな」

「祖父が林業をしてて、見る機会が多かったのだ」

「へえ。こっちの四角錘は金属だな。合金かはともかく、銅製のよ
うだ」

ピラミッド状のそれは片手では持ちにくいいため、両手で傾けるよ
うに引き上げてからゴトリと置いた。

最後に残った球は、どうも見る分には鉄球だろう。一度持ってみ
て確かめた後、転がり出さないように段ボールの隅に寄せておいた。
「それは？」

鉄球の事かと思ったが、彼は箱の中央あたりを指差してそう言っ
ている。よく見れば、段ボール箱の底の色が違う。つるつるした材
質のそれは引き抜くことが出来て、光の下に晒すと明るい青の一角
が目に入った。

「ああ、粘土板か…まあ粘土があるなら必要、か…？」

小学生時分に見慣れた、ゴム地の下敷きマットをテーブルに置い
た。右下にマジックで乱雑に塗られた跡があり、頭の部分は「2ね
んきり」とまでは読み取れた。やっぱり私物か。

「これで全部か。しかし何だってんだか一体」

「桐代さんは芸術と言ってましたが。それから、美術だとも」

「頃合いの形状だし、積み木でもしろってことかね。もつとも“木
”は一つつきりだが」

「それを美術とは呼ばないでしょう」

四角四面な返事ではあるが、まあ言うことはもつともだ。

「…：はあ、桐代さんが投げ出したことだし、後は自由時間でいい
かもなあ。粘土でもいいじるか」

「では、こちらを自由に使ってもいいのでしょうか」

「ああ、許可するよ」

あとは任せる、とばかりに身を引いて、パイプ椅子に腰を下ろし
た。

油粘土のビニールを半分ほどずらして、枚垣は剥き身のそれをじ
っと眺めている。ためつすがめつを繰り返したのち、やがてビニー

ルを掛け直して箱へと戻した。

この年で粘土遊びというのが気恥ずかしいのか、あるいは手が汚れるからだろうか。

そういえば、と思い当たり一つ聞いてみる。

「枚垣、何年生なんだ？」

「一年です」

これには驚いたが、たしかに体格と威容の割には、口について出る高音は声変わり前らしくもある。

枚垣は気にする風もなく、今度は紙粘土も箱の中に戻した。それから粘土板を自分の正面に引き寄せ、その中央に銅のピラミッドを置く。

「部活には入ったのか？」

「所属していません。やりたい部活動がありませんでした」

「そうか。ほかに趣味とかは？」

「……陶芸と、彫刻を少々」

「そりゃ何と言うか、渋いな……」

お見合いの席にも似た会話ながら、美術方面に多少なり造詣があるのは分かった。それで桐代が粘土と積み木を与えたというのなら、やや冗談が過ぎると思う。

枚垣は手元の立体を脇に寄せて、今度は三角錘を大きな手に乗せた。少しだけそれを見つめてから、また箱の中へと戻す。

「御旗岳に美術部はないもんな。そもそも文化部が少ないのか」

「美術の授業はもちろんありますが。絵画が苦手なので一概に好きとは言えないです」

鉄球を両手でつかみ上げて、手を添えたままマットに下ろす。芸術家というよりは、砲丸投げの選手と言われた方が納得する組み合わせに思えた。

「そういえば、桜嶋とは面識はないのか？学校でも含めて。あ、そもそも学年が違うのかね」

「多分」

「曖昧だな」

「人の名前や顔を覚えるのが苦手なんです」

言われて、そういえば名乗ってない事に気がつき、手早く自己紹介をした。「はい」とだけ答えて、またそれきり静かにテーブルに向かっている。

「しかし、粘土か。せめてヘラがあれば手も汚れないだろうに、桐代さんも気が利かないな」

「そうでしょうか」

立ち上がって、もう一度箱の中身を確認しておこうかと思い、歩み寄る。中を見ると、壁面に寄せるように粘土二種と三角型の木材が並べられていた。

それ以外は粘土板の上にある。

小さな一口サイズの銅製四角錘、それと同素材の台形型の立体。

あとは伏せたお椀にも似た鉄の半球が二つあるだけだった。

「……ん？」

増えている。

質量こそ増えてないが、二つの立体が四部分に変化していた。

ピラミッドが高さ5cm分ほどを切り分けられ、鉄球は真つ二つに両断されている。

「あれ、初めからパーツ分けされてたのか？」

「いえ」

わずかに枚垣を見上げて問うと、彼は簡潔に答えを継ぐ。

「切りました」

「……どうやって」

今度は答えずに、彼は頭の無いピラミッドを引き寄せ——ゆつくりと手を近付けた。

何も変化は見えなかったが、そのちに彼が指先で壁面を押すように触れる。ギキキッと金属が擦れ合う音とともに、台形がマッ

トと平行に分断され大小二つに分かたれた。

「こういう能力です」

「物体の切断、か？」

「通号は『モデライズ』。クラスはD、席次は26番目です」

「Dだって？」

御旗岳中学の能力者は最低でもクラスEであり、そのEにしても今のところ席次31番の――津島多々史、ただ1人だけだ。

つまり枚垣は下から数えた方が早いレベルの能力ということらしい。

「範囲が狭いとか、切れないものが多いとかが理由か」

「有効域は現状でおよそ5メートル。切断不可能だった物質は無いです。生き物は切れませんが」

「……相当強力じゃないか。なんでまたクラスDなんだ」

「集中しないと使えないからでしょう」

そうは言うが、会話しながら彼は鉄球を切り刻んでいく。二つが四つ、四つが八つ、八つが十と六つに。手は立体に触れてはおらず、ただ近くにかざしているだけだった。

「言う端からスパスパ切れてるじゃないか」

「今日は調子がいいので。不調の時は紙一枚さえ切れません」

話を続けながら、彼は機械的に金属を細断してゆく。

「木と粘土は、試し切りしないのか？」

「金属はあまり切ったことがないので、そちらを優先しているだけです」

「しかし、君にはぴったりの能力だな。彫刻には便利だろう」

「そういう使い方はしません。それは苦心して名作を作り上げた芸術家に失礼です。ズルです」

「与えられたものを使うのは自然じゃないのか。振るうべきノミが能力に変わったただけだろう」

「望んで得た能力ですが、作品を成すために得たわけではないので」

語るほどに、枚垣の実直な人柄がにじみ出るように思えた。微塵と切り裂かれた銅の一片をつまみ上げて、彼はすがめるようにじっと観察をしていた。

— — — —

ちょうど4時半に、桐代がひょっこり入口に現れた。

「打川ー、交代だー。桜嶋を見てやってくれ」

「ああはい、分かりました」

枚垣の評価シートを書き終えたレポートを手にしたまま、ドアの前で桐代とすれ違いに部屋を出る。

「美術の方はどうだった？」

「芸術とか美術というよりかは、工作ないし技術の時間でしたね」枚垣は何の像を削り出すでもなく、ただ切り心地を確かめるように時間を過ごしていた。芸術性のある作業ではなかったが、本人が満足ならそれで良からう。

隣の部屋の前に立ち、一応ノックをする。返事は無かったが、ゆっくりとドアを引き開ける。

…なぜかもう1枚、造りの違うドアがあった。不可解ながらそれを押し開けて中へ入ると、中で桜嶋がちょこんと椅子に腰かけていた。

「どうもー」

「おう」

二枚のドアを順繰りに閉めて、その部屋を見渡す。小さな教室のような感じで、教卓の前に机と椅子が三列で四ライン、計十二セツトが並んでいる。ただどうも違和感というか気になるところが他にあるのだが、何なのか分からずにいると、

「ここ、防音室なんですよ。以前はカラオケ教室として使われてた

そうです」

桜嶋が明快な解答を述べた。

「ああそれですか」

どうにも“聞こえ”が変だったのか。床にもタイルシートが敷き詰められており、音楽室のような造りを思わせる。

「さて、こっちは『音楽』と聞いたが……」

「うーん：桐代さんはそう言ってましたけど、私は音楽は得意じゃないです。歌も下手だし、楽器もできません」

「音楽に関する能力、ってわけではないのか」

「そうですね、えーと、実演してみます」

そう言うとき彼女は立ち上がり、ゆっくりと息を吸った。

そして、名乗った。

「私の名前は、桜嶋唯音です」

それを聞くのは確か三度目だ。多少変わった名前ではあるが、洒落てると思う。

「私の名前は、桜嶋唯音です」

もう一度。そう何度も言わなくとも分かる、ちゃんと覚えた。

「私の名前は、桜嶋唯音です」

テンドンか。何か気のきいた突っ込みを入れようかと考える前に、あることに気付いた。彼女の唇が、さっきから一切動いていない。

「……腹話術？」

「違いますよお！」これは普通に発声されたが、

「こう言う能力ですって、えい」「<<<私の名前は、桜島唯音です>>>」

「！」

その六度目の名乗りが今度は左の耳元で聞こえて、反射的に身を反らせる。

「へへ、びっくりしましたか。こういうのもできますよ」

「「わわたたししののななままええはは、ささくくららじじま

いいおおんんです」

両側から一音分だけずれて、上ずったように輪唱が行われた。今度は身じろぐほど驚きはしなかったが、不協和ゆえかあまり気分は良くないサウンド効果だ。

「オッケー、だいたい分かった。通号は？」

「『リフレイン』：そのままですよ。クラスはC-20です」

「声のリピート再生、ってところか」

「声に限らず、聞いた音なら何でもできますよ」

パチンと彼女が指を鳴らすと、あちこちから何十回も同じ破擦音がパチパチと乱れ鳴った。

「どこでも再生可能なのか。レコーダーみたいだな」

「けど最近聞いた音じゃないと、記憶が薄れるから再生できないです。だいたい一分以内かな」

「短いテープだな、そりゃ」

「音質は高いですよ。ていうか無損失です」

「そうかい。それなら大したスペックだ」

誇る彼女を褒めると、全く年相応のあどけなさで微笑みを返してくれた。

歌が下手とは自称していたが、彼女は歌うのも聴くのも大好きらしい。

クラシックや演歌、往年の名曲・歌謡曲、アニメソング、もちろん最近の流行曲に至るまで。話を振ってやると嬉々としてそれぞれの好みを語り出した。

「もちろんけっこう選り好みはしますが、ジャンルとしての好き嫌いはないんでどんどん聴いてるんです」

「感心な事だけど、それだと色々聴こうにも出費がかさむんじゃないか？」

「うう：そうなんですよねー。お小遣いはすぐなくなっちゃうんで、友達とCDを貸し借りして補ってますけどね」

「となると、買うのは一番気になってる曲ってことか」

「そうなりますね。あ、最近だと特に良かったのがインディーズの……」

という調子で湯水のように曲の話題が湧き、午後5時を迎えて訓練が終了になるまで、ずっとくっちゃべっていた。ほとんど訓練はしていないのだが、まあ今日の所は評価もオマケしといてやろうか。ただ聞いてるだけでも、案外話は楽しかったことだし。

— — — — —

「どうだった？」

「何がですか。話題は絞ってくださいよ」

エレベーターが狭いという理由で、中学生組とは6階のホールで別れた。先に二人が乗っていったエレベーターが戻るのを待っていると、壁にもたれている桐代が話しかけてきた。

「何だよオ、わかるだろ。枚垣と桜嶋の事さ。面白いと思うか？」

「それはまあ。つまらないような能力者は、そもそもあなた方に選ばれてないんじゃないですかね」

「ハハッ、違いねえな」

身を丸めるような独特の動きとともに、桐代は楽しそうに笑った。エレベーターが戻ってきたので、共に乗り込んでから話を再開する。「気になったんですが、能力の傾向に育ちや趣味も影響するんですかね」

「んん？ どうだろうなあ」

「二人とも趣味嗜好に関わるものが、能力と類似している節があったので」

「因果関係はなくてもいいが、ちよつと本質とは違うな。僕が思うに、もっと重要な要素がある」

「何でしょうか」

「“性格”や“考え方”だ。人は性格に合わない趣味を選ばない。短気者が釣りを嗜まないようにね」

「なるほど……。となると桐代さんの能力ってのも相当いい加減なんでしょうね」

「よほどバイト代を削られたいようだな、打川アー」

一階に到着すると、桐代はロビーを通り過ぎる際に受付に手を挙げて挨拶をした。何も言わずに受付の女性は会釈を返す。

「ふん、お前が能力者になってたら、よほど無味乾燥な能力になってたろうよ。じゃあなア」

捨て台詞のように、嫌味は嫌味で返された。桐代はパーカーの余った袖をぷらぷらと振りながら、駅とは逆の方向に消えていった。

「無味乾燥、ね……。乾燥……干物を作る能力とかかな。生活に役立つんなら、まあ歓迎したいな」

雨は小降りに変わっていて、もう傘をさすほどでも無かった。

停滞するじめっとした空気にわずかに顔をしかめ、確かに乾燥能力が欲しいものだと思いつながら帰路についた。

— — — — —

>02< 密室バラバラ時間 /了

— — — — —

減多に使われない家の電話が、ちりりちりり、と控え目に鳴っていた。

生憎にして今日も時期に見合った雨模様で、縮こめられるようにその音量は低減される。加えてベル音のパターンを久しく忘れていたため、それが着信の合図だとすぐには気付けなかった。

しかしまあ、携帯ではない方に掛けてくるのだから、電話先の相手は親しい人間ではあるまい。

公共料金関係か、あるいは父の知り合いからか。キャッチセールスも当然有り得る。メイは部屋に居る：となると自然、居間で世界遺産系の番組を観ながらくつろいでいた俺が電話を受けることになろう。

テレビ画面の左上に『5・56』の表示があり、下の帯部分ではスタッフロールが流れ去っているところだった。

リモコンの「消音」ボタンを押してから、立ち上がって受話器を取る。

「はい」

「よう。俺だが」

「どちら様ですか。悪徳セールスなら残念なことに間に合っていないが。あっ、ちなみに私、佐々木といいます」

「ったく、どの口が言いやがる。元氣そうだな打川」

「ええ、先ほどまでアンコールワットを堪能してましたから。それで何の用ですかね、川藤さん」

受話器の向こうに雑音は聞こえない。

となるとどこかの屋内、事務所とやらにでも居るのだろうか。

「無論、暇つぶしで電話料金をかさ張らせるつもりはねえが。仕事の話だ」

「それはいいんですけど、なんで携帯に掛けてこないんです」

「お前の所、電波悪いんだよ。前にかけた時も終始ブツ切れでひどいもんだっただろ」

「なるほど、それは失礼しました。お手数掛けます」

「まあそれはいい。で、仕事の話なんだが、メモの用意は良いか」
「ええ、手元に」

「じゃあ本題に入るか。実は最近、妙な『力』の反応があつてな。それもどうやら、こちらの許可を得てないものみてえなんだ」

「ふむ、どこでそんなことが？」

「御旗岳中をぐるっと回った裏手、お前んちの裏の坂あたりだ」

「近場ですね」

「で、微弱な反応だったから、ここ数週ほど面倒で放置していたんだ。ただの探査エラーかもしれないからな」

「おざなりですねえ」

「常時発生してるわけじゃなかったんでな。こっちも基本は中坊どもの訓練が優先だし、立会人は皆が皆忙しい」

「ええー、本当ですかそれ？」

「そこに疑問符を浮かべるな。ともかく、今週は訓練予定もないだろ。裏の坂を調査してくれるか」

「いつ行けばいいんです」

「反応は晴れの日、それも夜にしか起こらん。時間帯は大体7時から8時の間だ。まあ今日は無理だな、明日の夜に行け」

「一人で？」

「いずれ立会人が行く予定だったが誰も都合がつかん。幸いにその時間帯の御旗岳は能力が十二分に使えるはずだ、訓練生を連れてけ。暇なのを二人ほど用意してお前んちに送っとく」

「メイ：狩野はどうしますかね」

「ああ、そうだなあ：あいつが無給でいいってんなら付き添っても
らえ」

「分かりました。後日、報告すればいいでしょうか」

「うん、そうなるな。立会人によつては通じないだろうから、言伝
なりで俺宛てにレポートを頼む」

「はい。ところで」

「何だ？」

「万一何かあった場合、保険とか下りますか」

「……ウチにそんな上等なモノはねえ。安心してくだばれ」

それきり、電話は切れた。

全くブラックな話ではあるが、日給を鑑みれば割のいいバイトに
は違いないので、その辺りは深く追求しないことにしていた。

カーテンの閉められた縁側の向こう、裏手の坂がある方向を一度
見る。

それから2階の自室に居るメイに話を持ち掛けるべく、階段へと
向かった。ことさら金銭に執着する奴でもないし、たぶん暇つぶし
として応じるだろうと思う。

明日の段取りを考えながら、ゆっくりと一段一段を踏みしめて階
上へ登り出した。

— — — — —

もう少し人選を何とかできなかったのだろうか。

「…………お前らか……………」

「時に及びて何をか言いたげじゃの、打川氏（うじ）」

「謎のパワースポットを調査するんっスよね、いやーワクワクして

きました!」

金曜の夜、時刻は7時を回る5分前。

川藤が『用意』した能力者の二人が、家の前の道路に集まっていた。

黄色に赤い花柄を染めた扇子は、クラスC-24の葉村砂月。隣で小うるさい小柄な小坊主が、クラスD-28の青山司朗。

「ういー、二人とも。大興奮だねえ、特にシロくん」

玄関に鍵をかけ終えたらしいメイが、両手に2本の懐中電灯を照らしながらやってきた。

昨晚のうちにメイに話を通したところ、ナイトハイクがてら付き合うとのことでした。裏の坂は街灯もなく真っ暗になるし、怖くは無いのかと確認してみたのだが、きょとんと言「なにが?」と返された。

彼女が何かを恐れたり、素で驚いたりすることは確かに見たことがない。ともすれば、人間味の薄ささえ思わせるくらいに。

「シンゴ。レポート用紙は置いてきたけど、それでいいんだよね?」

「ああ。暗くて書きにくいだろうし、身軽な方がいい」

「お弁当は?」

「いらねえ。っていうか、さっき晩飯食ったろ…」

この調子ではあったが、まあメイは別にいい。問題は残る二人の同行者だ。

「せめてクラスCを呼んどの欲しかったがなあ」

「暫くその言を待ちおれ、打川氏。此方は階級Cを満たせる力程なるぞ」

一番下だけどさ、と継ぎ足す小さな声を、葉村は開いた扇子を当てて隠した。

「本命は猪吹、対抗で愛中、大穴で井房野（いぶさの）と予想を立てたが大外れだ。あいにくお前らにはマークを付けてなかった、せ

いぜい三連単なら三着がいいとこだな」

「酷い言い草っスねえ。まあ猪吹はああ見えて家が厳しいみたいスよ。陽が沈んだら家から出られないぐらい」

「見かけによらねえなあ、あいつ。お前ら仲いいのか？」

「クラスは違うっスけど、よく話すっスよ。あ、“組”の方の“クラス”っスけどね」

「そうっスか。まあいい事だが、学校で能力の話はすんなよ」

「案ずる無かれ、我ら列岩たりて流水通さざるを本懐と心得ておる」

「あー葉村、お前はいいんだ。みんな演技の一環だと思わないだろうから」

「む…」

葉村を平和的に静かにさせたところで、そろそろ出発の合図を掛けることにする。

「じゃあ行くか。場所はここから裏の坂、制限時間はだいたい1時間。道を下っていけば何かに行きあたるはずだと聞いたから心しておけ。お前ら二人は道中、能力と感覚を研ぎ澄まさせておいてもらえると助かる。以上」

「承知した」「了解っス」「シンゴー、私はー？」

「静かにしてろ」

「…うい」

ともあれ士気もそこそこに、調査団は第一歩を踏み出した。

— — — —

夏近い林道の空気は水を撒いたように涼しく、

そこここからの虫の羽音は心地良く耳朶に染み入ってくる。

陽照る日中に焼いた肌を冷ますには頃合だが、

それぞれの足取りは忍ぶがごとく夜の入りを暗く踏みゆく。

幅狭く車さえ侵入を禁じられた裏小径ゆえに、

心細いガードレールだけが沿うつづら折りに対向者は無い。
足元を照らす電灯の先に鬱蒼として草が沈み、
ひび割れたアスファルトへと手招くように伸び盛っていた。

「雰囲気あるねえ、丑三つ時ならもつとだろうけど」

メイの声は常と同じく弾んでいる。

「こっちの道は普段通らないんで、何か不思議な感覚っス」

「まあお前らはそうだろうな。俺にとっては庭の延長だよ」

幼少の時分から今に至るまで、何度もこの道を歩いたものだ。遠景でなければ分かりにくいのが、この森、いや林の規模は小さい。山に連なるわけでもなく独立しており、野生動物を見たことはついぞない。そういうタネが分かっている自分だけは、他三人よりは不安感は薄いのだろう。

「しばらくはカーブが続くが、あと十分ほども歩けば直線道になるはずだ」

「下る分には造作も無きことよの」

「ふもとまでゆっくり歩いても二十分。目標が見つかなきゃ今度は登り直しだ」

「うえ。面倒だなあ」

油断したように素の口調に戻った葉村が、気だるそうに正直なところを述べた。

「まあ八時になったらどうあれ終了だ。残業の必要はないから安心しろ」

「しかし何だろね、その目標って。川藤さんは『能力者の反応』とは言って無いんでしょ？」

「そーいや確かにそうだな。ただ『力』としか聞いてないってことは、上の方もつかみかねてるんだろう。：何だと思う」

「んー、まかり間違って能力を得たリスとか、タヌキとか？」

まずメイが希望含みな仮説を立てる。

「立会人の皆さんも結構いい加減だし、探査エラーの線も消えてな

いっすよね」

次いであまり当たって欲しくない予想を青山が蒸し返す。

「…幽霊、とか…」

最後に葉村がつぶやくように小さくこぼすと、四人の間に沈黙がのそりと落ちた。

（…幽霊…霊の類、か…）

オカルトの筆頭格ともいえるそれだが、『超能力』という科学だか魔法だかわからん力には日常的に触れている。折しもおあつらえ向きの人気の無さと時間帯、葉村の一言を一笑に付す事もためられた。

「あ」

「！…なんだ驚かすな青山、どうかしたか」

「い、いや、今、…その」

「言い淀むな、怖くはないがもやもやするだろ」

「じゃあ言うっすけど、あっちに…」

指差したのはガードレールの先、ここより5メートルほど低い道のあたりだ。

そして途切れ途切れながらも、青山ははっきりと、言った。

「…火の玉が、浮かんで、ました…」

足を止めて電灯を逸らし、じっと目を凝らす。

気が利かないように見えてその実、青山は間の悪い冗談を言うような奴ではない。あるいは見間違いだとしても、彼は能力者としてそこに『火の玉』を感じ取った。

「(スイッチを切れ)」

メイに聞こえる程度の小声でささやくと、返事の代わりに彼女はパチンと懐中電灯を消した。同じようにこちらもひとつ操作をする、と、一転と辺りに闇が広がる。

その場から動かず、息もひそめて暗闇の先に目を慣らしているうちに――

“それ”は確かに出現した。

火の玉というからには、自然と赤色を想像していたがそうではなかった。

ハンドボール大に集まって上下に揺れるその球は、薄い緑色をたたえて発光し、浮かんでいた。

突然現れたそれは数秒にも満たないうちに、また突然に、ふっと消えた。

残像だけを網膜に残して、再び空間は暗黒を取り戻した。

「(……確かに、確認した)」

「(……し、して、如何にせん)」

「(そりゃあお前、本懐を果たすしかあるまい。……そうだな、青山はここで待機だ、様子を見つつ何かあったら来い。葉村は俺と共に先遣隊。メイは……青山についてろ)」

「(うっス、わかりました)」

「(……う、ぐ……承知)」

「(気をつけてねー)」

笑顔でひらひらと手を振るメイが、暗がりの中にかすかに見えた。

板敷きを踏む泥棒のような足取りで、ライトを斜め下に向けて進行する。

葉村はこちらに寄り添うようにして、おっかなびっくりといった様子でついてくる。怖いだろうとは思うが、仮に火の玉がこちらに迫ってきた場合を考えると『風』は最適の能力だろう。

もっともあの緑玉が、一般的な物理法則に依存しない可能性も否定できないのだが。

ヘアピンカーブをぐるりと回り、先ほど見下ろしていた道の直線上まで来る。

さきに見たポイントまでは、距離にしてあと15メートルほどだ。

「(ライトを消した方がいいと思うか?)」

「(つ、点けたままにしてよ)」

「(まあそうか、点いてるときにも見えたわけだしな)」

じりじりとおおよその距離を詰めていく。あと10メートル、9、8、7、6…

「(…出たっ)」

5メートル目前まで来て、再び火が揺れるように輪郭を現した。しかし予想された位置よりも倍は遠く、さらには逃げるようにスウィツと道の先へ尾を引いてゆく。

「(移動してるのか!? よし行くぞ! 追いついてやる)」

「(あっ、当たったら、どうすればいいんだようっ…!)」

「(患部を水で冷やせ!)」

わりあい興奮気味に返して、おびえがちな葉村の手を取りつつ坂を急いで下りる。

掴んだ手は小さかった。不安を紛らわそうとしてか、ぎゅっと強く握り返してくる。

勢いを抑えながら次のカーブを曲がった時、それまでには無かった変化に気がついた。

「（…音？これ、足音か？）」

「（え、ええ？あ、ほんとだ…）」

進むにつれて、コツコツとアスファルトを叩く音が聞こえ出したのだ。

その間隔もだんだん短くしかし遠くなっていく。それが人の足音だとすれば――

「（先輩ッ！『あいつ』、こっちから逃げてる…!）」

音の主の動く様が、光の輪の中に僅かながら捉えられる。

それは幽霊などではなく、細く照り返る足。すなわち人の姿であった。

「止まれ、おい！」

つとめて大声になり過ぎぬよう短く叫ぶが、目標の動きは止まらない。

「くそっ！葉村、アレをやれ！」

「な、何を!？」

「風を起こせ！とにかく足を止めろ！」

「――くっ！」

一瞬の逡巡ののち、葉村は懐に入れていた扇子をピストルのように引き抜き、間髪を入れず目標に向けた。

繊細な狙いはつけられぬままに、力が放たれる。

木々をざんざと揺らして、辺りを乱れ打つように風が舞った。

風に身をすくめたか、足音が不意に止まった。

追いつく好機とは見えるが、無差別に吹く風に阻まれてこちらも

動けずにいた。

「落ち着け葉村、集中しろ！」

「してるよ、でも、駄目だ……！操り切れない」

「ええい、なんとかしろ！早くしないと逃げられる、3つ数えるうちに抑えろ！さぁーん、にーい……」

「待ってったら！無理だよまだ！」

「いーち！」

「無理だっていつてんじゃなかあー！」

ゼロカウントを宣言する前に風はいっそう強まり、あたりにぐつと圧力がかかる。そして間をおかず、空気がばあんと四方八方に発散された。

たまらず尻餅をつくが、葉村はその場に留まっていた。そこが台風の間となっていたためか、肩を上下させてはいるものの中腰を維持して立っていた。

「あー、もー、変にプレッシャーかけないでくれる!？」

「ああ……ごめん……悪かった。なんか興奮して……」

半ば切れたように凄む葉村にまず謝り、それからすぐさま目を戻す。

「見ろ、ともかく止まったぞ」

風の緩急を受けて転んだのか、今まで逃げていた謎の影はその場に倒れていた。

「だ、大丈夫だったのかな……」

「……確認しよう」

葉村は疲れからかその場にへたり込んだため、単身で歩みを進める。

横向くように伏したままで、動く気配は無い。そろそろと近寄り、懐中電灯を傾けてその影を照らす。

眠るような横顔は、年若い少女のそれだった。
さらりとした長い黒髪、伏せた瞼にゆるく反る睫毛に、薄い唇。
重ねた薄地のシャツの上から明色のシヨールを羽織っており、その端は右手にかく掴まれていた。
裾がめくれた黒のスカートから肌がちらりとのぞき、何とはなしに気恥ずかしさを覚える。

「…おい、生きてるか？」

「……………ん……………ん……………」

閉じた目をまばゆそうに更にきつくつむり、それからゆっくりと身を起こした。

「…あら……………ええと。どなた様でしょうか…」

焦点を結びきれてないぼんやりとした目で、その少女はこちらを見る。

「……………この近くに住んでいる者ですが」

あやうく言葉を選びつつ、ともかくそう答える。

「あ、そうでしたか…あ」

不意に少女の体が揺らぎ、くらりと傾く背中をあわてて手で支える。シヨールの素材ゆえか、手の平にざらついた感触がした。

「ん…どうもすみません。先ほど転んだせいかな、くらんでしまっ

「はあ。まあ、お気になさらず」

「いま立ちますね…よ、と…」

どこことなく表情や所作に艶があり、その頬は上気したように薄い紅色に染まっている。気だるそうな細い声も相まって、婉曲に言えば女性らしく、有り体に言えば色っぽく思えた。

「こちらで何をされてたんですか？」

「ええ…気分が晴れないもので、散歩を」

「この夜に、こんな寂しいところでですか。危ないと思いますが」
「人より夜目が利きますもので…」

「せめて街灯のある道を歩いた方がいいかと」

「そうですね…でも、ほら。こちらでしか見れないものもあります。丁度、あの様に」

言いながら手に向けた先を見るものの、あいにくの暗闇に包まれている。

「…何ですかね。見えません」

「あら、そうですか？では…」

少女は口を一旦つぐみ、肩口にかかるショールを整えるようにつまんだ。それから胸の前方に右手を掲げ、五本指を流れるような所作で折り曲げる。

…天を指してちょこんと頭を出す親指から、小さく光が放たれた。それは円を描くように軌跡を描き、やがて二次元が厚みを持つかのように――緑色の球体がつくり出された。

広げ直した手の上に『火の玉』が据わり、わずかに上下に揺れて安定していた。

脇に咲いた藍色のアジサイが、緑光を帯びてシャンデリアのように輝いた。

「……通号は？」

何気なく能力を見せたことに呆れてしまい、浮かんだままに直球の質問を投げた。

「あら？立会人の方でしたか。それとも…訓練をなさっている方ですか？」

「いや、どちらも違います。アルバイトとして訓練を手伝っている、打川慎五という者です」

そう言う彼女も、しずしずと礼をして名乗りを返した。

「そうでしたか。わたくしは上幌坂篠（かみほろざか・しの）と申します。通号は『トゥインクル』、席の方はDの29番を頂きました。どうぞ、お見知りおきを」

— — — — —

「そういうわけで、正解は能力者でした」
ほどなく合流した3人にまとめて説明をして、それからそれぞれが自己紹介を交わした。

「じゃあ、シノちゃんは散歩してただけだったの？」
「そうらしいな。今度からは控えてくれるか、能力を使える機会は用意するからさ」

「ええ、ご迷惑をおかけしました。夜遊びは慎みますわ」
傾ぐように微笑む彼女を見て、中学生組も言葉が返しにくいようだった。

「まあ幽霊じゃなかったってのは、良かったかもしれないし、残念でもあるツスね」

「あら：ご期待に添えず申し訳ありません」

「そういや、何年生なの？ていうか大人っぽいねー」

「3年のE組に所属しております。時期も近付きましたし、そろそろ受験の支度も始めませんとね」

「挙止閑雅なれど天衣無縫、しかして茫洋たる御人よの」

「あら、お上手ですわ」

浮世離れた会話にだんだん混乱し始めたので、ともかく解散を言い渡すことにした。

「まあ、特に今回の件でペナルティも無いだろう。人目についたわけでもないしな。ともかくみんなお疲れ、早めに帰るといい」

それぞれ返事をして帰り始めたのを見てから、上幌坂はすすすここちらに寄ってきた。

「とりなしていただき、有難うございます」

「大目には見たが、今回だけだよ。気を付けて帰るといい」

「はい。ではごきげんよう、打川様。お借りしたこちらの電灯は、いずれお返しに参ります」

胸を押さえるように手を当てて、お辞儀をする。コツコツと革靴を鳴らして彼女は歩み去って行った。

「しかしまあ、まったくいかにも能力者って感じだな。常識を外れ気味とでもいうか……」

「なんか、妙に丁寧に対応してたね？ シンゴ」

「そうか？ …まあ、向こうがそうだったからじゃないか」

「んー……」

メイは何か言いたげにライトを8の字に振りながら、来た道を登り出した。

足取りにはいつもの元氣は無いようにも見えたが、歩調はあくまで早いため置いてかれそうになる。

晩の空をふと見上げると、上弦を過ぎた程の月が幽玄と映えていた。

それは目に焼きついた緑火の残像にも似ていたが、やがて歩くうちにその色彩も忘れてしまった。

ただ、なんだか——揺れるように危うい印象だけが残った。月のみならず、今夜見たものすべてに。

もやがかった感傷をごまかすように足早に坂を踏み、ただ今は家を目指すことに専念した。

—	>	—
—	0	—
—	3	—
—	<	—
—	花	—
—	魂	—
—	風	—
	月	—
	／	
	了	

<04> 三人閑女の水入らず (前)

混雑の無いホームに、悠々とした気分で降り立った。

人目こそあったが、それでも一つ小さく全身を伸ばす。今日という日は穏やかに過ぎたが、日中は学業もはかどり眠りも十分足りており、まったく好調だった。

帰宅ラッシュの時間帯だというのに、今日の電車は珍しく空いていた。

私服・学生服・スーツ姿と、それぞれ同じくらいの比率で、乗客が次々と下車してくる。しかしこの駅で降りるような人々は、尾岐市街の通勤者がそうするように足早に階段を上ったりはしない。かといって沈鬱としているわけでもなく、ただ何と言うか：気性がのんびりなだけなのだ。

さしたる施設もないのだが、尾岐市街で働くサラリーマン家庭のベッドタウンとしては格好のロケーションであり、割と裕福な層も多く暮らしている。そういう地域事情からか、ことさら盛らず衰えもせず。この一帯、御旗地区は維持され――あるいは停滞していた。

誰にともなく歩幅を合わせるように、自分もまたゆっくりと階段に足を掛けていく。

御旗五堂駅（みはたごどうえき）と表示板がある2番ホームから連絡通路に上がり、大した距離も歩かぬうちに改札口。そこから小さな駅ビルをまた下階に降りれば、すぐ正面に出口が見える。

最近建て替えられた駅舎はどこも新しさがあり、けして広くは無いが清潔感が保たれている。昨年に一度取り壊される前に見た旧・御旗五堂駅舎は、生えたカビも手つかずな程に老朽化していたというのに。

ともかく、綺麗なことは良い事だ。

何より今日は気分もいい。足取りも軽く、駅舎から外へと踏み出した。

冷蔵庫の中身を思い返すに買い物の必要もないだろう、あとはまっすぐ帰るだけだ。

自転車置き場に向かうべく、壁に沿った自動販売機コーナーの前を通過しようとする。

すると、ふと、そこにいた制服姿の少女と目が合ってしまった。

目を逸らそうとして、思いとどまり彼女を見つめる。

御旗岳中の制服を着ているのは初めて見たが、その顔には見覚えがあった。

「ああ、ハセか。奇遇じゃないか」

「名字で呼ばないで」

ぶっきらぼうに言い捨ててから、少女は続ける。

「前に言ったでしょ、名字はあんまり好きじゃないって」

「はいはい。じゃ、ユリノ」

「ふん、それでいいわ。今晚は、打川先輩」

「その挨拶には、まだ少し早いがな」

「いいでしょ、別に。どうせすぐ夜になるわ」

馳由梨乃（はせゆりの）は御旗岳中学校の3年生で、例によって能力者である。

一つ違いという気軽さからかもしれないが、こちらに敬語を使うこともなく、基本的に口が悪い。

切れ長の釣り目の上に細眉が引かれ、口は常にきりりと結んでいる。中分けでストレートのセミロングヘアには髪一本の乱れさえ見当たらない。加えて顎をくつと引く癖もあって、とにかくまあ意思が強そうに見える子なのだ。

「5時過ぎはまあ割と遅い時間かもしれないが。こんなところで何やってんだ？」

「見ればわかるでしょ、自動販売機に用事よ。ここの飲み物は全品100円だからよく利用してるだけ」

「下校ルートでもないだろ、何で制服なんだい」

「……塾帰りよ。さっきの電車で降りてきたばかり」

「ああ：そうなのか。市内まで出てるのか？ご苦労さん」

「ふん」

斜め下を見るように、毅然としたままユリノが顔を逸らす。

「じゃあ、またな。また訓練時にでも……」

挨拶はその位で、ともかくこちらはお先に帰るとしよう。

手で会釈だけして彼女の横を通り過ぎ、足を進めようとしたが――

「待ちなさいよ」

その一言とともに、足がぴたりと止まった。

いや、正味なところ止まる気は毛頭なかったのだから、“止められた”というのが正しいだろう。無視して先に進もうにも、圧力がかかったように動けない。

それどころかぐいぐいと押されるように、後ろ向きに右足が、次いで左足が、一歩ずつ動かされていく。

「…やめろ」

それは真後ろに居るであろう彼女、ユリノに向けて言った。

「じゃあ、こっちの話を聞いてよ」

「仕方ねえ奴だな…わかったから解除しろ、ていうか人前で能力を使うな」

「ふん。誰も見てないわよ」

「探査には引っ掛かるぞ。…つい数日前に、実例もあったしな」

「……………」

黙ったと見えてからすぐ、身体を縛る戒めがずっと引くように解けた。後ろに寄っていた身体はバランスを崩しかけるところだったが、何とか持ちこたえた。

振り返り彼女を見ると、右手元にお茶の入った500mlペットボトルが掴まれていた。それはおそらく何の変哲もないお茶なのだろうが、彼女にとっては『武器』である。

「それで何の話だ？さほど急いでもないけど、手短に頼むぞ」

「大丈夫よ、そこまで込み入った話じゃないから」

「それならいいが……ん？」

「え？」

疑問符を浮かべると、同じように返した。

注意を向けた相手はユリノではなく、彼女の後ろに見えた別の人物である。視線の方向に気付いたか、ユリノもその方向へと振り返る。

「あ…ええと…そのう」

二人分の視線に射すくめられ、その小さな輪郭はいっそう縮こまった。

ユリノと同じ制服を着ており、違いはリボンの色くらいだった。斜めに垂れた前髪が、隠すように目にかかっているのが印象的な

少女である。

ふくらんだ小さなバッグを両手で抱える姿は、猫が丸いものに巻き付いた姿を思わせる。

ついでに加えて言うなら、たぶんこの子は猫背だ。

「……………」

ユリノはいかにも（能力を見られたか？）と憂慮するような横顔をしていたが、その心配は無い。全く今日は、奇遇に奇遇が重なったというか。

…小さなその少女も、知り合いであった。

「…よう、湊（みなと）」

「え、あ、ああ。なんだ、打川さんか…」

「何してんだい」

「訓練が終わって…帰るところですけど…」

どうやらそれはメイも自分も関与していない訓練らしく、ここ最近に通達を受けた覚えも無かった。

「ちよつと」

口を挟むように、ユリノがやや大きく声をかける。

その視線は湊ではなく、こちらに向いていた。

「ちよつと、打川先輩。来なさい」

「先輩に“来なさい”ってのもどうなん…うわっ」

言い終わる前に腕を強引に掴まれ、そのまま駅舎の壁際、自転車置き場の端あたりまで連れて行かれる。

ぽかんとする湊から背を向けたまま、彼女が手を離してこちらに顔を寄せた。

「誰。あの子」

「誰って、訓練生だよ。イコール、能力者だ。心配すんな」

「そうじゃなくて、名前は」

「湊春夏（みなとはるか）。春に夏と書いてハルカだったな」

「能力は」

「ええっと…あまり会わないから知らないな。そういや、基礎訓練で二回ほど会ったきりだ」

そこまで聞いてか、はたまた聞かずか。ユリノはずんずんと勢いよく元の場所へ戻っていく。詰め寄るように近づかれてか、いよいよ湊のおどおど加減が留まる事を知らない。

「馳由梨乃よ。御旗岳中3年C組所属、能力者をしてるわ」

「は、はい。わたしは、その…」

「名前ならもう知ってるわ」

「えっ…そ、そうですか」

「あなた、クラスは？」

「えっと、F組ですけどお…」

「違うわよ。能力階級の話よ」

「ああ、すみません…。そっちは、クラスCです」

「私と同じ…？席次は？」

「15番、です…」

「あ？私の一コ下なの？」

「す、すみません。…というと、馳さんは14番…？」

「ちよっと、悪いけど名字で呼ばないでよ。嫌なのよ」

「あっ、ごめんなさい…うう…」

ヤンキーが“お前ドコ中だよ”とでもいうような調子で尋問を続けるユリノ。可哀そうにも湊は、丸まる子猫から一転、チワワのようには震えつつかろうじて答えていた。

そろそろ助け船を出そうかと近付きかけた時、まったく思いがけぬことをユリノが口にした。

「せっかく会ったことだし、そこの待合所でお茶でも如何かしら」

：あるいは和やかなお誘いの言葉とも取れる一言だったが、その端正な顔はかけらたりとも笑ってはいなかった。

<04> 三人閑女の水入らず (後)

御旗五堂駅、待合所。

ガラス細工に包まれた丸電灯が、白と橙の二色いずれかを帯びて中空に釣られている。同じ形の無い繊細な手工芸品はイタリア製だろうか、西洋的な美意識を感じさせるデザインである。

…かといって奥を見れば、赤く大きな和傘の下に畳地の長椅子が置かれていたり、日本人のセンスらしい無国籍さ加減がうかがえる。

しかしながらそれを雰囲気の良い空間と思ってしまうのは、やはり自分も現代に生きる日本人だからだろうか。

まあそれはさておき。

入口近くの丸テーブルに三者が腰かけているこの場の雰囲気は、非常に重かった。

「……」

「……」

「……ああ、ともかく飲み物を買ってこよう。二人とも、何がいい？」

「え、あつ、悪いです……」

「気にすんな、おごらせてくれ」

「ん……うん、じゃあ、ミルクティーを……缶のやつでいいですから」

「わかった。……ユリノは？」

「必要ないわ。さっき買ったばかりだし、借りも作りたくない」

テーブルの上には、先ほど持っていた緑茶入りのペットボトルが置かれている。

「そうかい。……やれやれ」

重く感じられる腰を上げ、すぐそばの自動販売機コーナーに向か

う。

一口に自販機というと飲み物のそれを連想するだろうが、ここ御旗五堂駅の構内にはなぜか、ありとあらゆる自動販売機が置かれている。駅によくある売店が見当たらない代わりに、その役割をずらりと並んだ各種自販機が担っているのだ。

飲料類の半分は外に設置されていて、残りは構内の通路に沿うようにずらりと並び、そちらにはマニアックなメーカーのものも多々ある。

これだけかと思って振り向くと、驚くなかれ、三方が販売機だらけである。

まず左からアイス、お菓子、ガムにキャンディー、ハンバーガーにフライドポテト。各種軽食を飛ばして端のカップラーメンあたりで食料品は終わりだが、そこから直角に曲がると日用品が並ぶ。

歯ブラシ、タオル、ヒゲ剃りときて、乾電池にインスタントカメラ、新聞の隣で細く収まっているのは簡素な傘だ。

あとは右の壁面にぎっしりと、タバコと酒類がバリエーション豊かに揃えられている。

まったく自動販売機大国の面目躍如とでもいえそうな光景であった。

ちなみに以前はおつまみ各種もあったのだが、終電で帰ってきた酔っ払いが三次会を始めるもんだから廃止され、酒の方も販売時間が制限された。

一番ポピュラーなミルクティーと、自分用に野菜ジュースを一本買って席に戻る。

あいにく、中座していた間に何か話されたような空気はなかった。缶を渡すと、湊は小さく「どうも…」とお礼を言った。

「……………」

「……………」

「……………なあ、ユリノ」

「…何よ？」

「……………いや、何でもない…」

「……………」

ああ、なんとかもうこの場は解散させて帰りたいところだが。

しかし逃げようとすればユリノの能力で抑えつけられ、無理くりに引き戻されるのは目に見えている。

たまりかねてきよろきよと横や後ろを見回すが、人っ子一人…
駅員や清掃員さえ見当たらない。

さっき歩いて行った自販機コーナーも、しんと置いて人気はな
く……………

「……………ん？」

いや、一人いた。

端の方をよく見ると、酒の販売機に隠れるようにしてこちらを見
ている姿があった。

いやはや仏はどうだか知らないが、二度来た奇遇も三度目である。
そこにいた彼女も能力者であり、かつ知り合いだ。

——通号『トータル』、御旗岳中学2年。

愛中久澄江が、陰ながら様子をうかがっていた。

“ いいところに！よく来た！”と言わんばかりのこちらの表情を

しっかりと読み取ってしまったのか、露骨に愛中が嫌そうな顔をする。声こそ聞こえなかったが、半開きになった口はおそらく、「げっ」と言った。

「ああ、愛中じゃねえかー！そんなところで何やってるんだー？」

わざとらしいほどに大きな声で、逃げられる前に愛中に呼び掛ける。卓についている二人も、声を投げた方向を見た。

すると観念したのか、愛中は壁の陰からフェードインするようにそろそろと姿を現した。「あはは…」と苦笑しながら手を控えめに挙げ、見るだに重い足取りでこちらに歩み寄る。

「シンゴ先輩に、ユリノ先輩…それにハルカちゃん？ええっと、なに、してるの…？」

雰囲気は察しているのか、ぎこちなく愛中は挨拶をした。他二人はすぐには答えないため、仕方なくこちらで応じる。

「まあ、親睦を深めようということ、な…」

「そ、そうですかー…ははは…」

「ああ、たまたま会ったことだし、愛中も一緒にどうだ？」

こうなれば道連れに引き込むしかない。席を勧めると愛中は、二人に見えないように口角を歪めて非難してみた。

「…じゃあ、お邪魔しますねー…えっとー、ハルカちゃんとは久々だね」

「そうですね…基礎訓練の時以来です。あのときはお世話になって…」

「あはは、系統が違うとあんまり訓練じゃ会わないものね」

とりあえず湊とはそう知らぬ仲でもないようで、簡単なあいさつを経て空気も先程よりは大分ゆるんだ。

「湊はどういう能力なんだ？愛中みたいな念動系じゃないのか？」

「あ、ええっと…私は幻覚関係みたいです。まだ上手く使いこなせませんが…」

「へえ…通号は？」

「『シアター』というんですけど、自分でも、その、よく分からなくて」

ガタツ、という音がするどく構内に響いた。

…見ると、ユリノがその場に立ち上がっていた。

「お手洗いへ行くわ。…そこで待ってなさいよ、あなた」

「はっ！はいい…」

険に圧されて、湊が恐れとともに縮こまった。円卓から離れる際に、ユリノがこちらを睨んできた。本人としてはちらつと目配せをしたつもりなのだろうが、どうひいき目に見てもギラリと鋭いガンづけであった。

（来いつてことか…まったく）

なんとなく用件は分かっている。たぶん愛中も承知しているのか、こちらに流すように視線を向けてまばたく。そうそう、こういうのが一般的な目配せだよ。

「ああ、俺もトイレ」

「はい」

念を押すような愛中の返事を背に、トイレのある通路へと向かう。ここまでくると、今までいたテーブルからこちらの様子は見えなくなる。

ユリノはそこで、壁を向いて——首を垂れ、肩を落としていた。

「ああ…！もう、もうっ！駄目！こんなじゃ駄目よお！全然会話が續かないし、雰囲気も悪いしっ…。あの子にだって怖がられちゃったじゃない。ああっ、馬鹿！何でいつもこうなっちゃうの、何で普通に喋れないの…。同じクラスだし席次だって近いから、いい機会だしっ、仲良くなりたかったっていうのに…。ちっちゃくて可愛いから、なんか羨ましくて、緊張しちゃってっ…！」

…とまあそういうわけで、早い話が非常に不器用な奴なのだ。

“外面とプライベートの切り替えが下手”という分析は、たしかメイが言ったことだったろうか。さらにアガリ症らしく、緊張するほどに言動も表情も硬くなってしまうという。

「本当に、まったくなあ…」

そう溜息のようにこぼすと、俺がいる事に今初めて気づいたように、顔を上げてこちらを見た。表情は困惑したように緩み、先程よりは力が抜けてはいるのだが、元々の顔立ちのせいか怒っているようにも見えてしまう。

「ああ、先輩…どうしたらいいんだろう、私…。あの子、怖がらせちゃった…」

「そう心配せんでも…湊は湊で、引っ込み思案だからなあ。何ていうか相性が悪いよ」

「ううっ、どうしようどうしよう…だって、どう話しかけたらいいか分かんないしっ…あの子が何年生かも…」

「相当テンパってたんだな…リボン見ればわかるだろう。一年だよ」「そうなの…」

消沈したように、壁にごとと頭をつける。本人もこういう性質は治したいらしく、今回は後悔と自責もことに強いようだ。

しかしこのまま戻っても緊張は解けないだろうし、どうしたものかと考えていると、ポケットが震動した。

携帯へとメールの着信。送り主は、愛中だった。

先ほど愛中がそうしていたように壁陰から様子を伺うと、膝上に置いた袋に両手をつっ込んでいる。見えないように、メールを打ってきたのだろうか。本人は何やら紅茶の話を湊と交わしており、所作に動揺などはなく自然だった。

『ユリノせんぱいがまたやっちゃったんだよね？どうする？トイレからメールがあったとかにしてハルカちゃん帰しちゃう？』

メールにはそう書いてあった。一旦この場をお流れにしてしまおうという考えであり、消極的とはいえ解決案ではあった。

しかしながら目の前で落ち込んでいるユリノの様子を見ると、何とかしてやりたいと思う。

…まあ、まずは本人に相談するか。

「ユリノ。これ見ろ、愛中からのメールだ」

「え？…ええ。………これは…やっぱり…」

「そうだ、うやむやにして終わろうかとの提案だ」

「んん…仕方ないよね、うん…」

自嘲するように、彼女は顔を画面からそむけて言った。

「それでいいのか、お前は。仲良くなりたいたんだろ」

「そうだけど、でも、もう…」

「湊は素直な奴だ、ちゃんと話せば分かってくれる。俺も愛中もフオローしてやる。どんなに無様で不器用でもいいから、正直に自分

の事を教えてやれよ。じゃないと…湊も悲しいだろう」

「……………」

それでも決心がつかないのか、ユリノは迷うようにしばらく黙りこくっていた。

「あ、あのう…」

「「！」」

後ろから声を掛けられ、振り向く。

いつのまにか湊が、こちらにやって来ていた。

「お二人とも、戻るのが遅かったので…ええっと…」

表情や言動に含むようなところはなく、こちらの会話を聞いてはいなかったようだ。

「ああ、ちよつと話してたんだ。今戻るけど…その前に」

ぽんと、ユリノの背中を叩いてやる。

その身体はかすかに震えたが、しかし意を決したように顎を上げて、湊を見据えた。

「……あの、ね、みなとさん」

「は…はい」

「私は…あなたの事が…」

「…？」

「か、かっ！か……………可愛いと、思ってる、のよ」

「え、ええっ」

……………そ、そこからきたか。

「だから、……………ごめんなさい。そのせいかさつきも、緊張してて…」
「いいいえ、わたしこそ謝らないと…はせ…いえ、ユリノ先輩もきれいですから。わたしも緊張しました…」

「き……………！」

褒め言葉は言われ慣れてないのか、ユリノが驚いた様子で口をぱくぱくさせた。

「……………っ！ごめんなさいっ！」

「…え！？あつ、先輩っ…！」

顔を片手で覆うようにして、脱兎のごとくその場からユリノが姿を消した。

あとには俺と湊が、呆然と取り残された。

「……まあその、不器用な奴なんだ。分かってやってくれ」

「…は、はい…」

— — — — —

それからテーブルで苦笑いを浮かべていた愛中に経過を話し、ともかくその場はお開きとなった。湊はぺこりと丸まり気味な一礼をし、近くであるらしい自宅へと小走りに帰って行った。

「そーいや愛中、何でお前はこんなところに居たんだ？」

Tシャツに黒いジャージ下というラフな格好の愛中を見て、疑問を述べる。

「バスケの自主練帰りですよ、駅裏のコートで不定期に練習してるんです。部活はやってませんけどね」

確かに手にしているビニール地の袋は、ボールらしい丸みを持っていた。

「それでふとカップ麺が食べたくなって、ちょっと寄ったらこれですよ、もう…」

「いやいや、悪かった。でもまあ結果としては良かっただろう」

「んー：二人はともかく、私は巻き込まれ損じゃないですか」

「そうだな：じゃあ何かおごってやろうか？」

「カップ麺、とか言うのは駄目ですよ。ふふ、じゃあ：何も要りませんけど、一つ貸しにしておきますね。ではまた、訓練で」

何か良からぬことを思いついたような一言を残して、愛中は去っていった。

：ともかくは比較的丸く収まったが、しかしまあどうもこいつも癖のある連中だ。

そう言う奴らにこそ、能力がもたらされるのだとは以前に聞いた。しかし能力を得たことが、本人を変えてくれるということもあるのだろうか。

少なくとも接点の薄かったはずのあの二人は、こうやって奇遇にも知り合えた。

今日はともかく、それで良からうと思うことにした。

—
—
—
—
—

>04< 三人閑女の水入らず /了

—
—
—
—
—

給料日だ。

といっても、実は貰える日が決まっているわけではない。

月末が近付いた頃に、立会人の方からホイと渡されるうえ、内訳の明細も不明である。本部に問い合わせれば一応は分かるらしいが、前に簡単に計算したところ額自体は問題なかった。

時給は2000円と高額ではあるが、そもそも日給と時給がほぼ同義なのである。出勤日に1〜2時間だけの仕事で今月の総労働時間がちょうど20時間、つまりところ手取りは月4万。交通費も雑費も計上されず、福利厚生はどこ吹く風、あと残業代も出ないのだろうが今のところ残業自体していない。

およそ小遣い稼ぎ以上にはならないが、学生にとっては割のいいバイトだろう。

もっとも『超能力開発のアルバイト』なんてのを実例を見せられつつ募集を掛けられたら、大金を払ってでもやりたい人は出てくるだろうと思うが。

「：金額、確認しました。確かに頂きます」

「左に同じ。ありがとねえ、カワさん」

右隣に座るメイが、嬉しそうに封筒を手にして笑っている。彼女も労働時間は大体同じくらいで、金額はわずかな差である。まあ一万円ほど食費として頂いているので、俺より手取り金は落ちるのだが。

「もう3か月は経ったか。すっかり慣れたもんだな、お前らも」

向かいの席の正面に座る川藤が、水の入ったグラスの腹を爪の先で叩きながら言った。

居るのは川藤だけでなく、こちらから見て左隣りに真崎、右隣りには桐代と、主だった立会人が並んで座っている。

尾岐駅近くの複合ビルに店舗が入っているファミリーレストランは、まだ夕方ということもあって空いていた。窓からは駅前の往来が見下ろせるのだが、平日であるため賑わいは薄い。

「まあ、やることって言ったらボーツと訓練見ながらレポート書くぐらいですからね」

「今の内はな」

「：これからは忙しくなるんですか？」

「そうだな、あと一月もすれば。夏休みとなりやお前にせよ訓練生にせよ、都合が付けやすいからな。長時間の訓練や遠出も出来そうだから、やれることの幅が広がる」

「時間はともかく：あんまり離れた場所だと困りますね。交通費出してくださいよ」

「ふむ、その時になったら考えるがな。最もしばらくは暇になるんだよ、テスト勉強とかあるだろお前ら」

「確かにそろそろ期末試験ですが。そういうのも考慮してくれてるんですか？」

「一応な。無理に休んだりして一般人に勘ぐられると面倒くせえしなあ」

話を続けてるのは自分と川藤ばかりで、メイはいつからか手にした携帯を操作しており、真崎は肘につき瞬きもせず外を見ている。

桐代にいたっては、手元のクリームソーダとストローの殻をいじくるのに夢中である。夏のかかりだというのに相変わらず厚手のパーカー姿だが、今日は鮮やかな赤地で裾にグレーのラインが入ったものを着ていた。

「能力開発の全体的な進行としては、現状はどうなんですか？ 順調なんですかね」

「んー、そうだなあ…。それぞれ興味深いし、一部にはめざましい才覚が感じられるが―――まだまだってとこかな」

「へえ。特異性は皆が皆すさまじいと思いますけどねえ、性格含めて。そんなもんなんですか」

「ふ、今までお前さんが見たようなのは序の口だよ。もっと上位には“素質はあるけど事情があって後回し”、ってやつも多いからな」
「まだ上がある？ …ま、話半分に期待しときます」

口ではそう応じて見たが、川藤の口調と性格からすると嘘は無さそうだ。

「…しかしだ、何にせよ慎重にやっていくのが一番だろう。扱いを間違えれば大惨事になりかねないからな」

「ええ。それは確かに…」

例えば知ってる能力だけでも、『クレイ』で生き埋めにされたり『トータル』で丸く小さく圧縮されたり、あるいはもっとシンプルに『モデライズ』で真っ二つにされかねない。一応“能力使用者の思考影響を受けるため、生物には効果が出ない”とは聞かされているが、例外的な事象が発生しないとは限らない。

そもそも使用者の意思に左右されるのなら――“殺意があれば有効化されかねない”、という考え方もできる。

もっとも今まで見た中学生たちは素直な子ばかりだし、おおよそ温厚で血の気も多くないので、信頼はしているが。

ふと能力の話が聞かれていないかと周囲を見るが、他の客は遠めの席にしか見当たらず、店員の姿もない。注文した品が来るには、まだ時間がかかりそうだろうか。

周りの3人は話に入ってこないようなので、喋りっぱなしではあるが、とりあえずは川藤との話を継続する。

「いい機会なんで、もっといろいろ聞いてもいいですかね？」

「まあ答えられる範囲でなら構わんがよ」

応じながら川藤は、水をくいと一口呷った。

「じゃあまず：今現在、能力者って何人ぐらいいるんですか？」

「訓練生か？御旗岳に限れば、そうだなあ：」

天井に視線を送るように見上げ、指を折ってしばらく数えるような仕草をしてから答える。

「二十人前後、だな。まだ参加していないがする予定の奴を入れると、三十人にもなるか」

「“御旗岳に限れば”：ということは、他の地域にも？」

「さあ、どうだかな。残念だが、答えてはやれんなあ」

年に似合わぬいたずらっぽく笑みを浮かべて、川藤が無精ヒゲをなでる。

「んー。それじゃ別の話を。今のところ、最高でもクラスCの能力者にしか会ったことはないんですが、クラスB以上の能力者とは訓練ではご一緒出来ないんですか？」

「クラスBなら私はあるよー、一回きりだけど」

携帯画面を見ていた顔を唐突に上げ、メイが口を挟んできた。

「え、俺は聞いてねえぞ」

「ふふん、言っていないもーん」

メイは口をひよつとこのように尖らせ、おどけた仕草でそっぽを向いて見せた。

「ほう、そうだったか。誰に会ったんだ？」との川藤からの問いに、
「えっとね、Bの12番…だったかな。アサイ君っていう子だよ」
メイが知らない名を挙げる。

「ああ、阿斎かい」

「カワさん、ごぞんじ？」

「そりゃな、おおよその奴には会ってるよ。通号は『ホワイト』だったか。…とまあ打川、そういうこった。ちよつと順番が前後したぐらいの話で、おめえもすぐにクラスBに会うだろうさ」

「ふうむ…。で、やっぱりCとBでは、能力に開きが？」

「数値として明示されるものではないが…やっぱりBの方が“特殊”なのが多い。性格や気性も含めてな」

そう言われると、先ほど考慮していた危険性の話が頭を再びよぎってしまふのだが。まあ、ちゃんとリミッターが掛かっていることを祈ろう。

「ね、私からも質問いいかな、カワさん」

「ああ、どうぞ」

「能力開発やってる組織ってさ、どんなふうに運営してるの？」

「…どんな風、というと？」

「ビル借りたりして場所用意して、時には人払いまでしてるから気になってさー。能力開発は非公式で認可もないものだって聞いたけど、けっこうなお金出てるよね。どうしてるの、その資金って？」

「……………」

ズバツと骨もろともとばかりに斬り込むようなメイの質問を受けて、川藤はたまらず黙ってしまった。

が、これは自分も気になっていたところなので、あえてここはス

トップを掛けないことにしてみる。

そのまま川藤は沈黙をしばらく続けていたが、

「決まってんじゃない、金持ちがバックについてんだよ」

答えたのは、我関せずを決め込んでいたはずの桐代だった。手にはスプーンを持ち、半分ほどに削られて浮かぶアイスの残りを弄んでいる。言われて川藤がちらりと桐代を見た一瞬、その目の色にわずかな動揺が浮かんでいた。

「そういうのに興味を示す奴ってのはどこにでもいるからね。もっともあまり大勢に知られても困るから、ごく少数にしか話は通してないけどね。だから――」

手首で一回転させるように、白くなったスプーンをくるりとこちらに向けて、

「スタッフも、せいぜい君たちぐらい。まったく限られた少数だ。超能力なんてたわごとは、僕ら立会人と君らのみが知ることさ」そう言った。

「…何で、俺たちなんですかね」

これも、当初から気になっていたことではある。

アルバイトには、自ら志願したわけではない。何しろ、メイがやってきて間もない頃に自宅を訪ねて話を持ちかけてきたのは、目の前に居る桐代本人なのだ。

「そりゃあまあ、御旗岳に近かったって事がひとつ。あとはそうだな、うちの社長……いや、“会長”とかの方が通りがいいかなア？ 彼…」

「……桐代」

短く名前だけを呼んだのは、依然と窓の外を見続けている寡黙な男、真崎だった。

「ん？何だい……真崎」

「大概にしろ」

やはり視線も表情も変えず、続ける。

「喋り過ぎだ」

「へえ、具体的にどの部分が“喋り過ぎ”だっていうのオ？」

どこか普段よりも挑発的に、真崎の方を向いて吐き捨てるように言う。

「……お前は…」

じろりと、眼球だけで真崎が桐代を睨みつける。間に挟まれた川藤は緊張気味に顔色も青く、双方を交互にせわしく見ている。

「事情の暴露に不都合があるって言うのかアい？『マルキス』」

「弓を引く気なら一切の容赦はしない。そうは言った筈だ、『ナル』」

時ならぬ剣呑さに、自分も川藤同様、刃物を突き付けられたようにすくんでしまっていた。

<05> ファミリア・ブレイク (後)

口の挟みようがない張り詰めた空気に、
しかし声を掛ける者が意外なところから現れた。

「お待たせいたしましたー」

それはまったく能力談義とは関係ない一般人であり、声のした方を見る一同の目にも含むようなところはなく――早い話が、このファミレスの女性店員であった。

お盆に“ある一皿”とスプーン&フォークだけを乗せてやってきたようだが、あいにく自分は“その品”を頼んだ覚えはない。共にやってきたメイに川藤も、後から席に参加した桐代も“そんなものを頼んだ姿は見えない。”

誤配だろうと思い、その旨を伝えようとしたが、彼女は続けた。言った。

「『デコカワ☆キラキラ☆3色ミックスふわふわアイス入りスイートジャンボパフェ』お待ちのお客様ー」

：やはり品名には聞き覚えがない。

だが、驚くべきことに、手を挙げる姿があった。

「俺だ」

常に全身を黒で統一したファッションに身を包む寡黙な長身。彫りの深い顔に厳として無表情を浮かべた――真崎である。

「はい、どうぞー」

朗らかにウェイトレスが手を伸ばして彼の前に皿と食器具を置き、一礼してスタスタと去って行った。

先ほどとはまた違う空気が卓に落ち込み、流れる。

ぷつと噴き出して、最初に沈黙を破ったのは桐代だった。

「あはっ、ハハハハッ！何だよそれ、そんなもん頼んでたのかよ！」

「……………」

真崎の表情は変わらないが、桐代を睨んでいた視線は窓の向こうへと戻されていた。

「あはは！いや、面白いもんだね。随分ジョークの才能があるじゃないか、真崎」

心底おかしそうにひとしきり笑った後、桐代がこちらを向く。

「…ま、さっきの発言は取り消そう。二人も忘れてくれるかい」

「ええまあ、そうします…」

「うん、わかったー」

それでもとかく、再びその場は和やかな雰囲気落ち着いた。

程なくしてそれぞれが頼んでいた料理が運ばれてきたため、食事をしながらぼつぽつと話を続ける。

川藤はヒレカツ和食、メイは鶏肉とキノコの Pasta。俺が頼んだのはジャンバラヤで、桐代は食事は頼まずクリームソーダだけでいいらしい。

…そして真崎の前に置かれたふわふわアイス入りパフェとやはらは、

目を逸らした隙に少しずつ消費されており、食べているところ自体は見られなかった。

「普段はゴハンどうしてんだい、打川」

今度は桐代からこちらへ質問が来る。

「冷凍食品とか、レトルトとか：あんまり料理はしないですね。面倒ならコンビニで済ませます」

「狩野も料理は駄目かい」

「んー、たまに勉強してるけど：上手くはなんないかなあ」

「：お前は途中から独自の味付けを考案し始めるのが問題だろう」

「えー、だって普通に作ってもオリジナリテイがないじゃんさー」

「普通に作ってみてから言え」

食えないほどにまずくなったりはしないが、大体味付けが濃すぎか薄すぎの二択になるのである。

「そういう加減にモノ食ってたら、栄養が偏るんじゃないのか」

今度は川藤が、さほど真剣でない調子で言う。

「大きなお世話ですよ。それにバランスは考えて摂ってます」

「若いうちから苦労なこったな」

「ま、食えるときに旨いもん食つといた方がいいんじゃないの？年をとると脂っこいの食えなくなるしさ」

そう言う桐代が食べているクリームソーダも年相応とも思えないが。

「そもそもいくつなんですか、皆さん」

「さア。そういうの考えるとだるくなつてさ、忘れがちだね。年が回って一つ数字が増えても別に有り難くもない」

「あー、同感だなあ」

真崎も入れた3人をそれぞれ見ても、どうにも年齢不詳の面構え

をした人々である。

こちらが思っているよりずっと年かさなのかもしれない。あるいは超能力でアンチエイジングしてないとも限らないだろう。

超能力で、どのくらい融通の利くものなのかは分からないけれど。

しばらく取り留めの無い会話を続け、食事を終えかけたころ。

不意に、真崎が口を開いた。

「急用が出来た。帰る」

手にした携帯を閉じながらそう言って真崎は立ち上がったが、あいにく奥の席なので横の2人がどかないことには出られない。

「そうかい、じゃあ支払いはこちらでしとくよ」

川藤はそう返したが一向に動く気配はなく、桐代も同様であった。

…と、右に目を逸らした直後。

真崎はこちらの背の側、斜め後ろに音もなく移動していた。

「ずいぶん不用意じゃないの？真崎。あんま日常生活で能力使うもんじゃないよ」

「あいにく急ぎだ。失礼する」

それだけ言って、静かな足取りで真崎は去って行った。

彼がいた席の前には、クリームの一滴さえ残っていない、洗いたてのような皿と銀色の食器だけが残っていた。

「おやまあ、お忙しいことで」

「一人で大丈夫ですかね」

「こっちらにゃ連絡来てないし、気にするだけ損だよ。呼ばれたら僕も行くさ」

「了解です」

川藤と桐代は顔を見合わせて、よく分からない会話を交わした。

— — — —

「……『マルキス』って呼んでましたけど、あれ、何なんですか？」

会計を済ませレストランを出て、桐代が去った後で川藤に疑問を投げた。

「……あー…ゲームでのプレイヤー名だよ、確か。ネット対戦育成RPGだかの」

「…真崎さんがゲーム？」

「意外と思うかもしれないが、あの人はああ見えてハマり性だからな。そのうえ多趣味で飽きっぽいんだ」

「そりゃちょっと、にわかには信じられませんが…」

「本人に聞いてみたらどうだ？ まあ、今日はお疲れさん。じゃあな」

「ああ、どうも。ごちそうさまでした」

「ごちですー」

給料日だけは川藤も羽振りがいいのか、こうやって奢ってくれるのが常になっていた。

礼を言う気にするな、とばかりに口だけで笑う。

飄々とした様子で歩み去る彼の背中、わずかにくたびれても見えた。

「立会人も大変みたいだね」

「川藤さんだけはな。中間管理職、ってとこなんだろうか」

「板挟みって訳でもないんじゃない？ 奔放な『上』に振り回される方がメインでさ」

「『下』である俺達が負担にならないようにしたいところだがな」

立会人には謎が多く、組織についても良くは知らない。

不明な実情がある以上、いずれこのアルバイトにも終わりが来るのかもしれないが、それはそれで構わないとも思っている。

自分が能力を使えないのだから、どうしたってただのアルバイト以上にはなれない。

この業種にこだわる理由もなく、二度ありつけるような普遍性のある仕事でもない。

自分はともかく。辞めることになったら、メイはどうするのだろうか。

もつとも聞いてみたところで、彼女は何も語らないだろう。

メイもまた立会人たちと同様に、奔放であり、その時々で物事を決めるのだろうと思う。

そういう生き方の出来る彼女を内心、羨んでいる。

「どしたの？ 帰ろうよ」

「……そうだな、まずは帰るか。次の電車はいつだったけな」

「いつでもいいよー。帰り方なんて、いくらでもあるんだもの」

目の前をくると回るように歩きながら、メイが笑って返す。
どうしたって彼女は、自由で、奔放だった。

— — — —

>05< ファミリア・ブレイク /了

—
—
—
—
—

朝は挨拶や一杯のコーヒーから始まるのが常だが、その日はまず出席を確認した。

「よし、お前ら起きてるかー。点呼いくぞー。D-28、青山ー」

「うーい」

「C-19、猪吹」

「へーい」

「C-21、井房野」

「……」

「…おい、いぶさのオー！てんこ！いぶさのてんこ！」

「ふぁー…ふぁい。なんですかぁ打川先輩、てんこてんこと。ギャグですか」

眠そうな目をこすり、御旗岳中1年の井房野転子（いぶさのてんこ）がともかく返事をした。

内跳ねの髪は茶色がかっているが、染めてはおらず地毛だという。眠い眠くないは置いとしても垂れ気味な二重瞼を重そうに閉じて、他の2人同様に御旗岳中の運動着をまとっている。

集まった三人ともが1年生であるが、他にもある似通った事項があり、それゆえに今日まとめて集められた。

「偶然だ。それに自分の名前をギャグとか言うなよ、お前。親御さんに貰った名前だろう」

「音はともかく、もっという字を当てて欲しかったかなあ」

「そう贅沢を言うな。何か意味があるはずだろう…ともかく、全員居るな。確認した」

「あれ、メイさんはいないんですか？」

猪吹がもつともな質問をする。

「家で寝てる。まあ俺一人で十分だ。立会人もいらないうて話だしな」

「内容としては、何するんスカ？詳しくは聞いてないんスカよね…ただ訓練じゃないとしか」

「ええつとなあ…」

手にしたおなじみのバインダーに挟まれた用紙を繰り、答えるべき項目を探す。

「『御旗岳台地の地質調査および台地内の能力反応体の確認』……らしいな」

「地質調査ってえ、先輩は専門知識とか持ってるんですか？」

「地学は嫌いじゃないが、そんな大層なもんは無いな。まあ見て感じたままを書いてこいとよ」

「じゃあ俺たちは別に必要ないんじゃない？」

「お前らがやるのは後者、能力反応体を探す方だな」

「そう言うタイプの超感覚は持ってないっスよ？本部の探査チームにやらせればいいんじゃないっスカ」

「ああ、その通りだ。だから探査は済んでるらしい」

言いながら地図の書かれたプリントを引き抜き、裏返して3人に見せるように掲げる。

「この×印が反応箇所だ。複数回のサーチを経ており、間違いはないらしい」

「じゃあそこに行って見てくればいいんじゃない？先輩だけでも良くないかなあ」

「あいにく俺では無理だな、何せ……」

プリントを水平に表向けて、その用紙ではなく×印の“垂直線上”を指して続けた。

「その反応体ってのは、地下に埋まってるらしいんでな」

自宅のある御旗岳台地の頂点付近には、広大な草原が広がって見える。

我が家を含めてわずかに六軒、一区画分の家が端の方に少しだけ建っているだけで、短い草が生えそろったその土地は手つかずである。

十分な用地があるなら何か大きな施設を作るなり団地にでもするなり、やりようがあると思うだろうが、そうもいかない事情があった。

「うえー：ひどいぬかるみですねえ」

「梅雨も空けきつてはないからな、でも今年はマシな方なんだが。足を取られないようにしろよ」

「こんな状態だから、立会人も来るの遠慮したんじゃないのかなあ」

「：一応、忙しいとは言っていたがな：」

遠目には緑一色の草原なのだが、近付いてみるとドロドロの湿原なのである。

台地の南側に面する自宅付近は比較的地盤が安定しているのだが、それ以外のほとんどがこの有り様だ。

三人には家にあった長靴を貸し与えているが、それでも歩き慣れていない彼らの足取りは物理的に重い。

「目印も何も無いのに、その地図だけでわかるんスカね？」

「遠距離からリアルタイムで探査してくれるって話だが：」

「その探査する人が直接来ればいいんじゃない？」

「あいにく住まいが遠くだそうで、簡単には来れないらしい」

プリントには探査能力者の電話番号が書かれていたが、名前までは記載されていない。

「もう少し歩いたらその人に電話をかけるつもりだ、それまで気張って歩けー」

「…ねえ先輩、ちょっと聞いていいですかあ」

独特の高く気だるい感じの声で、井房野がこめかみに沿えるような仕草で手を挙げた。

「何だ、井房野」

「なんで私と呼ばれたのかなあ、って。こういうところじゃわたし、能力使いにくいよ？ただでさえ足場悪いしい」

「んー…まあそうだな…なんか理由はあるだろうとは思うが…」

井房野に渡した長靴の方に、ちらりと目をやる。

確かに彼女は能力者の中でもかなり特殊な側面を持つ。

系統は能力者としては一般的な念動力系なのだが、

——力の発生する場が、『足の裏』なのである。

場所が限定されているだけなら愛中の『左手』のような例もあるが、足だけというのは知る限り他に居ない。とはいえ距離の狭い愛中と違って、足裏の向いた方向なら割と長くまで効果を伸ばせるらしいが。

「まだですかー、シンゴ先輩」

わずかに焦れるような猪吹の声に、思考をやめて辺りを見渡す。

「……まあ、そろそろかもな。一旦止まって休め、電話してみよう」
ポケットから携帯電話を取り出して開き、記された番号を打ち込む。

呼び出し音が二回、三回、四回に五回：

七度目辺りでもしや出ないのかと不安になりはじめたが、ちょうど十度目で繋がる反応がした。

『……はい、もしもし』

少しかすれていて低めだが、女性らしい声がした。

「もしもし、訓練補助の打川と申しますが」

『ええ、用件は分かっています。これから探査を始めますが、コンパスはお持ちですか』

「…ええ、用意しています」

左手にはプリントに記載されていた通り、一般的なコンパスをすでに握っていた。

『では、この電話とコンパスをC－19に渡してください。後はそちらに指示します』

「え、どうしてですか」

『能力者と反応体の相対距離を測るのが最適な手ですから。一般人をサーチするとなれば神経を使うため短時間が限界なのです。そのためその場でもっとも反応の大きい能力者、C－19を指標とします。待ちますので、電話をおかわり頂けますか』

「…わかりました」

少し離れてしゃがんでいた猪吹を呼び、手早く説明をして携帯とコンパスを渡す。

「はい、替わりました。猪吹です。……はい。はい」

電話に応じて相槌を打ち、コンパスを見ながら猪吹が歩き出す。

二十歩程歩いてから、止まるように言われたのか突然ぴたりと動きをやめる。

その場に足を揃えて何事かを話した後、猪吹は携帯を操作して電話を切ったようだった。

「通話は終わりましたよ、シンゴ先輩。この真下だそうです」

そう言われて自分を含めた三人が猪吹の元に寄るが、地面表面には特に変哲があるようには見えない。

コンパスと携帯を受け取りしまい直すと、聞きたかったことを先に井房野が聞いた。

「リンド、この下ってのはいいんだけどさあ。どんくらい下なの」

「“およそ10メートル弱”って話だったよ」

「そんなに？ けっこう深いなあ…」

仮に普通に掘り出そうとすると、何日かかるかも分からない。

ましてや足場も悪く、ちょっと歩くだけでも疲れるような土地である。

探し物が何なのかは知らないが、掘り起こすのはそう簡単な作業ではあるまい。

「じゃ、ここから俺の出番って事でいいんですかね？」

猪吹が顎を引くようにして、にっこちらに笑いかけた。

「まあ勿論だ、遠慮なくやれ。とはいえ慎重にな」

こちらの注意を聞き終わる前に、猪吹は汚れるのもお構いなしでべちゃりと両手を地面につく。ぬかるんだ大地は力の伝達をあらわすように、波打つように盛り上がり、円形に波紋を広げた。

猪吹の両手を中心に、『クレイ』と称されるその力は、始動した。

…土を操る能力とはいえ、今回は地下での操作になるため表層には変化が現れない。

反応体と接触したのちは、念動力の操作により周囲の土ごと引き上げる段取りになっている。推測されるサイズとしても小さいものらしく、せいぜいアルミ缶ぐらいの大きさらしい。

ともかく進捗は、猪吹に口頭で尋ねるよりほか無さそう。

「どうだ」

「んー、見た通りの水気の多さですねえ…乾いてるよりはマシですが、力の浸透に時間はかかりそうかな。とりあえず5分下さい」

頭の所々で逆立った猪吹の癖っ毛が、ちりちりと揺れ動いている。

「リンドのそれってさあ、どのくらい進行したか分かるもんなの？」

暇をもてあました様子の井房野が、緩慢に屈伸運動をしつつ猪吹に話しかける。

「具体的には無理だねえ、少なくとも今は。目測が取れないし様子も見えないし。でも進行方向は分かる」

「遠いほど操りにくいかあるの？わたしのはそうなんだけど」

「そういうのは無いな。操ってる量が増えると、操作しにくくはなるけど。今回は最短距離で棒状に土を集めて進ませてるから、10mぐらいなら間に合うだろうなあ」

気楽に会話を交わしながら、両手の数メートル下、見えないところで猪吹は能力を操り続けている。口調に緊張もなく、今のところ作業は順調なようだ。

「そーいやお前ら、親しいのか？」

訓練で猪吹と井房野が共に居るのを見るのは初めてであり、気になったので聞いてみる。

「何というかまあ、いわゆる腐れ縁というやつですよ」

「家も近かったし、小学校は人少なくて1クラスだったからねえ」

「あとはやっぱり：名前もありますかね」

「名前？『隣人』と『転子』がどうかしたか」

「何言ってるんですかあ、名字の方だってば。『いぶき』と『いぶさの』で似てるし、出席番号順になると並んじやうわけ」

「ああ、なるほどな」

「それでまあ、話す機会は多かったからかなあ」

「趣味も話も合いませんけどね：」

「何よ、それこっちの台詞なんだけど。全っ然合わせる気がないのは誰だと思ってるのさあ」

口調ほどの怒りはなく、からかうように井房野が返す。

「そうは言うけど、そもそも転子が……む……」

話の途中で、何かに気付いたように猪吹が片眉を上げ、首を傾ける。

「どうした。：悪い知らせか」

「残念ながら、たぶん……」

一度言葉を切り、神経を研ぎ澄ますように手を見つめ、集中に入る。

数十秒ほど緊迫した表情で沈黙を続けたのち、猪吹が口を開く。

「：や、駄目ですね。これ以上進めないです。この先は：『土』じゃない」

「なんだって？何があるんだ、地下水脈とかか？」

「それなら感覚で分かりますし、力の通った『土』なら水流の中でも問題無く進行できます。だからたぶん岩盤か：あるいは鉄板とか

…？とにかく何か硬いもので一帯が覆われてるみたいなの…」

「迂回する事は」

「試しましたが、どうしても周囲に土が無くて通りません。それに距離としては大分限界近いはずですし、直線方向以外に曲げると力が減衰します」

「なんだよおリンド、さっきの威勢はフカシだってこと？」

「別に嘘は言ってねえよ…」

無然としつつも、猪吹の語調はしぼんだように弱まっていた。

「…しばらくは維持できますけど…どうしますか、シンゴ先輩」

「ううむ…はいできませんでしたー、っていうのも悔しいな…」

しかしながら地下10m地点に干渉する方法もない。

「地上にある岩を割る、とかならいいんだがな」

「…こっち見られても困るなあ。わたしも役には立ちたいけど、ねえ」

『クラック』。

C-21・井房野転子の能力は、そのように号されている。

簡単に言うと、踏んだ部分や蹴った部分に“ヒビを入れる”能力である。

性質は『モデライズ』などに近く、どんな物質も壊せるが水や火を断つことは出来ない。

ヒビを伝うように伸ばすこともできるが、今のように水気が含まれた土では思うようにヒビを入れられないはずだ。

「地盤がこれだもの。泥にヒビは入んないよ」

「うーん、まるっきり土関係の能力者ってわけでもないものな」

「乾いた土地ならボロボロに出来るけどね」

「青山はー…まあ無理か」

「い、一応検討ぐらいしてくんないっすかね…まあ似たような理由で無理っすけど」

「ああ、ちゃんと呼ばれて来てたんだ青山君。…勝手に調子こいてついてきたのかと…」

「んっ…!? いま井房野さん、何気にひどいこと言わなかったっすか」

「こいつは割とそんなもんだ、慣れろ。さあてどうすっかなあ…」

まあ仕方の無いことではあるか。

現状では打つ手なしと見て撤退の方向で考え始めたが——それを青山が遮った。

「あ、ちよつと考えたんすけど…」

「ん?なんだ、言ってみろ」

「ええと、でも先に確認しないと。なあ隣人、能力で土をガチガチに固めることってできる?」

「?あー、一応は。今やれって言われると維持が難しいかもだが、まあ一分ぐらいは」

「そっか。じゃ井房野さん、ヒビの射程ってどれくらい?」

「えーっと…規模にもよるけど直線なら最長50mは行ったかなあ…って、まさか」

「うん。固めた土を伝ってヒビを伸ばせないかと思って。土に触れた状態でそのままヒビが伝われば…」

「…なるほどな、考えとしてはアリだ」

岩盤の一部さえ崩せれば、『土』を通して反応体を回収することは可能かもしれない。しかしながらその作業は視覚に頼れず、勘と経験でなんとかするしかないという難しさもある。

「どうする。できるか…いや、やるか?」

「…やってみるだけは」

「面白いとは思うねえ。やろっか」
さほど迷わずに、二人は答えた。

「んー、けど…そうになると本気でやらないとねえ。先輩、ちょっとこっち来て」

「あん？ ああ……」

呼ばれるままに井房野に近づく。…すると、急に肩をぐっと掴まれた。

右手を乗せて、こちらに寄りかかるように重心を預けてくる。

「これ、脱いじゃうからあ。ちょっと支えてて、んっ…」

言いながら井房野は、小さめだったらしい右の長靴を窮屈そうに外し、それからソックスも脱いでしまった。

何となしに彼女の足の甲を見ると、白い肌に静脈がうすく浮かんでいた。すると、靴下を長靴の中に入れていた彼女と目が合った。

「…あー、先輩ってばあじろじろ見ちゃってえー。んふふ、見物料取りますよ」

「アホ言ってるな、集中しろい」

結んだ口の端をくつと引くように、彼女は鼻だけで笑う。

俺に支えられたまま移動して、井房野は猪吹の前に立った。

「さ、やろっかあ。いける？」

「経験はなくてもないしな。転子こそどうなんだ」

「誰に言ってるの。障害なんてぶっ壊したげるからあ、さっさと引き上げましょ？」

「ああ。…行くぞ、一発で決めろ」

通じ合うように視線を交わし、二人は同時にうなずいた。

「……せえ、のッ！」

ブシュッ！と水が噴き出すような音がして——それから低い地鳴りを聞いた。土から水分を排出して、地中へ押し出す音が響いているのだ。

「よし、終わった！……やれっ！」

「オツケえっ！」

猪吹の両手の間。乾かされた土に向かって、井房野の素足がスタンプを押した。

ベキッ！と木材が割れるような鋭い音が、靄がかかる朝の空に響き渡った。

それきり、二人とも動きを止めた。

どちらも眉間にしわを集めて両目を堅く閉じ、意識をそれぞれの能力に集中させている。

……長い時が経ったように思えたが、実際は十秒ほどのことだったのだろう。

不意に、視界がぶれた。衝撃が伝わってか、縦に地面が揺れたのである。

「リンッ！」

目を閉じたまま、井房野が短く叫んで猪吹に呼びかける。

「……残念。手応えは薄かったよ……」

力尽きるように彼女は、後ろに尻餅をついて脱力する。

「いい意味で、だけどねえ。……割ってやったよ、ボロボロにね」

……そう言って、先ほど同じ笑顔を浮かべて、こちらを振り返った。

「……よし、捉えた！引き上げる！」

猪吹が目を開き、力を込め直すように両腕をぐっと曲げた。

声を挟む間もなく地面から土が湧き、球体状に輪郭を作って盛り上がる。

両手の間に現れたその中に、おそらく目標の物が包まれているはずだ。

「……う…」

「！おいっ、隣人！？」

安堵からか横向きに倒れそうになる猪吹を、慌てて青山が支えようとするが――バランスを崩しもろともに転げた。

「ははは…！まったく、しまんねえなあ…」

べっちやりと泥のついた青山の顔を見て、頬を地につけたままおかしそうに猪吹が笑った。

— — — — —

「…それで、これがその能力反応を持ってたっていう…？」

いぶかしむ様にメイが、庭の地面に置かれた“それ”を見つめる。

ミッシェンクリアとばかりに凱旋した我々を出迎えた彼女は、「んもーこんなに汚しちゃってー」と開口一番に寝ぼけながら言った。それから各自持参してきていた学生服に着替えさせるべく中学生組を家の中へ招き、井房野はバスルーム、男子二人は居間に通された。

庭にはメイと自分しかおらず、あとは『反応体』があるだけであ

る。

「で、シンゴ。これって、何だと思ってる？」

「…まあ、岩じゃねえかな？化石か？」

「にしたって半端だよねえ。トカゲかなあ、これ。しかも半分だけ…？」

「トカゲといえど尻尾切りだろうけど…にしては切るところが違うな、真ん中からバツサリだ」

白いコンクリートのような石、石灰岩だろうか。

その縁辺りから爬虫類、あるいは両生類の輪郭が片側半身だけ浮き彫りになっている…『反応体』はそういう物体だった。

「…超能力トカゲ？」

「まあ、否定もできないが。なんというか阿呆みたいな話だな」

ともかく危険な物には思えないが、あいにく価値も分からない。そのうち立会人が来たときにでも引き取ってもらおう。

「はー、疲れた。んでシンゴ先輩、今何時ですかね」

「まったく、時計見るぐらい自分でしろ…まだ8時にもならんな。始業には間に合うだろ」

「そっすかー、じゃああのんびり行っても大丈夫っすかね」

「お待たせえ、着替え終わったよー」

三人が丁度良く揃い、縁側に所狭しと集まった。

「みんなお疲れー、ごめんね行けなくて。運動着は洗ったげるから、帰りにでも取りに来てー」

「へえーい」「どうもお」

「えーっと、俺のクラス今日体育あるんすけど…」

「ああもう、やれやれだな…俺のお古で良けりや貸してやるよ」
「わー。どうも、スンマセン」

賑やかにひとしきり会話を交わしてから、3人は並んで表坂から登校していった。

「やれやれ、若い連中は元気なこったな」

「もうシンゴってば、カワさんみたいなこと言ってる。…あれ、学校はいいの？」

「遅刻は免れられねえと思って、午前中は出席できないって高校にや連絡してある。あー、疲れた…昼まで寝るわ。十二時ちようどに起こしてくれ」

「ういー。んじゃおやすみー」

朝っぱらからぬかるみを歩き回って、結局トカゲを引っ張り上げただけで終了。

一応すべきことは達成したのだが、あまり実働してない為かやりがいもなく、徒労感に近いものを覚えた。

壁を伝うように身体を手で支えながら、階段をぐったりと登り自室へと戻る。

ああ、なんというかまったく…。
泥のように、眠りたかった。

— — — — —

>06< 台地に眠るサンショウウオ /了

—
—
—
—
—

訓練の無い日だったが、今日はひとつ約束があった。

授業中や昼休みなどに何度かそのことを心中で確認しては、留意し直した。

割と記憶力には自信が無い方で、うっかりと大事なことを失念することも、ごく稀ながらある。大体はメモを取って確認するようにしているが、その約束だけは頭の中だけに留め保っていた。

：まあ何というか：気恥ずかしかったから、だろうか。

靴を履きながらそんな考え事をして尾岐山高校の昇降口に出た時、中学時分の同級生に偶然会った。

「やあ」

「おう」

久しぶりというほどでもないが、クラスが違うため会うことは少ない。

“彼”は友人かと言われると、言い回しに悪意は決してないが微妙なラインである。ことさら親しくもなく共通の話題も少ない『知り合い』なのだが、割と気の合うやつで居ると落ち着く。クラスや地元にもそこそこ親しい友人はいるが、自分が話を聞く側に回りがちなためか、割と騒がしく話好きなタイプが多い。

そういうこともあって、彼のような物静かで理性的な知人は希少だった。

「この時間に帰りかい。打川は、部活には興味無かった？」

「そうだな、ピンと来る奇抜なのが皆無だった。草壁（くさかべ）

こそどうなんだ？」

「文化系は少し気になったけど、本気で取り組むとなると敷居が高そうだね。それほどの情熱はないよ」

「運動部はどうだい、お眼鏡にかなわなかったか」

「嗜んでるような種目の活動は無かったな。マニアックなスポーツには部費も出せないみたいだ」

その物腰だけでは分かるまいが、草壁帆悟（くさかべほうご）は浅黒くて肩幅が広く、がっしりとした体格を持つ男である。“彼って何部所属だと思う？”と道行く人に聞けば、十中八九は“ラグビー部”と答えるであろう。

中学に入りたての頃はここまで強靱な見た目でもなかったのも、成長期というのは神秘の一種だと見るたびに思う。アウトドアスポーツ全般が趣味であるらしいため、いちおう筋力の理由に関しては明確なのだが。

「立ち話で時間の浪費も何だし、駅まで行こうか」

「ああ、いいけど：電車は別なのか？」

「駅ビルで買い物をしたくてね。家族からこまごましたものを頼まれちゃって」

「そうか。じゃあ駅までは」

合わせずとも似たような歩幅で、さほど距離の無い道を歩き出した。

「打川はC組だったよね。そっちの雰囲気って、どんな感じだい」

「他はどうか知らんが、まあ騒がしいのは分かるな」

「いいね、楽しそう。F組は静かというか、誰もしゃべんなくて息の詰まる空気だね」

「まだ打ち解けないってだけだろう。じきに皆はっちゃけるさ」

「そうかもね。けど何というか、ムードメーカーがいない感じ。あ

るいはリーダーか。誰かが音頭を取らなければ停滞は長引くかもよ」
「草壁が率先してみたらどうだ？」

「はは、冗談だろ？」

「ああ、冗談だよ」

互いに含むような皮肉などはなく、どちらかというと社交的な会話を続ける。

あまり学生らしい卑近なトークにはつながらないが、彼らしい落ち着いた受け答えではあった。

「そういえば一昨日だったか、トイレで水戸川（みとがわ）に会ったのけどね」

名前の挙がったその日も同じ中学にいた友人で、さらには同じC組に在籍しており日々を騒がしく過ごしている。

「へえ、それで？」

「打川の事を話してたよ。『珍しいことに、たまに忙しそうにしてる』ってさ」

「まったく、よっぽど俺は呑気者だと思われてんだな……」

「実際、中学の時の君はマイペースだったよ、いい意味でね。同年代には見えないほど落ち着いてたと思う」

「外から見りゃそうだったのかね。中身は普通の中坊だったよ」

「ふうん、そう言うならそうだったのかもね。……ところで、何か忙しいのかい？」

「え……？……いや、電車時間に間に合わないと思っただから、下校を急いだりしてるだけだ」

「おや、そう？じゃあ急ぐといいよ、引き留めちゃったね」

「なに、駅もすぐ目の前だ。じゃあここで。またな、機会があれば」
「うん。また話せるといいね」

そう言って草壁は、店舗の入った駅ビルの方へと歩いて行った。

「……やっぱり訓練の事は、気取られないようにした方がいいのかね」

…」

客観的には“変な連中とつるんでる”わけだし見られたら面倒かも、とは多少思った。

その時はその時で考えるか。まあ適当に言い訳をすればいいか、自己啓発セミナーの集いとか言い張ればいい。

今更自分の評判を気にする事もないだろうと思いつながら、電車時刻に余裕はあるが、早めに改札口へと向かった。

— — — — —

御旗五堂駅・待合所の端にある丸テーブルに、両手をだらーっと伸ばして彼女が座っていた。

「あー、シンゴ。ごめーん、待ったー？」

「いいや、いま来たところ…って、今来たのは俺だが待ってたのはお前だろう。おかしいぞこの会話」

「定番の会話じゃーん、気にしない気にしない。んー、まあ楽しみにしながら待ってたよ？」

「そうかよ。じゃあ、すぐ行くか？」

「うん、いいいこ」

行きたいところがあるから付き合ってほしい、というメイの提案は朝食の席で発され、賛成1で可決された。

平日の午後4時を回った頃で、遠出には無理な時間から分かるように、行き先は近場であるらしい。空いてる土日は駄目なのかと聞いたら、休日は読書に専念したいと言われた。

わがままなのか物分かりがいいのか、ともかく訓練もないし断る理由も無かった。

…もっとも、行く理由も無いが。

「で、どこ行くんだ」

「本屋」

「やっぱりか。それか図書館だと思ってたが、近場にゃ無いもんな」
「んー、シンゴはつまんないとは思うけど、でも行きたいからさ…」
「別に俺は本嫌いじゃ無いが。しかしどこ行くんだ。山久書店なら何度か行ったら」

国道沿いにある全国規模の有名な書店を挙げてみるが、メイはかぶりを振った。

「ううん、別のところ。商店街にあるらしいんだけど」

「ええ？ あったかな、本屋なんて…」

「看板は出してないらしいんだけど、古本屋って話だよ」

「誰から聞いたんだ？」

「津島ちゃん」

「津島あ？」

御旗岳中1年、津島多々史の顔を思い浮かべる。大人しいタイプではあるが、読書が趣味とは聞いたことがない。というより常に携帯ゲーム機を所持しているほどで、趣味としては現代っ子っぽい印象があった。

「まあ行ってみようよ。地元民のシンゴが知らないくらいだし、よっぽど穴場なんだよきっと」

いつになく目を輝かせて、メイは先を急ぐように早足で歩き始めた。

駅から真っ直ぐ国道へと伸びる道と交差するように、小規模なア

ーケード街がある。

ぽつぽつとシャッターも降りてはいるが、駅近くで人口も多いため繁盛している店もいくらかはある。

「えーと、美容院、美容院。坂本美容院と平島衣料品店の間…あった！ここだ」

目的の本屋を見つけたらしいメイが、財宝を発見したかのように歓喜を表した。

「…これ、営業してんのか？」

建物はいかにも古く、黄ばむように汚れた壁の端にはツタが張っていた。

『城北堂』とぞんざいにマジックで書かれた紙が貼ってあるガラス戸の向こうは、薄暗くて様子がうかがえない。

「定休日は知らないけど…店じまいには早いと思うし、多分空いてるんじゃない？…どれどれ…失礼しまーす」

メイが引き戸をがらりと鳴らして途中まで開いたのだが、引っ掛かるように途中で止まってしまった。

「何だね！何が誰だい、どっこのお客さんだい」

こちらに気付いてか、奥から突然しわがれた感じの聲が飛んできた。

「ここって、古本屋なんですかー？」

空き切らない戸から半身を押しこんで乗り出し、驚くふうも無くメイが聞く。

「古本“も”やっとなるが、そっちは貸し出しだけえね。で、どこのもんね」

「ええっと…何ていうか…。台地の上の…」

「メイ、ちょっと引っこめ。…御旗七込（ななごめ）の打川いうもんです。開がらねども上げっくれか」

「あー、台のほっかね。待ちよお」

「ごそごと動く気配がしたあと、バンツと何かが打たれる音がして、引き戸の『つつかい』が取れた。

戸を開け切ると、陽の入った店内が入口付近だけとはいえ明らかになる。

狭い天井まで届く棚が壁面と中央で計4列並び、そこに無造作な感じで“もの”が置かれている。

棚ごとに大体のジャンルは分かれているが、古びた玩具や土器の様なもの、鉱物の埋まった黒い石に折れ曲がった鉄の棒など、“役に立ちそうにはないが年代だけは感じるもの”が無造作に並ばされ置かれている。

木とカビの匂いが混じったような独特の香りが漂っており、当たり障りなく言うなら雰囲気を感じた。

「古物商、ですか？」

「道楽じゃも、大金を取るでもないがの、そうだね。…七込の打川と言ったけ」

七十歳は過ぎているような老いた婆さんに見えたが、背筋はさほど曲がっておらず、思いがけなく動きも眼光も鋭い。

「ええ。打川讓介（じょうすけ）の長男で、祖父は藤次郎、祖母はカヨです」

「あー、カヨちゃんこのねえ。せんは五堂にも居たもね、お孫さんかい」

「そうです、どうも突然すみません」

「いんや、構わねけどね。なんか用で来たかいね」

そう聞かれて、後ろ手に戸を閉めていたメイの方に視線を向ける。するとメイは姿勢を正し、その老婆をじっ、と見据えた。

「————本を探してるんです。どうしても読みたい、いや、読まなくちゃいけない本があるんです」

思いがけず真面目な表情になって、メイは来意をはっきりと告げた。

<07> 歪んだ透明な壁 (後)

「…本かい。本棚は左の奥まった方だ、大して数はねどもな。いま電気っこつける、待ちよ」

右手で壁をさぐり、婆さんがパチリとスイッチを切り替える。

照明の点く前から歩き出していたメイは、すすいと奥の方へと消えていった。

「あっちの子、あんたのなんね。妹さんかい」

「…父方の親戚です」

とっさにそう口をついて出たが、わりと手ごろで扱いやすい嘘だとは思った。家に居ても外を歩いても、そう言えば一応の不自然さは消える。

メイが歩いた道を追いたどって、奥へと進む。板の張られた床は造作がしっかりしていて軋む様子もなく、踏むたびにこんこんと小気味よく音が跳ね返る。

口をわずかに開けて、メイは本棚を見上げていた。

「すごいな…背表紙からして読めん」

本棚を上から順に目で追っていくが、外国語で書かれた年代物の洋書ばかりが並んでいる。ハードカバーのものが多く、書物の表面はシミによって歴史を刻まれていた。

ざっと途中を飛ばして下段にかかると、やっと読めそうな漢字が並んでいたが——それは中国語だった。

「で、何ていう本を探してるんだ？」

「……………」

聞けどもメイは答えず、自分がそうしたように目玉を動かして背表紙を追っている。…読めるのだろうか。父の蔵書にも出自が各国からなる専門書は存在しているが、メイがそれを読む姿というのは見たことがない。

「どうね。みなボロボロの紙束だろや、価値はねえど思っけど」
横から婆さんがそう声を掛けてきたが、並みならぬ古さから見るに、しかるべきところに持っていけば高値がつきそうな気もする。

「…こちらの本は、お客さんから買い取って集めたものなのでしょうか？」

あくまで本棚に目を凝らし続けながら、メイが丁寧に尋ねる。

「いんや、じいさんの趣味だ。売りも買いもしてねども、棚が余ったでな」

「洋書はこちらにあるものだけですか」

「うん、んだね。じいさんは珍しいのあ集めでも、読みもしねえもの。コレクション、いう奴だの」

「それって、今も集め続けてます？」

「何年か前に腰をやったで、よう動かんも。もう増えたりはさねえべ」

「そうですか…」

思い出したようにぱつと頭を下げて礼をしたのち、メイは自分と婆さんの間を抜けて、中央の通路を歩いていった。

良くは分からないが、話からするに目的のものはなかったと見える。そうとなれば、もう用は無くなってしまったのだろう。メイに用事がないものを、付き添いの俺が長いをするわけにも行くまい。

棚を見ながら入口へ戻ろうとする途中、あるものが目に入って、聞いてみた。

「急に來て歸るだけってのも何ですし、これ貰えますか」

螢石のそれにも似た、透き通る薄緑色の散りばめられた石の塊。ごつごつした鉛色の岩で周囲を固められているそれを、三つ指で持ち手に取る。

実はここに入ったときから目について、気になってはいたのだ。値札らしい小さなシールには700円と書かれていたが、自分には決して高いとは思えなかった。氣に入っただけのものは欲しいし、機を逸したくはない。

「おお、買ってくれっかいね。せっかくだあね、五百円でええよお」
「あいにく小銭はないので、これで。釣りも手間ですし、とつといてください」

千円札を一枚出して手渡す。あるいは断られるかとも思ったが、何も言わずうなずき受け取ってくれた。

「じゃあ、失礼しました」

「やあ、なんもだ。最近はお客が多くて賑やかだでの。氣にせんとまた来お」

婆さんは満面のしわを揺すって首を縦に振り、愉快そうに笑った。

— — — —

石をポケットにしまつて店を出ると、メイが壁にもたれて空を見ていた。

「ごめんね、付き合わせて」

「まあ、読みたいのが無いのは仕方ないだろう。何が読みたいかは知らんがよ」

「そうだね：簡単には見つからないとは思うけど」

それとなく探つてはみているが、やはり書名は言いたがらない。話せないことであるにしても、何故話せないのかという点の見当がつかなかった。

「：ね、次は山久書店に行こうよ。そんな遠くないし」

「また本かよ、好きだな本当に」

「うん。やっぱり私、読書はすごい好きみたい」

「そうか」

確認するような口調が気にかかったが、追及は控えた。お探しの本にしても自分にあるのは興味だけで、深く干渉する気はなかったからだ。

時おり気付かされるように、メイとの間には隔たりがある。

それでも今はとりあえず、その距離を保てればいいと思っていた。

— — — —

国道同士が交差する、この辺りで一番車通りの多い十字路。

横断歩道の代わりに地下道が斜め十字に走っているため、歩行者はそこを経由して逆側へと渡る。

地上に戻ってから数分ほど歩くと、山久書店の青い看板が目に入った。

最寄りの店はこの御旗五堂店だが、駅近いビルにも一軒、同じ尾岐市内の逆方向にも一軒があり、そう遠くない。駅前の商店街に普通の書店がなかったのは、このチェーン店の躍進によるところが大きいのだろう。

ほどよくエアコンの効いた店内に入ると、中では学校帰りらしい制服姿が多く見られた。立ち読みをする子、漫画新刊の前で雑談をして笑う子。休憩スペースでくつろいでるような姿も見受けられた。

「各自で自由に見るなり探すなりして、終わったら入口集合でいいか？」

「えー、たまの機会なんだし、最後まで付き合ってよお」

「…まあいいか、分かった分かった。じゃあ見て回るか」

「はあい、よろしいっ」

先ほどは表情にこそ出ないが落ち込んでいた風ではあったので、まぶしげに笑顔を振りまく様子にはともかく安心を覚えた。

まず新書コーナーをざっと眺め、次に平積みされたハードカバーの列を手早く見ていく。

メイは作家で本を選ぶということは全くない。本を買う時もだいたい「表紙買い」で、第一印象で決めてしまう。たとえ万人がこきおろすような質の悪い本に当たっても、彼女は大事そうに抱えて読みふける。作者冥利に尽きる読者の鑑とも言えるが、ただ手当たり次第の無造作といえばそうでもある。

「どうだ、お気に召すのはあったか」

「んー、ちょこちょこ。また後で一周するからその時かな」

「選別方法は面白いけど、変わってんなあ、お前は。次はどっち行くんだ？」

「じゃあ順路通り漫画の方行こっかー」

「順路って、観光名所かここは」

まあ言わんとしていることは分かる、端から順に漁って行こうという腹なのだろう。

立ち読みをしていた黒い学ラン姿の後ろを通り、棚の裏側へぐりりとヘアピン軌道で移る。

と、そこに並ぶ青年漫画の単行本より先に、見慣れた制服が目に入った。

ほんの3か月ほど前までは着ていた、御旗岳中学男子用の紺色基調のブレザーだ。

懐かしみを覚えるというか、最近よく見たというか…

「あれ、狩野先輩に打川先輩。どうも…」

何のことはない、顔も良く見ていた。御旗岳中1年、津島多々史がそこにいた。

この間家を訪ねた後は訓練でも会う機会はなかったが、交流自体は他の能力者より多い。

「よう津島。オフで会うとは奇遇だな」

「そうですね。ヤマ高に行かれてるんでしたっけ。じゃあ外では会いにくいですね」

「ああ、そんな頭も良くなかったしな。陽ノ嶋（ひのしま）に行けるほどの努力もしてない」

尾岐山高校、通称ヤマ高。“尾岐”の名を冠する高校は数多いため、そう言う略称がある。ちなみに陽ノ嶋というのは、御旗岳麓の国道沿いにある県内有数の進学校の名前である。

「それで今日はデ：お買い物ですか」

「……まあ付き添いでな。お前も？」

「ええ：普通に帰るつもりだったんですけど：途中で面倒なのに捕まっちゃって」

というと、またぞろ葉村にでも連れ回されてるのだろうか。

少し俺が考えた隙、会話の切れ目を見て、横からメイが加わりうとする。

「あーそうだ、帰ったら伝えといってくれる？お店見つかった、って。お願いね——」“津島くん”」

……？何か伝言をしたようだが、違和感がある。

そもそも津島の事をメイが呼ぶ時は、確か……。

「ああ：帰るまでもないですよ。その当人に連れ回されて来たので」

メイの言うことを理解してなのか、斜め向くようにレジの方を顎で指した。

すると丁度今しがた会計を終えたらしい“当人”が、両手に二つずつも重そうに紙袋を下げた状態でこちらに気付いた。

「あつ、メイちゃん先輩だあー！やーやー久しぶりです、元気してましたかあ」

「やつほ、“津島ちゃん”。聞くまでもなく元気そうで何よりだね」

底抜けに明るい声で答えたその少女もまた、確かにメイに『津島』と呼ばれた。

「…姉さんか」

「そうです。恥ずかしながら、残念なことに…」

細く赤いフレームの眼鏡をかけた、毛先のくるりと跳ねたショー
トヘア。

津島（弟）とはまったく好対照と言っている、明るさとエネルギー
で満ちた女の子だった。

重そうに買った本の山を持ちながらこちらに近付き、紙袋を弟に
押しつけた。

「ただふみー、はいこれ持ってー。んであれあれ？そっちの男性は
どなた？」

「ああ…えっと」

聞かれるままに訓練のことを話そうとして、あわてて口をつぐん
だが、

「ああ大丈夫だよ、『同じ』だから」メイがそう言った。というこ
とは…

「ああ関係者の人だね、どうもどうも。もしかして前に聞いた、メ
イちゃんの居候先の人かな？はじめまして、津島香利（つしまかお
り）です。いま2年で多々史とは一つ違いなんだー」

彼女は眼鏡の位置を直すように眉間の前、フレームの中央に人差
し指を当てて言った。

その時、彼女の眼鏡のレンズが両方とも——どろりと溶けた。
ぎよっとするが彼女は何食わぬ顔で、ゆっくりと指を離し前方に

持っていく。

するとフレームの下部分に引っ掛かってぐずついていた溶解物が、操られるように上部のフレームへと細く一本だけ伸びる。それから後を追うように何本も細いラインが上に向かって生えていき、じきに隙間なくフレーム同士をつないで…元の姿を取り戻した。

「うわあっはっはっ！びっくりした！？良かった良かった！これ度が入っていないんだー、ファッション！あっははははははは！」

何がそんなにおかしいのか、圧倒されてしまうテンションで彼女は腹を抱えて笑いまくっていた。

「通号は『グラス』。“グラスを操る”念動系だね。クラスはDの…27番だったかな」

「そうそう、あはははは！やー面白いわー」

笑い続ける津島姉こと香利はおいといて、メイが分かりやすい補足説明を加えた。

「もうやめてくれよ、姉ちゃん…ほら、帰るよ。…すみませんでした、打川先輩」

「いや…俺はいいが、お前も大変だな…」

「まあ家族ですし…普段はここまででもないんですか、今日は機嫌が良すぎるみたいで…じゃあまた」

陽気な姉の背を袋ごと押すようにして、苦労性の弟は帰って行った。

「…似てない姉弟だなあ」

「いいんじゃない？似てても得が無いんじゃないかな…家族なんてさ、続き見てまわろっか」

何事もなかったように踵を返し、メイは先ほどの順路に復帰した。

：メイは誰にも干渉しないし、何事をも気に掛けない。

人付き合いは社交的に見えて、見ようによっては表面的でもあった。

メイは家出少女だと自称していた。

家を出たのも、彼女が家族と分かりあえなかったからだろうか。津島姉弟を見ていたメイの目は、いつになく冷めていた気がしてならない。

彼女と自分の間には、溶けそうにない壁がある。

ただ向こうが見えるだけの、透き通った、重苦しい隔壁が。

—
—
—
—
—

>07< 歪んだ透明な壁 /了

—
—
—
—
—

予定になかった食材まで買ってしまった。

スーパーマーケットから出たのは午後5時半を過ぎた頃だろうか。夏は近く日も高く、さほど辺りは暗くない。雲は出ているが雨の気配は遠く、群れるように集まった雲の縁からは夕暮れが溢れていた。

：だいぶ、落ち着いた。

先程までは訓練を実施していたのだが、俺は始終冷静さを欠いた状態のままだった。自分のみならず、鉄面皮を以って知られる真崎さえ訓練の過程で顔をしかめたほどの実施内容だった。

じゃあ内容が失敗だったのかというところでもない。
むしろ目に見えて成功だったと思う。

しかし何というか、訓練生で差をつけては駄目なのだろうが、正直“彼女”との訓練は参加したくない。その旨をぽつりと真崎にこぼしたところ、「俺もだ」と率直に言われたぐらいだ。

とにかくその事は忘れない。

黄緑色のエコバッグを自転車カゴにぐいと詰めて、スーパーの敷地の外まで自転車を押す。時間帯もあってか車の出入りが多く、周囲に気を配りながら道路まで出た。

座ってペダルをこぐ気力がいまいっ湧かないので、やや前傾するような姿勢でそのまま自転車を押しながら歩く。金曜日の国道を歩き交う車は、休日へいち早く到達せんとして急いで帰っているように思えた。

(……………)

頂上に自宅のある御旗岳台地への“登山道”は表裏2つあるが、車を通れるのは表側だけである。スーパーと登山口は同じ並びにあり、途中で道を横断する必要さえない近場だ。大体の買い物は、ここか中腹のコンビニで済んでしまう。中腹地域の集合団地に住む家庭も、晩御飯の材料はここで揃えることになるだろう。そのあおりで駅前商店街から鮮魚店や青果店が消えたのも十年ほど昔のことだろうか。

(……………)

国道沿いには住宅は少ないが、歯医者や小児科、整骨院などが飛び飛びながら集まって建っている。施設はそれくらいで、あとは広大な田畑とそこへ折れ入る農道が伸びるばかりである。

辺りを見ても、今日は歩く人の姿もない。

疾走する車の音の合間に、かすかな虫の声がちりちりと耳をなでた。

(……………)

信号に差しかかる。青ランプの横にかかる白い表示板に、青文字で『御旗岳入口』と交差点名が表記されている。

とはいえ渡る必要はなく、このまま右に折れて坂を登り続けるだけだ。

坂道アシスト付きの電気自転車ならともかく、中学入学時に買った安物のチャリではクライミングは無謀であるため、ここからも乗車はしないままである。ひたすら登るのにも慣れた。下る時は楽なのだから、気分的に損得差し引きゼロだと思うようにしている。

……。

……。

(……まだなのか?)

まだ、後ろに気配があった。

先ほどスーパーを出た時からずっと、足音が一つ付いてきている。

とはいえ、ただ同じ方面に向かっているだけなら茶飯事だろう。

しかしさっきの信号を渡らなかったとすると、中腹団地の人間ではない可能性が高い。今登っている歩道は台地の最も外側を回るものであり、ただ風景が見えるだけで建造物は一切隣接しない。

こちら側の歩道をわざわざ登るメリットは薄い。

車通りの切れ目を見て、途中で横断するつもりなのだろうか。……しかし先程やり過ぎた信号は、青になったばかりだった筈だ。その時にさっさと渡れば良かっただろう。

考え過ぎか、他の可能性を見落としているだけか。違和感は覚えていたが、こちらは歩調を緩めてはいない。むしろわずかに早足をして、遠ざかるようにしていた。

……とっ、とっ、とっ……

……地面を軽く突くような足音。

数分ほど登ったが今も、それは依然として続いている。

ややもせず、中腹が見えてきた。

団地方面への入り口もこの平坦地帯に出てすぐにある。

……きつとそこで曲がってくれるのだろう。

…とつ、とつ、とつ…
…とつ、とつ、とつ…

しかし、団地口が見えなくなるまで歩いてもお、足音はやまなかった。

自分以外の山頂の人間というのは考えられない。自宅以外の四軒は自家用車を持っているし、そもそも成人男性の一人住まいか別荘しかないのだ。

各人の体格を思い返しても、まずこういう小さな足音は出まい。メイは家から勝手に出たりはしないし、こっそりつけ回すような悪趣味な悪戯もしない。

一計を案じて、その場に立ち止まる。

ポケットから携帯を取り出して、メール着信をチェックした。こうしてわずかに時間を潰しているうちに、先に行かせてしまえばいい。新着メールは書店からのメールマガジンだけであつたが、普段流し読むそれをじっくりと読みふけた。

………。

………横を通る者は現れない。

それどころか、足音が止んでいた。

知らぬ間に居なくなつたのか、いや、そんなことは考えにくい。

周囲には音を発するものはなく、静まり返っている。

針葉樹の群だけが道路脇にのっそりと突き立っていて、闇がかつた濃緑の陰影を抱えていた。夕日はいつ覆われたのか。今いるここ

には街灯もなく、携帯画面の明かりだけが際立つばかりだった。

こうなればもう、気になって仕方がない。

…意を決し、振り向くと。

———“目の前”に、そいつが立っていた。

「!?! うわっ!」

心臓が跳ね上がった。

勢いで飛び退こうにも自転車が邪魔になり、ガシヤリと足をぶつけてしまう。

数十センチと離れていないまったくの直近に、少女の顔面があったのだ。

「……………」

少女はぴくりとも動じず、瞬きもせず大きな目をみはっていた。その口端は微笑するように歪んでいる。濃い黒髪のアダストレートヘアで、眉毛が前髪の先に重なっていてちょうど見えない。

綺麗な容姿ではあるのだが、それ故にどこか空恐ろしい。

それと、あまり見ない制服を着ていた。この暗色のブレザーは確か、御旗岳からは3駅程も遠い尾岐女子高校のものである。なぜこんなところに、こんな時間に居るのだろうか。

「……………な、何か?」

ようやくそれだけ言うと、彼女はゆっくりと口を開いた。

「やっと見てくれた」

はつきりした声だが、妙に早口で平板な調子だった。

「俺に用があるのか？」

「あたしは君にしか用事はないの」

「それで、どういった件で」

「君に興味があるからついてきちゃったのだけれど」

「……え？…何が？」

分からぬままにそう聞くと、彼女の目尻が垂れるように和らぎ…同時にぐっと目が細められた。

「あたしが出逢った君は一目惚れって信じる人かな」

…不可解な言葉と表情が、彼女から発された。

「ひとめぼれ…?」

精神的に金縛られたような心地のままに、オウム返しに聞いた。

「君はこんなところにひとりなんだね」

こちらの疑問には構わず、彼女は淀みなく声を走らせる。

「そっちこそ。この暗いのに、女性の一人歩きは危ないだろう」

「あたしは一人じゃないから大丈夫なの」

「俺を数に入れているのか、それは」

「あたしがそうであるように君もそう望むのなら構わないよ」

頭に入って来にくい言い回しが、よりいっそうの混乱を招いてくれる。

「それでどうしたいんだ、ええと…君は」

「尾岐女子高等学校二年D組二十九番星倉然菓（ほしくらせんか）」

「…ああ、名前…。星倉先輩、でいいんですか?」

「あたしに気を使わなくていいし『先輩』も敬語も要らないかな」

「じゃあ星倉さん。何度も聞くけど、何がしたいんだ」

「それならまずは君の口から君の名前が聞きたいな」

「…打川慎五。尾岐山高校一年だ」

「聞かせてくれてありがとう」

「それ以上は教えたくない。そっちの目的が分からないからな」

「私にとってそれは残念だけど妥当な考えだね」

「俺はとにかく家に帰りたいんだ。星倉さんも帰ってくれないかな」

「もう少し君から話を聞いたらね」

「言った通り、これ以上は何も知られたくないんだが…」

「君の個人情報とかじゃなくて君の考えが聞きたいの」

「…それを答えたら帰ってくれると約束するかい」

「あたしとあたしの大事な人に誓って約束するよ」

そう言うからには、とにかく答えて帰ってもらおうと思い、ひとつ肯いた。

手を向けて、聞きたい考えとやらを話すよう促してやる。

彼女もまた肯くように首を傾けてから、こちらを見上げて言った。

「君の夢が聞きたい」

「…夢？将来の希望ってことか？」

「具体的である必要はないし子供の頃のものでもいいから聞かせて」
「…うーん…」

そう聞かれても、明確なものはない。

例えば職業にしても強い希望はないから、職につけるなら何でもいいと思っている。

自分に適性があるような事柄も分からない。得意な教科も種目も無い。

欠点を作らないようには生きてきたが、考えてみればさほど良いところもない。

子供の頃からそうだったから、幼少時の夢なんてのも思い浮かばない。

「無い、っていうのは駄目か」

「本当に何も無いかな」

「……んー……。あ、実現不可能なのでもいいか？」

「君がそれを望むなら構わないよ」

それなら昔思ったのは一つあるが…まったく不可能にも程がある夢だと思う。

「不老不死になりたかった」

我ながらどうしようもない願いだが、死にたくないのはだれしも同じだと思う。

そう考えると、普遍的な夢とも言えるんじゃないだろうか。

「それはいつ思った夢なのかな」

「小学校の…高学年ぐらいの時だったか。じいさんとばあさんが前後して亡くなってな、いろいろ考えた時期に」

「今も君はそれを考えてるの」

「むなしい事を長々と考える気は無いし、実際今言われるまで忘れてたよ」

「仮にそれが叶う可能性があるなら目指してみようと思うかな」

「ははっ、出来る範囲でならな。…もういいかい」

「教えてくれてありがとう」

「どういたしまして」

それで帰るかと思ったが、まだ立ち去る様子はない。
こちらが何か言おうとする前に、彼女が口を開いた。

「あたしも夢を叶えたいと思っていたんだ」

「へえ。どんな」

「今いる所から逃れようと思っていたの」

「わりと後ろ向きだな」

「それであたしはそのための手段を持つ人たちと偶然知り合ったの

「だけど」

「ほう？」

「あまりにその人たちが面白いからやめちゃった」

「ふむ、良く分からんが、ならいいんじゃないか。今度は前向きだ」

「君はどう思うかな」

「？」

「大きな夢とそれを成す力を得たら他の事を捨てて逃げ出せるかな」

「そう言われても…持っていないから分からないな」

「君だってつい最近手に入れたじゃない」

「……………」

「変な奴だとは思ったが……………こいつも、超能力の関係者なのだろうか。」

「…俺に力なんてもんは無いよ」

「それを与えられる人たちとは繋がっているでしょう」

「資質が無いと言われた」

「力は一つじゃないの」

「それは知ってるが…。なあ、そろそろ君の正体を明かしてくれるか」

「少し前まで関係者でしかなかったけれど今は立会人」

「…本当か。同じような立場かと思ってた。じゃあ上司にあたるのか」

「君はあたしに対して上下なんて気にしないでいいの」

「…まあ、そう言うなら。ともかく怪しいもんじゃないのは分かった、今日はこれで失礼していいかな」

「待って」

「一歩だけ踏み出した俺に、彼女も一歩だけ近づいた。」

「君にもう一つだけ聞きたいことがあるの」

「それで今日のところは最後にしてくれるかい」

「建前上はこっちが本題だから自然と最後になるね」

「じゃあ、どうぞ」

「君の欲しいものが聞きたい」

「…さっきの話と似通ってないかな、それは」

「もっと具体的ですぐ手に入って高価すぎないものでお願いしたいかな」

「何だそりゃ、プレゼントでもくれるのか」

「当らずとも遠くもないと言っておくね」

「んー…」

一瞬昨日の『本』とやら…メイが探していた物品の事がよぎったが、それ自体に詳しくない。

自分が欲しいものというと…うーん…ああ。あれかな。

「…ヘッドフォンが欲しい。こないだ壊れちまってわりと不便してたんだ。安物でも構わないけど、欲しいデザインが売り切れでさ」

「わかったよ」

「…つつても、くれるわけじゃないんだろう。何だろな、抽選とか？」

「君はもうすぐそれを叶え得る機会を持つ」

「ふーん…具体的にはいつごろになるかは分かるかい」

「あさって」

彼女は迷いなく言い切った。

「っていうと日曜か…まあ楽しみに待ってようかね」

「そうするといい」

言うべきことが終わったのか、彼女はやっと背を向けた。

「じゃあまあ、何だ。気をつけて帰ってくれ」

「君が気にしなくともあたしは大丈夫だから」

とっ、とっ、と例の独特の音を立てて彼女は坂を下り始めた。

「そうだ」

こちらも帰ろうかと身体を前方にひねる途中で、彼女が振り向かずと言う。

「あたしがはじめに君に言った一目惚れというのは冗談だったよ」

まったく補足事項のように淡々とそれだけ述べて、星倉然菓は坂の下の闇へと消えていった。

— — — —

家に着くと、玄関口にメイが居た。

壁にもたれるようにして立っていた彼女は、ぐらりと頭を傾けてこちらを見た。

「おかえりー。遅かったね」

「おう、ただいま。変な奴に絡まれてな。…しかし玄関で何してんだ、出迎えか？」

「まあ出迎えだよー、晩飯のだけどね」

買い物を詰めたエコバッグを指差して、苦笑するようにメイが言った。

「手間かかるようなのは作れねえぞ」

「その割には結構買い込んでない？珍しいねえ」

「まあヤケ買いみたいなもんだな…」

「ふーん、まあいいや。ところでさあ」

「何だ」

「こういうのが来てたんだけど」

台所に連れ立って向かう途中、電話の脇に置いてあったプリントをメイが取ってこちらに寄こした。

「授業参観の案内でも来てたか」

「おー、面白そうだね。んじゃあ私は保護者として、おめかしして行けばいいかなあ」

「その状況で俺はどんな顔して授業に臨めばいいんだ…で、何だつて、ええと…」

まあ大体予想していた通り、訓練関係の資料だったのだが。どうもいつもより情報量が多い感じがする。

「授業参観も面白そうだけど、私はやっぱり体動かしたいかなあ。ね、その方が面白そうだと思わない？」

訓練の実施日は、6月30日（日）。

場所は自宅裏、御旗岳裏手の坂。

訓練参加者は――――

「……クラスC以下の能力者、『可能な限り全員』……?」

なにやら厄介で不穏な一文が、紙面上に飄然と躍って見えた。

—
—
—
—

>08< 同行ひとり /了

—
—
—
—

<09> 希望は誰かの手で掴め (前)

桐代が声を張り上げている。

「よし集まったな。地図持ったか。じゃあ説明始めるぞ」

御旗岳裏坂の山頂側入り口には、普段なら人気はかけらもない。しかし今日に限っては、二十人近い人の群れがうごめき、ざわついていた。

「今日やってもらうのは他でもない、“オリエンテーリング”だ」

「山とかの中を歩き回るアレですか」

「そうだ。場所はまア言うまでもなく、目の前にある御旗岳の裏手になる。ただし、点数を競ってもらう」

「どうやって？点数の基準は？」

「山中に10個のターゲットを設置してある。ターゲットにはキーワードが書いてあって、それによって点数が変わる。一番高い3点が3個、2点と1点も3個ずつで、残る一個はハズレで0点だ」

「じゃあ最高で、えーっと、18点？」

「そうなるね…と言いたいところだけど、もうひとつルールがある。『誰が一番点数を取れそうかそれぞれに開始前に予想してもらおう』、というのがね」

「えー？…なんで？」

「自分が取った点数が、予想した人物の順位に応じて倍加される。1位なら3倍、2位なら2倍、3位なら1倍…そのままだな。で、それ以下ならゼロだ」

「…つまりどれだけ頑張っても、予想が当たらないと水の泡だ？」

「イエス。もっとも、自分に賭けるのも全く構わない。逆に賭けた相手を支援することで労せず大逆転もできなくはない」

「他力本願って事ですか」

「人間観察が肝要、ってことだよオ。：あー、あともうひとつ。スタート地点に戻ってキーワードを川藤に言うまでは点数にならないから。時間切れを起こしたらそれまでだね」

「で、制限時間は？」

「9時開始で制限時間は3時間、リミットは12時ちょうど。大体そんなとこだね。あとは渡したプリントに書いてるから、それ見れ。以上ー」

説明を終えた桐代はすたすたと横に退き、交代に川藤が正面に出てきた。

「とまあ、説明された通りだ。誰が一位かという『予想』は、9時になる前に俺に言ってくれ。今日参加しているのはクラスC以下15人、康峰・鑑・美濃川・上幌坂・松笠が休みだが、打川と狩野が特別に参加する」

「はあーい」

「あー：どうもー：」

内容を説明された当初は、まあだらだら見張ってりゃいいだろう、と思っていたがこの有様だ。

まあ参加させられるにしても、のんびり散策して帰ってくればいいか。

「それじゃあ9時まで休憩なりトイレ行っとくなり自由にしとけー」

ぱん、と川藤が手を叩き、ひとまずは束の間の解散となった。

「：やれやれ、日曜の昼から何事かと思ったら：」

「いいんじゃないのー、バトルロイヤルとかマラソンとかじゃなか

っただけ」

「労力がどうってより、時間拘束されるのが面倒だ。ボーナス出してくんないかな」

「んー、結構ケチだからね上の方も。成功報酬に期待したら？」

「あれか。って言っても、勝たないと貰えないんだろ：特別参加の俺たちが万が一勝ったらしらせるだろう」

貰ったプリントによると、優勝者には『欲しいもの』が後日授与されるという。

一昨日に星倉が聞いてきたのは、どうやらこれだったらしい。事前に全員に聞いてあるらしいが、メイはいつの間に回答したのだろう。

「よう、お二人さん」

手が空いたのか、川藤が話しかけてきた。普段まっとうしているスーツではなく、黒のスポーツウェア上下を着ている。

「ああどうも、川藤さん。お疲れ様です」

「全くだよ。昨日から会場準備で動いて、そのテーブルまで車で運ばされた」

まったくいつ置いたのか、下山口の脇に折りたたみテーブルとパイプ椅子がセットされている。

テーブル上には予備の地図やバインダー、資料などが整理されて並んでいた。

「カワさん、今回の立会人って二人だけ？」

「いや、他の連中はコースでスタンバってるはずだ。真崎とか、星倉とかだな。とはいえこっそり見張る役割だから、ターゲットよか

見つからねえと思うが」

「今回の訓練の立案は、やっぱり…？」

「ああ、桐代だよ。大人数が絡むときはいつもそうだな」

「ちゃんと理由があって行われてる訓練なんですかね…」

「ま、最低でも能力者同士の交流になりゃいいんじゃないか。…と
ころで、お前ら誰に賭けるんだ？」

聞かれて横を向くと、メイと目が合った。

「さっきも話してたけど、俺たちが本気になってもね…」

「まあそう言わず、予想するだけしとけよ。ギャンブルでもするつもりだよ」

「あ、じゃあカワさん、いい？」

メイが手を挙げて、川藤の耳元に口を寄せる。

中腰で聞いていた彼は、「ほうほう」とにやつきながら指で顎を撫でた。

「なるほどな、なかなか面白い。打川は？」

「うーん…今回、能力も使えるんでしたよね？」

「ああ。ただし過剰な直接攻撃は禁止だ、減点になる。ま、殴ったり蹴ったり引っ張ったりすんなってことだな」

「じゃあ…」

ある能力者の名前をささやくと、川藤はメイの時と同じような表情でうなずいた。

「ほお、そうくるか」

「過度な期待はしませんが、妥当な辺りだと思いますね」

「えー、誰だろ。気になるなあ」

「そいつは結果発表の時のお楽しみだな。…っと、仕事仕事」

訓練生が何人か手を挙げて近付いて来たので、川藤が『予想』を承るべくそちらに向かった。

「やる気の程はどうなんだろうな、中学生諸君は」
「やっぱり欲しいもの次第じゃないかなー」

ヘッドフォンぐらいでは本気になれないな、と自分を省みて思う。メイの様子を見ても、きっと大した希望を申告したわけではないのだろう。

…しかし今時の中学生ってのは、いったい何を欲しがるのだろうか？

— — — —

「…んじゃ、スタートおー」

気の抜けた桐代の掛け声で、午前9時ちょうどにオリエンテーリングが幕を開けた。

なぜテンションが下がっているかというと、ピストルを鳴らして開始合図をかけようとするのを川藤と俺が止めたからである。

近所迷惑になるからという理由なので、代案として出たホイッスルも却下されてしまいご機嫌斜めというわけだ。

「さて、どこから行くか…」

さほど大きくないB5版の地図を広げる。

裏手の坂におけるコースは三つある。

1つは以前から利用している、アスファルトで舗装された坂。

もう1つはその途中から分岐する未舗装の山道で、辿っていくと再び1つ目のコースに合流できる。

最後にもう1つ、入口からして違う山道が奥の方にあり、こちらは途中で行き止まりとなっている。

「高ポイントがありそうなのは：桐代さんの性格から言って3つ目だな」

「そう思わせて裏をかいてるかもよー。とりあえずコース1を歩いて様子を見ようよ」

「そうだなあ：って、お前も一緒に行くのか？」

「えー、嫌かな？」

「協力が禁じられてるわけではないが：。得点が同じになるのはつまらなくないか」

「あー、確かにそうかも。んじゃ、コース2への分岐までってことでどう？」

「：まあその位なら。じゃ、ぼちぼち出発するか」
「おー」

すでに他の訓練生たちは出発した後だったが、特に焦りもせず歩き出した。

「最初に飛び出してたのがいたな：誰だあれ」

「んー、最初に走ってった子は見覚えなかったけど：イブキくんとかアイちゃん、津島ちゃんあたりがそれに続いたね」

「そのあとで葉村と津島：弟の方が出遅れてたのは見たな。あとは大体マイペースにばらけたが」

まだらに陽の落ちる林の中を、辺りをゆっくり見回しながら歩く。さすがにすぐターゲットがぶら下がってるとも思わないが、桐代ならそういう配置もやりかねない。

「最初の奴以外に知らない能力者っていたか？」

「背の高い子がいたんだけど、その子を見たことなかったなあ」
「枚垣か？」

「ううん、コータ君は知ってるから別の子。あとは顔は知ってるけど、能力知らない子とかはいる」

「へえ、誰だよ」

「リユーカちゃん」

多分その名前を聞いた時、ものすごく嫌そうな顔をしたと思う。それを見てか、メイは口を開けたまま不思議そうにしていた。

「…どしたの？」

「いや、まあ…あの能力はちょっとな…」

「ええ何それえ、気になるなあ」

「あいつはな…」

と、その時。まったく予期しないところから声がした。

『…え、えー。マイクテスト、マイクテスト。…あ、そっか、マイクじゃないか……ええっとー』

聞き覚えと可愛気のある声が、どこからともなく…いや。持っている“地図”から、聞こえて来た。

『驚かせたらすみませんでした、C-20の桜嶋唯音です。今大会のアナウンスを能力で担当します、どうぞよろしく』

「ああ、なるほど：『リフレイン』かよ」

「すごいね、全部の地図を対象に再生してるんだ。遠距離で使えるのは知ってたけど」

送信は出来ても受信は出来ないの、通信ではなくアナウンスと
いうのは言い得て妙ではある。

さらに、地図からの音声は続く。

『こちらでは現在の順位などを定期的に発表していききたいと思いま
す。当然というか現在は全員0点のままですね。：ええと、それで
すみませんけど、私だけ特例的に最初から9点を貰ってまして、こ
れは賭けでの最終的な倍率変動以外では増えも減りもしません。優
勝を目指す場合の得点もその辺りが基準になるかと思えますね。と
りあえず私からは以上です。それではまた、何かあったらお伝えし
ますね。ではー：』

長台詞を読み終えて、それきり地図は沈黙した。実は途中の滑舌
がやや怪しかったが、まあ内容は聞き取れたし問題はないだろう。

「なるほど、勝ちたきや9点は取れてことか。桜嶋の賭けが外れ
たらその限りでもないがな」

「案外そのままイオンちゃんが勝ったりしてね」

再び静寂の戻った林間を歩き出し、時おりぽつぽつと雑談を交え
ながら道を下って行った。

散策には快適な涼しさもあって、足取りは遅かったが。

第一能力者、発見。

『彼』は立ち止まっており、ゆっくりと目線を上方にめぐらせて木々を見ていた。

「よう、枚垣か」

「…先輩方」

こちらを認めると、目を閉じるように朴訥な感じの礼をひとつ寄こした。

「何してんだ。ターゲットは見つかったかい」

「いえ。体力に自信が無いので、諦めました」

「早いな…そういうのも自由だしいいけどさ」

「ゆっくり歩いてると気分は良いです。いい場所だと思います」

「そうだな。夏が来るとそうも言えないんだが、今日は絶好の加減だ」

「そうですか」

それきりまた目を上げて、緑濃い山林を眺める時間に戻ったようだった。

邪魔をするのも悪いので、後ろを通り過ぎて先へと進んでいった。

— — — —

しばらく歩くと、風が出てきた。

気配のなかったところからびゅうびゅうと突風が吹き、辺りの葉が一斉にざわめく。

「わ」とメイが前髪を押さえたが、すぐに風は止んだ。

…と思いきや、第二波がすぐにやってきた。それも、先ほどと同じような強さで。

「ああ…あいつか」

「だね」

少し進んでカーブを曲がった先に、予想通りの人物がいた。

葉村砂月と、ついでにお付きの津島多々史である。

「こら、葉村」

「む。…打川方（がた）かえ、奇遇にあらん。して、何か」

扇子で照準を定めているらしい葉村が、振り向かずに返事をする。

「なんで風を出してんだ。使うなどは言わんがよ」

「ほら、あれですよ」

傍らの津島が一本の木を指差す。その端の方に白い物体が隠れて見えた。

遠くて何なのかは分からないが、人工物のような感じはする。

「あれがターゲットか」

「ええ、でもここからでは見えないでしょう」

「まあな」

「そう何度も言ってるんですが、こいつが聞かなくて…。意地でもここから見ようとして、ついには能力を使い始めて…」

「何だそりゃ…頑固者なのは知ってたが、やれやれだな」

「まったくです」

さすがにその辺りでむっと来たのか、葉村が照準修正をやめてこちらを見た。

「何か文句を言わんとするはそこもとかえ」

「あまり賢い方法でもないだろう。第一キーワードが読めんだろ。あと標準語で話せ」

「む：そうとも考えられるが…」

「まあいい、ここでジタバタしてる隙に俺が読んでくるから。じゃあなー」

挑発するように手を振って通り過ぎようとすると、例によって葉村が釣られた。

「ぐ：先を越されてたまるかっ！行くよ、多々史！」

「はいはい：じゃあこれで。失礼しますね」

津島の手を強引に取って葉村が走り出し、その津島は慣れたように会釈して去って行った。

「あしらいに慣れてんのか無いのか分からんな、津島は」

「そういうところはシンゴに似てるかもね」

「…そうか？」

「うん、ほっとくようで構ってくれるあたりがそっくり」

きつとなんと言っただけであろうメイの言葉が、その時やけに印象に残った。

：残ったのだが、まったく束の間のことだった。

坂の下方からバリバリバリ、と鋭い音が響き渡ったためだ。

――おそらくは、何かが盛大に壊れる音が。

&l t; 0 9 & g t; 希望は誰かの手で掴め (中)

能力使用は認められているが、物体を破壊する必要があるかという疑問である。

音のした方に目を凝らしつつ、原因を探すべく駆け足で坂を下っていく。

「さて、誰だろうな…」

見当はつくが、別の知らない能力者という可能性も考えられる。だが、予想は当たったようだ。

「ああ、打川先輩。あれれ、狩野先輩も？」

雑草に囲まれて伸びる薄茶色の地面に、大きな亀裂がほぼ一直線に入っていた。

そこはアスファルトが土に替わる分岐路、コース2へと行く方向である。

C-21・井房野転子はこちらを振り返り、ぼんやりとした目をしばたかせた。

「やっぱりお前か。なんだ、さっきのは」

「えー、それがですねえ…」

井房野は言い淀んで、道の脇の方…ゆるい斜面に目を向けた。良く見れば道に入ったヒビは、途中からカーブして斜面側へ逸れているようだった。

「あれを壊した音なんですけど」

「?…あれって…木? 倒木か? かしなんでだ」

「いやあ…その。ちょっと驚いてしまつて…」

「何にだ?」

答えかねるように腕を組んで、井房野は眉間にしわを寄せる。
少しだけそうしてから、ともかく口を開いたが、

「正直言つてえ…わかんないですよね」

「ええ?…何かを見て驚いた、っていう点はあるのか?」

「そうですけど、正体は分からなかったんですよ。こう、ガサガサと素早く動く影があったので、とりあえず威嚇ででっかい音出したら…まあ、すごいスピードで逃げられました」

「姿が捉えられなかったってことかな?」

「そうなりますね…んう…テンパってたのもあるんですけど」

彼女には珍しく、ばつが悪そうにうつむいて返答した。

「まあ不可抗力みたいなもんだろ、気にすんな。怖かったら山頂に戻れ」

「はあ…どうも。でも大丈夫ですよ、驚いただけなので」

「なんならイブちゃん、一緒に行かない?」

「いやいや、お二人の邪魔をする気はないですよ」

「…誤解してるようだが、俺たちはこここの分岐から別行動のつもりだったんだよ」

「ええ?…あー、ケンカですか」

「違う。それでどうするんだ」

「あ、じゃあ狩野先輩と行きます。ちょっと聞きたいこともあったので」

「そうか。俺はコース1をこのまま進むから、お前らは2の方でい

いか？」

「うい、お互い頑張ろうねえ」

「適度にな」

「ではあ、また後でー」

自分で作った亀裂を飛び越しながら、井房野がコース2の奥へとひよこひよこと歩いて行った。それに続いて軽快に歩くメイの背中をしばらく見送ってから、元のコース1へと向き直る。

地図を見るに、コース行程の7割くらいは下ってきた事になるだろうか。麓側の入り口まで着くのにも10分とかからないだろう。今は気候も穏やかで明るく、この先は傾斜も厳しくはない。

のんびり進行したいとこだが、その前に。

「…誰か、来てるか」

どこを見るでもなく、分岐点から少し離れた辺りで言った。

「来てるかと言われればそれはあたしが来たのだけれど」

こちらの呼び掛けに答えたのは立会人、星倉の声だった。

後ろから声がしたので振り向くと――おとといの夕方のように、目の前にいた。

「…今度は驚いてやらんぞ」

「それは少し残念かな」

「いま来たのか」

「ずっとこのコースの近辺を見張っていたよ」

「さっき井房野が能力を使った際もか？」

「そうなるね」

「じゃあ、単刀直入に聞くんが――」

近すぎる距離を一步後ろに取りなおしてから、続けた。

「さっき井房野が見たのはお前か」

「まさか」

ぐいっと上半身を乗り出すようにして、星倉は笑った。

「あたしはそんなに迂闊じゃないから」

「じゃあ、何だって言うんだ？」

「すばしっこい野生動物でもいるんじゃないかな」

「小動物ならいいが、そうでなければ訓練生に危害が及びかねん
ろ」

「君は心配せずとも競技を楽しめばいい」

「信用していいのか？」

「関係者の信用を得るのも立会人の業務だと思うからね」

「：ともかく、何かある前に頼む」

「あたしは君の頼みを承知したよ」

言った直後、彼女がふっと視界から消失した。気配もすっかり消えたが、これもやはり能力なのだろうか。レポートかステルスか知らないが、とにかく彼女は能力を扱えるらしい。

望むべくして得た力で、彼女はいったい何を夢見て、さらに何を望むのだろうか。

『定時アナウンスですー』

尻ポケットに突っ込んでいた地図が、もごもごと喋り出した。

『開始からちょうど30分が経過したことをお知らせしまあす。現在のトップ点数は私を除くと…3点ですね。次点は2点が数人います。まだ始まったばかりですから、焦らず頑張ってターゲットを探してくださいね。ではー』

初回よりは元気な声で、桜嶋のアナウンスがつつがなく終了した。

（まだ1つだけ…だなあ）

これまでに見つけたのは、葉村がわめいていた例のターゲットだけだ。書いてあったのは『ツグミ』というキーワードだけで、これが何点に相当するのかは分からなかった。

我ながらぞんざいに探しているとはいえ、収穫も少ないままにコース2との合流ポイントも過ぎて、もうすぐコース1の終端が見えてくる。

（スタート地点からは一番遠いわけだし…このあたりにターゲットがあってもおかしくは…ん？）

上を見ながら歩いていたせいで、気付くのが遅れた。
すぐ先に誰かが二人、向き合って立っている。

「……だよねー！……っていうか……がさー！……だから……」

「……えへえ〜？……なんですかあ？……かとお……うわあー……」

声はどちらも女性であるようだが：なんだかこう、喋り方から嫌な予感が感じ取れた。

つまるところ彼女たちは、自分が苦手とするようなタイプの――

「ん？ ああー！ 打川先輩だあー！ あーっはっはっは、久しぶりですねー！」

「ああ、ホントだあねえ、えへへへ。わたしもこのまえちょこつと会ったような気がするなあ」

必要以上に元気印を押しまくる津島香利と、最高にまどろっこしい喋りをする埜滝柳果（のだきりゅうか）がそこにいた。

：ああ：特に後者には、会いたくなかった。

そこにいる津島のようなバイタリティ溢れるトークであれば、多少疲れるだけで受け流すこと自体は難くない。

だが埜滝の話は長い上に要点を得ず、それでいて意外としつこいため、ひどい徒労感に襲われるのである。

「：よう。何してるんだ」

面倒くさいコンビを前にして、ともかく当たり障りのない言葉をかける。

「そうそうそれがね、皆走ってくから私も急げー！ って下ってきたのはいいけど、何にも見つからなくてさー！」

「んー、わたしはゆる〜っくりしてたんだけど、歩くだけで疲れちゃったんだよねえ」

「あっはっは、私も私も！ 一気にここまで降りてきたんだけどっ、もー登るのダルい！ いっそ帰っちゃっていいかな？」

「だめだよーたぶん。みんなも困っちゃうよお。ねえ先輩、そうでしょお？」

「ああ…まあ…コース内には居ろ。リタイアするにしてもスタート地点までは戻ってくれ…」

早々に会話を切り上げて背を向け、降りてきた道を登り出す。しかし津島が引き止めるように、大きな声で呼びかけてきた。

「あー、せんぱーい！ここにキーワードありますけどー？」
「ああ…？」

億劫ながらも振り返ると、津島がすぐ近くを指差していた。国道に面した歩道側を向いて立つ看板の裏に、小さな白いターゲットがぶら下がっている。

「別にいいよ、そこまで執着してないから。じゃあな」

それよりも早いところ、この二人から離れたかった。むろん悪意はないのだが、どうにも疲れて仕方がない。

相性の悪い人間というのは居るものだと思いつつ、重くなった足取りを無理に上へと運んでいった。

— — — —

低い側の合流点から、コース2へと入ってゆく。つい最近までは雨続きでぬかるみ具合が酷く、通ることすらためらわれた道である。それでなくとも用事がなければわざわざ分け入ることもなく、ごく

たまに山菜取りの老人を見かける程度だろうか。

やわらかく土がつぶれ、足跡が残されている。すでにここを通った人間がいるようだ。靴跡の形からすると進行方向は同じらしい。たどる様に足元を見ながら登っていくと、坂が途中から平らになった。ここからは谷のように一度下りを経るようだ。

見下ろせば道の先に、ゆっくりと歩いている姿が一つあった。

声をかけるには遠いため、しばらくはそのまま見守りつつ歩く。急に声をかけられたら驚くだろうから、足音で気づいてくれるといいのだが。

特に、この子の場合は。

「あ…」

『彼女』が立ち止まり、振り返る。

普段はおどおどした所があるが、今日は落ち着いているようだ。た。

「調子はどうだ、湊」

「えと、あんまり：見つけにくいですね、意外と」

「桐代さんがプロデューサーだからなあ、だいたいひねくれた所に隠れてるんだろう」

話すうちに追いついたので、そのまま隣を歩き始める。湊が時々つまづきそうになるのをはらはらと見守りつつ、粛々と道を進んでいった。

「他の連中はどこかで見たか？」

「津島さんが疾走してるのは見ました。けど、思ったよりは他の人に会わなかったですね…」

「そうか。こういう訓練は面倒か？」

「えっと…普段よりは楽です。能力を無理に使わなくてもいいので」

『シアター』は幻覚系の能力だと聞いているが、それが行使されるのを見たことはない。

「というと、能力を使用するのが負担になってるのか？」

「…うまく制御できないから、失敗するとちよっと、恥ずかしくて

…」

「でも使わないことにはな。挑戦していくしかないだろう」

「まあ…そうですね」

歯切れの悪い答えだが、あまり使いたくないような能力なのだろうか。

話題がそこで切れたので、ターゲットを探しながら黙って歩いていた。

「お？おーいっ」

「あ…愛中先輩？」

向こうから走ってきたのは、運動着の袖をまくった愛中だ。割合やる気を取り組んでいるのか、額に汗を浮かべており息も弾んでいた。

「ふー、走った走った。二人ともマイペースですね」

「お前がハイペースなんだろう。まだスパートには早くないか、今にバテるぞ」

「まだ準備運動みたいなもんですよ。それよりちよっと良かった、

ふふ…シンゴ先輩？」

こちらに向かって微笑みかける愛中。何だか、嫌な予感がする。

「借りがありましたよね、ひとつ」

「げ…今使うのかよ、それを」

「まあもう少し取っておいても良かったんですけど、使えるときに
つてことで。あ、そんな警戒しなくても大丈夫ですよ」

言いながら愛中がポケットから小さな何かを取り出し、こちらに
投げてよこした。

「ちょっとお使いをしてもらうだけですから」

— — — — —

まったく本意ではないが、借りは返さなくてはなるまい。

走り去った愛中やゆっくり歩くつもりの湊とは別れて、俺はコー
ス2を駆け足で登っていた。

手に握った、白い小さな玉を見る。パチンコ玉ぐらいの大きさだ
が、むしろ福引の玉なんかに近い見た目ではある。

『お使い』の内容はこうだ。

・この球を12時まで、C-23・出戸滋忠（でとしげただ）
に直接手渡すこと。

・また、他の能力者の手には絶対に渡さないこと。

良く分からない内容であったが逆らうわけにもいかず、「彼」を探してこうして走っている。あいにく知らない訓練生だったのだが、ひよろい長身で坊主頭だからすぐに分かれると言っていた。メイが見たという『知らない顔』は恐らく彼なのだろう。

コース2はもうすぐ終わり、コース1に戻るはずだ。

と、目の前には地図を眺めているきつそうな印象の少女…馳由梨乃がいた。

「…打川先輩か…」

「なんだその残念そうな顔は。あいにく急いでるんだが…そうだ、C-23の出戸って知ってるか。長身の坊主頭らしいが」

「知らないわよ。会ったこともない。枚垣君なら見たけど」

「そっちの長身じゃあない…まあ分かった。ああ、この先に湊がいるはずだから親交でも深めててくれ」

「なっ」と戸惑うユリノを放って、見覚えのある亀裂入りの地面を飛び越える。

これで、コース1にやっとの事で戻ってきた。

メイ達には会わなかったが、途中で引き返したということだろうか。

しばらく考えながら小走りに進むと、傾斜が急になってきた。ペースを落として登り始めるが、最近あまり運動してなかったのもあり、割としんどい。

一息入れようか、と速度を徐々に落とし、丁度カーブに差し掛かったために立ち止まった。

深く呼吸をして、鼓動を落ち着ける。喉も渴いてきたし、早いところ戻った方がいいか。

「……打川、先輩……」

「……!？」

予期せぬ声が聞こえて、驚きながらも辺りを見回す。

全く気付かなかったのだが、斜面の近くでぐったりと座りこんだ姿があった。

D-28、青山司朗。

普段は朗らかな少年なのだが、いまは見る影もなくうなだれている。

「青山じゃねえか。どうした、体調が悪いか」

「いや、元気です……けど、しばらく動けないっスね……」

「……? 何でだ」

「『負けた』んで、動けないらしいっス……そう言っ……」

「その通り。オレの能力に敗北した以上、言うとおりにして貰わないと、なあ?」

青山とは別の声が、坂の上から飛んできた。

自信に満ちた口調と顔で、腰に手を当てて仁王立ちに立つ姿がある。

「能力で青山に、攻撃を加えたのか?」

「いや、ちょっと違うな。これはオレとそいつの正式な『果たし合い』の結果だ。文句は言えねえさ」

「……どういう能力だ、いったい」

「おお、知りたいかあ?」

そう言うとその男は、右腕を大仰な動作で振り上げ、真下へと振りおろした。

思わず身構えたが、何かが飛んできたりはしなかったようだ。

だが。

彼の足元に真っ黒な円が描かれ、それが広がり始めている。

それは道幅を埋め尽くすほどに拡大し、やがてそこから音が聞こえてきた。

咆哮。

獣あるいは鳥の鳴き声にも似た大音声が、低く長く林間にこだまする。

——彼の背後に、どす黒い肌の巨大生物が現れていた。
尖った爪、捻じれた角、隆々たる筋骨、うごめく長い尻尾。
それはゲームや漫画で見るような、『悪魔』の姿に似ていた。

「オレの名は参崎龍（さんざきりゅう）」

後ろの『悪魔』に見せるように、指を立てて右手をすーっと伸ばす。

「会った以上、ここを通す気はねえ。てめえもここでリタイアして貰うぜ」

彼の指が、こちらに向けられ——悪魔がそれに従い、飛び掛かった。

<09> 希望は誰かの手で掴め (後)

一直線に向かってきた『悪魔』が眼前に迫り、反射的に右腕が頭を守るべく拳がる。

しかし接触する直前で、その巨体は急にぴたりと動きを止めた。

「へっ、慌てんなよ。奇襲は筋じゃねえからな、まずは挨拶だ」

悪魔の太い腕がゆっくりと動き、爪がこちらの肩に触れた。

…感覚は、無い。

突き刺さったはずの鋭利な爪は、服と肉体をすり抜けていた。

「…幻覚系か」

「一概にそうとも言えねえ。だがそれも真実だ」

悪魔がふわっと浮いて後方へ戻り、彼の後ろに着地した。

「オレの能力下において、思い描く幻覚を“一体”作り出すことができる」

悪魔が腕を組み、彼と同じポーズで立って待機していた。よく見ればこの悪魔には、両目が無い。正体のない黒い顔で、ただ顎だけが不気味に上下している。

「幻覚は意識の赴くままに自由に動かせる。そしてそれは――――」

見得を切るように、びしっとこちらを指して続ける。

「てめえにとっても同じだ」

不意に足元が暗くなる。黒い闇が円を描いて地面に現れ：それは先の見えない縦穴のようだった。彼が悪魔を呼びだしたそれと、全く同じ質のものだ。

「思うままに幻を呼べ。オレの幻に勝てそうな奴をな」

「幻覚同士を戦わせろ、ってことか…？」

「その通り。俺が負けたらここは通してやるが、てめえが負けたらこの場に倒れてろ。そこのそいつのように、なあ？」

顎を向けられた青山は、反応もできず未だぐったりと沈んでいる。

「幻覚以外で攻撃するってのは…」

「オレの能力に捕まった時点で、てめえは能力を出せねえ。さらに、オレには触れられないように暗示が掛かってる。勝ちたきやてめえの想像力を駆使することだなあ」

能力は使えないから構わない。だが能力資質を持たないらしい自分が、幻覚とやらを作り出すことが出来るのだろうか。

「どうした。幻、夢、恐怖、絶望、何でもいい。てめえの意思をオレに見せてみろよ」

「そう言われてもなあ…」

負けても命に別条があるわけではなさそうだし、普段の自分なら戦いを放棄して倒れる方を選ぶだろう。しかしながら今は、愛中に借りた分を返済する途中である。不履行となれば借りが増えかねない。

この場を切り抜けなくてはなるまい。

それにはあの『悪魔』に勝つ必要があるらしい。

だが、有名な空想の産物を想像できるほどの知識や含蓄は俺にはない。

…それならば。

「ほお……面白いじゃねえか」

思い描くと同時に、それは闇の底から現れていた。

彼の出した悪魔と等しく、真っ黒い体色を持つもの。

その大きさは悪魔よりは大分小さいが、頭を、両腕を、二足を持つ生き物の姿。

「あいにく、これしか思い浮かばん」

俺が呼んだ幻覚は、人間の姿を取って立ち上がった。

腕を動かすイメージを念じると、右腕を振り拳を握る。

歩くイメージを送ると、よどみなく数歩前進してから動きやすいように構える。

意のままに動くそれを見ると、なんだか能力者になった気分だった。

「試運転は終わったかよ」

「ああ」

動かしていた『人型』を止めて、腰を落とすように構えさせる。

「んじゃあ、戦闘開始だ」

すぐさま『悪魔』が、地表を滑るように飛び込んできた。

あらかじめ動く準備をさせていた『人型』を、斜め前方に飛び退かせてこれを回避する。勢いよくこちらをすり抜けていく幻覚に思わず目をつむるが、すぐに振り返り相手の動きを伺う。

「いい回避じゃあねえかあ。だが攻撃はどうする？そいつに何が出るか見せてみるよ、なあ？」

悪魔は振り向かず、宙返りで空中に飛び上がって方向を変え、物理法則お構いなしにまっすぐ人型を狙ってくる。なんとか人型にジグザクに斜面を登らせて回避するが、遠くなってしまう様子がつかみにくい。

「く…動くしかないか」

「ふん、走りながらやるつもりかあ？」

見えなくなった人型を追うべく坂を駆け登るが、上方に位置していた彼が先んじて動いた。追う形でカーブを曲がると、直線上に人型の姿を捉えられたが――

「こりゃ終わりだなあ」

悪魔はすでに空を蹴り、人型への突撃を開始していた。

「…伏せろ！」

思わず叫ぶと、人型はびたんと貼りつくように地面に倒れ伏した。

飛びかかった悪魔の一撃をすんでの所で回避し、勢い余った悪魔が半身を削るように坂を逆走して止まった。

（走れ！）

今度は心の中で念じる。人型は起き上がりながら始動し、坂を登り始めた。

「おいおいおい、逃げっぱなしで何だってんだあ！？戦う気はねえのかよ！？」

「戦ってるだろ。今は隙を窺ってるだけだ」

そう言いつつ、自分も坂を素早く登り始める。すでに彼…参崎を抜き、様子を見ていた悪魔をすり抜けてから、人型と合流を果たした。

「勝ちたきゃ追ってこい。それも戦いだろ？」

「…んのヤロウ、上等だよ…ッ！？…なッ、何だ！？」

二者の間に割って入るように、空中に突如として影が躍った。

まったく突然の出来事で、参崎も俺も驚くしかなかった。

着地したそれはどす黒い肌を持つ——巨大な、狼に似た獣の輪郭。

ライオンのように大きい、それは明らかに異質な獣であり、瞳は赤くらんと輝いていた。

「これもてめえの幻覚かよ！？」

「いや、違う！だいたい一人一体なんだろ！？」

「じゃあ誰が…なっ！？」

参崎の驚愕と共に、悪魔がバラバラに崩れてゆき、消え入るように姿を消した。同時に俺が操作していた人型も消滅した。

「能力が解除された…こいつの仕業か、ああ!？」

喧嘩を売るように『狼』に向かって吠える参崎だったが、その獣は微動だにせず聞く耳も持たない。

着地後ぴくりともしなかった獣は、ゆっくりと首を動かし…こちらを、見た。

真紅の中心に橙を落とした色彩。…神秘的で、渦巻くような異質な瞳だった。

その一瞬だけ目が合ったのち、『狼』はぐるりとその場で方向を変えた。

それから、地面をダンツ!と蹴り飛ばして斜面を越え、下方のアスファルトへと音もなく着地した。

「くそ…なんだありゃ。待ちやがれえっ!」

参崎は腹を立てたように、走り去ろうとする獣を追って坂を駆け下る。

もう『狼』は見えなくなったが、それでも彼は追うのをやめる気はないようだった。

俺はというと、無論何もできず、ただ呆然としていた。

「あ、おかえりなさい」

「え、ああ。ただいま」

スタート地点まで戻ると、桜嶋から優しく出迎えの言葉をかけられた。

彼女はちょこんとパイプ椅子に腰かけており、どうやらここでアナウンスをしていたようだ。

「ドリンクありますよー。要りますか？」

「ああ、じゃあ一本くれるか」

テーブルの上について用意したのか、同じメーカーのスポーツドリンクが並んでいた。一本を手に取り、キャップを空けてぐっと流し込む。用意のいいことにキンキンに冷え切っており、液体が喉を通り抜ける感覚は非常に清々しい。

「ああ…生き返った。ありがとな」

「いえいえ。先輩、結構張り切ってますね？」

「まあ事情でな、張り切らざるを得なくなったというか…そうだ、川藤さんは？」

「そちらに」

すぐ隣に手の平を差し向ける桜嶋。

ちょうど彼女の陰になった位置で、川藤が足を組んで空を見上げていた。

「…ああ？打川か。どうした」

「下で少し騒ぎがあったもので」

『悪魔』の幻覚と、『狼』のことをかいつまんで話す。

川藤は特に驚くこともなく、しかし面倒くさそうに首を曲げてぽきぽきと鳴らした。

「参崎はC-13：クラスCの筆頭だな。通号は『グレート』、能力はお前さんが見た通りだ」

「『イメージ』とか『ブラック』って感じでしたかね」

「そこは桐代か上の方に文句を言え。ま、大して害はない能力だ。青山も10分ぐらいで元に戻るだろう」

「そうですか。で、『狼』の方は」

「あー：仮に危険な存在だったら立会人各位で何とかする。そういうことだ」

「あれも能力の一環ですか。普通の生き物には見えませんでした」

「そんなとこだな。……姿を現したのはこちら側の落ち度だ」

「じゃあ放つといていいんですか？」

「それでいい。まあ何だな、“あいつら”を使ったのは失敗だったかな」

どうも向こうのミスらしいが、細かいことは聞いても分かるまい。追及は後にして、ともかく競技に戻る方が先か。

「んで打川、キーワード申請しとかなくていいのか」

川藤がたいぎそうに、バインダーを手元に引っ張り寄せる。

全員分の記録用紙が挟まっているのだろうが、管理はいい加減なものである。

「ああ、じゃあ一応。と言っても一つだけですが、『ツグミ』っていうのを」

「そうか。それはあいにく、1点の単語だな」

「だと思いました。現在のトップは？」

「んー何点だったかな…桜嶋、分かるか？」

「あ、はい。1時間経過時点でのアナウンスでもお知らせしましたけど、最高点は6点です。次いで5点、4点」

そのアナウンスを聞いた覚えはないが、多分急いでいて聞き逃したのだろう。

「ふうん、そんなところか…なあ、出戸ってここ通ったか？」

「出戸：滋忠くん？いいえ、確か見てないですね」

「…となるとコース3に居るんだろな。次はそっちか」

「ご用事ですか？」

「頼まれてな」

早めに貸し借りからは解放されたいところだ。

少し休んだら、見知らぬ彼を捕まえるべく出発するでしょう。

— — — —

「『ヒバリ』：また鳥の名前か」

コース3に入って間もなく、特に探してもいなかったターゲットが目についた。

こう簡単に見つかるということは、1点か0点かのどちらかだとは思う。

地図を見ると、コース3のほとんどは楕円状の道筋を描いていた。

途中まで一本道だが、一箇所の分岐をどちらに進んでも最初の位置に戻るようだ。

自分は地元の人間であり、家のすぐ近くの道でありながら、ここに入るのは5、6年ぶり位になる。どこに通ずるわけでもないのに全く用事が無いのだ。道は雑草が伸び放題で、細かったり滑ったりと危険な箇所も多く、足を踏み外せば無傷では済みそうにない。

慎重に進んでいくと、唯一の分岐ポイントに差しかった。

だが、どちらにも行く気はない。コースの形状を考えると、下手に探し回れば永遠に出会わない可能性があるからだ。ここで待っていれば少なくとも終了直前には会えることだろう。

道の端に立つ、幹の大きな木にもたれかかってゆっくりと待つ。

……。

……。

……眠くなってきた。

朝早かったことだし、さっき急に身体を動かした疲れもあるし。持ってきたボトルを一口飲んで、眠気覚ましに体のあちこちを伸ばす。

と、そこにやっと通りかかる影があったが：残念ながら旧知の少年である。

「あ、シンゴ先輩」

「ん？なんだ、猪吹か：出戸ってやつ見なかった？」

「シゲ？一回見ましたけど。どこ走ってるかは分かんないすね」

「そうかい。あんがとよ」

「じゃ、俺も急ぐんで」

軽快に土を蹴り、猪吹は林の奥へと消えていった。

「あ、どこで見たか聞いとけばよかったか…まあいいか」

あくびをしながら首を回して、だんだん思考がいい加減になるのを自ら感じていた。

— — — — —

「…あれ？井房野か？」

「おおっ、何でそんなところにいるの先輩」

「こっちのセリフだ、メイはどうした」

「スタート地点まで戻ってから別れましたよ。忘れてたから洗濯してくるー、って言って、おうちに帰りました」

「何やってんだあいつは…。あ、それはともかく、出戸滋忠を見なかったか」

「出戸おー？あー、ひどいよねえあれ」

彼女はむくれるように、地面を踏んでわずかにヒビを入れる。

「酷い？こういうことだよ」

「え、分かってて聞いたんじゃないんですかあ。今回の競技的にあの能力は有利過ぎるって話でしょ？」

「いや…会ったことが無いんで知らないんだが」

「私が見たのはスタート直後だけ。あと、ここで待ってても会えないかもよお」

そう言い残して、止める間もなく井房野は走り去る。
追いつけるよりも、最後の一言の意味を考えなくてはならなかった。

出戸はコース3上には居ないという事だろうか？

しかしコース1・2で見かけることもなかったし、そもそも向こうには愛中がいる。

わざわざ自分に『お使い』を頼んだのだから、あちらの近辺にはいなかったはずだ。

どうしたものか、途方に暮れそうになる。

空を見上げれば、真っ白な鳥が木々の合間を縫うように優雅にはばたいていた。

自由に舞うそれを見ていて、一つの予想に思い当たる。

(…移動能力、なのか?)

たとえば少し前に星倉が使った(らしい)能力のように、テレポ
ートが出来るなら場所は一定ではない。コース間を一瞬で移動する
こともできるだろう。あるいは移動系でなくとも、ステルス能力な
どを有するなら、こちらから見つけるのは不可能になる。

そうであるなら本当にお手上げだ。

知ってて届けるよう頼んだなら、愛中も意地の悪いことをする。

かといってここから動く気もない。

せめてここで待っていれば、先の二人のように目撃情報も聞けよ
う。

見つからなければ仕方のないことだ。

『アナウンスですー。1時間30分経過しました。残り時間はちょうど半分ですね』

地図からの声。取り出して広げると、聞こえが良くなった。

『トップは10点ですね。次いで私の9点、少し離れて6点と続きます。みなさん好調なようですが、こまめに戻って給水や休憩を心がけて…』

……………？

何だかおかしい。声はよく通って聞こえてくるが、なんだか二重に聞こえてくる。

この地図からだけでは無く、どこか別からも音が発されているようないな…。

辺りを見回すが、誰も見当たらない。

思いつき、地図を一度折りたたんで隠してみる。これで声が聞こえるようなら…

『…………と用意して…………ので…………健康に…………意…………』

やはり、どこからかアナウンスが聞こえてくる。

耳を澄ませると、どうやら斜面の方かららしく、そちらに足向ける。

誰かが地図を落としたのか。だがそれらしい紙は地面や草むらには見当たらない。

『…………上です。…………また30分後に…………』

アナウンスが途絶え——と同時に、がさつと草を揺らす音がした。

斜面の上、何者かが動く気配。

「…そこに誰かいるのか！」

呼びかけるが、すぐに動こうとはしない。

こちらが踏み出そうかとも思ったが、それより先に向こうが動いた。

木の陰からひょいっと上半身を出したのは、丸坊主に長身の男だった。

となると、おそらくはこいつが例の——

「お前が出戸滋忠か？」

「…はあ」

気の抜けた声が返ってくる。上背はあるが腕や腰回りは細く、色白で眉が薄い。

「何で、そんなところに？」

「……休憩していたので」

「ずいぶん道と離れてるが、わざわざそこまで登ったのか」

「そうですけど…ああ、いまそっちに行きます」

そう言うと彼は、静かに降りてきた。

…音もなく、斜面を滑って。

土を踏む音も草を揺らす音もなく、スキーヤーのように姿勢を変

えずまっすぐに。

「何だ、それ。どういう能力だ」

「『スリッパ』です。“滑る”だけの能力です」

「：移動するには快適そうだな：そういうことか」

「それで、あの。僕を探してたんですか」

「ああ、そうそう。愛中から頼まれてな」

ポケットから例の白い球を取り出して、彼に手渡す。

これで俺の『お使い』もやっと終わった、が――――

「何ですか、これ」

「ええー！？見れば分かるものとかじゃないのか？」

「そう言われても、久澄……愛中の言うことは昔から良く分かりにくくて：」

出戸は手に取った球をつまみ、片目だけでじっくりと観察する。

「：あ、こうかな」

そう言いながら彼は手の平に球を置き直す。

：すると、突然。

バンッ！と言う音と共に、球が弾けるように“広がった”。

後には、くしゃくしゃになった一枚の紙が残された。

「やっぱり。能力で圧縮してたみたいですね」

「どうやって解除したんだ」

「手先から能力を当てたら、戻りました」

「なるほど、だから俺が持っても何も起こらなかったのか」

「…あの、ところで失礼なんですが、あなたはどちら様で…？」

「ああ、訓練補助のアルバイトをしている打川という者だが。開始の挨拶の時には聞いてなかったか？」

「ええと、申し訳ないです。その時に愛中と話してたもので気付かなくて…」

「いや、いいんだ別に。愛中とはどういう関係だ？」

「親戚ですね。“はとこ”にあたります」

「へえ…まあともかく、その球は確かに渡した。俺は帰るよ」

「そうですか。わざわざ有難うございました」

ぺこりと痩身を曲げて、彼は腰の低い謝辞を述べた。

名前や聞いた特徴から勝手に粗暴な大男を想像していたが、会ってみればやや気弱な好青年という感じだった。

来た道を登る途中で、ふと一度振り返る。

見えた後ろ姿は林間に立つ枯れ木のように、不安げなほどにひょろりと細かった。

— — — — —

日程はつつがなく終了した。

「よっしゃー、結果発表だー」

今までどこにいたのか、桐代が愉快そうに腕を振り回している。後でメイに聞いたところ、ウチに上がり込んでゲームしてたらしい。…勝手に敷居を跨がせないようにちゃんとっておこう。

「3位はC-19の猪吹隣人。9点×1で9点のまま。自分に賭けるとは手堅い奴だ。」

2位はC-23、出戸滋忠。10点×3で30点

…という1位の奴に賭けたってのか、随分良い読みだ。

で、優勝は：C-16・愛中久澄江だ！

16点×2で32点、僅差で勝ったか。協力プレイ？何にせよおめでとうさん。ご希望の優勝賞品は後日こちらから手渡すから楽しみに待ってろ。僕からは以上、じゃあさいならー」

開始時と同様に、替わって川藤が引き継ぐ。

「結果はそういうことだ、皆お疲れさん。勝てずとも健闘していたようで何よりだ。こちらとしてもいいデータが取れたので協力には感謝している。参加賞というわけでもないが、用意したスポーツドリンクが余ったから何本か持って帰っていいぞ。まあ後は帰ってゆっくり休め。では解散」

3時間の激闘を終えた訓練生たちは、あるいはぐったりと疲れ果て、あるいは元気そうにはしゃいでいた。楽しめたのであれば、こちらからは言うことはない。

帰るべく踵を返しかけた時に、こちらに近づく人影が見えた。

「よお、“人型”の」

「…参崎だったか。何だ、もう競技は終わったぞ」

「競技なんかはどうでもいい。てめえの幻覚は興味深かったからな、いずれ日を改めて勝負してやる」

「んー…まあ機会があればな。しばらくは遠慮したいが」

「ふん、せいぜい想像力を磨いておくことだな」

どうやって磨けばいいんだ。ファンタジー小説でも読み漁ればいいのか。

考えているうちに参崎はいなくなっており、代わりに別の子が目の前に現れた。

「や、先輩。お使いどうもね、おかげで勝てましたよー」

「ああ、おめでとぅ…って、あれはそんなに重要な紙だったのか」

「まあそうでもないですけど。保険みたいな物です。コース1と2のキーワードを半分くらい書いておいたんですよ」

「やっぱり出戸と組んでたのか」

「役割分担ですよ。険しいコース3は能力で楽になるシゲに任せて、私は体力任せに1と2を走破する。いい作戦でしょ」

「まあ協力できれば簡単な競技にはなると思ったが。もっともそれも、裏切らずにやれば、だがよ」

「ふふ、大丈夫ですよ。もともとどっちが勝っても、商品は山分けの予定でしたから」

「というと、同じ商品を希望したのか？」

「まあね。偶然。現金は駄目だっていうから、商品券を」

「…なんだその生々しさ。もっと中学生らしいものを頼めよ…」

「えー、中学生が欲しいって言ったら普通、お金じゃないですか」

「ああ…非常に現実的な意見をありがとう。ともかくこれで貸し借り無しだ。んじゃ」

「はあい。また訓練で会いましょうね、先輩」

商品（券）が手に入って満足なのか、満面の笑顔で彼女はスキップ気味に帰っていった。

…ところで、何円分を頂いたのだろうか。

庭の方から家に戻ると、いつものようにメイが洗濯物を干していた。

「ただいま。もう競技終わったぞ、閉会式にも来なかったろお前」
「おかえりー、ああ忘れてた。誰が勝ったー？」

「優勝が愛中、あとは出戸、猪吹の順だったか」

「おー、じゃあ私の予想は当たってたね」

「本当か？俺は猪吹に賭けてたからなあ、どうあれ逆転とまではいかなかったな」

「こう言う時知恵が回るのはアイちゃんだよ。シンゴはまだまだ観察が甘いねえ」

「そうかよ」

昼飯の用意でもするか、と玄関に向かおうとした時。
来た方から、クラクションが響いた。

（…川藤さんか？）

気になって取って返してみると、黄色い派手な車体がまだそこに
いて――

それ以外に、異様な影が2つあった。

一つは黒い体毛に赤い目をした、あの時に会った『狼』。
もう一つは純白の羽に青い目が光る、鷹ほども大きい『鳥』。

狼は運転席の陰からはみ出すように四足で立っており、鳥はボン

ネットの上でフロントガラスを見つめていた。

そして川藤はこともなげに、運転席で何事かをつぶやいている。
その二体の生き物に、まるで呪文を囁くかのように。

ぐりっ、と『鳥』が首を急に回してこちらを睨む。

それを見てか『狼』が跳ねるように身を動かし、裏坂方向へと瞬
く間に走り去った。

『鳥』もしなやかな動作で羽を広げて、滑空しながら上空へと消
えた。

「か、川藤さん。今のが…」

「ああ…お前は見たんだっけ？ま、何というか…『協力者』だあな」

多くを語ることなく、静かに車を発進させて川藤は去って行った。

あの二体は、川藤の能力で操っていたのだろうか。

あるいはあの異様さからするに、幻覚を作り出す系統の力なのか。

超能力の底知れなさを感じながら、静かになった山頂の自宅に帰
った。

「どうしたのー？」

「…ん…まあ…どうもしないと言えはしないな…。世の中には不思議なこともある、っていうだけだ」

「？…んー、よくわかんないけど、そうなのかもね」

そして普段通りに、穏やかな日常へと戻る。

生活の中で自分は、わずかな時間だけ幻覚のような夢を見せられている。

それも慣れてくれば、ゲームや映画、小説の出来事のようにも思えてきた。

自分の“日常”に、超能力はない。

たとえあっても、それが日常を押しつぶすことはない。

今日も、楽しい時間を過ごしたと思うただけだ。
夢のような力に遊ばれたのだ、と。

—
—
—
—
—

>09< 希望は誰かの手で掴め /了

—
—
—
—
—

「簡易登場人物紹介 &1 t; 0 0 & g t; - &1 t; 0 9 & g t;」

＜『スタッフ』＞

・打川慎五（うちかわ しんご）
15歳。尾岐山高校1年C組在籍。
アルバイトとして週に数日だけ超能力訓練の補助についている。
若者らしくらずやや無気力感があるが、面倒見はいい。

・狩野名依（かのう めい）
年齢不詳。打川家の家事手伝い兼超能力アルバイト。
自称・謎の家出少女だが多くを語らない。朗らかで人懐っこく、社交的ではある。

＜能力訓練生（登場順）＞ ※全員が御旗岳中学に在籍

・青山司朗（あおやま しろう） [D-28（通号不明）] ..
（能力不明）

1年C組。「っス」口調で喋る。能力的にはパツとしないらしい。

・猪吹隣人（いぶき りんど） [C-19『クレイ』] ..
土を操る能力

1年D組。いいところの子らしいが中身は普通の中学生。意外と器用。

・愛中久澄江（あいなか くすえ） [C-16『トータル』] ..
物を丸める能力

2年A組。活発で頭も回るためか、一目置かれている。バスケットが趣味。

・葉村砂月（はむら さつき） [C-24（通号不明）] ..
風を起こす能力]

1年B組。演劇部所属で時代がかった喋りをしたがる。わりと弱気。

・津島多々史（つしま ただふみ） [E-31『タイプ』] ..
文字を書く能力]

1年E組。なし崩し的に葉村のお守り役をしている。苦労性。

・桜嶋唯音（さくらじま いおん） [C-20『リフレイン』] ..
音を再生する能力]

2年C組。かなりの音楽好きなくらいで、基本的に普通の子。

・枚垣行太（まいがき こうた） [D-26『モデライズ』] ..
物を切断する能力]

1年C組。身体が大きく、朴訥で実直。趣味は彫刻と陶芸。

・上幌坂篠（かみほろざか しの） [D-29『トゥインクル』] ..
火の玉を出す能力]

3年E組。言動は天然だが所作は大人っぽく、美人。

・馳由梨乃（はせ ゆりの） [C-14『ウォーター』] ..
（能力詳細不明）]

3年C組。外面は意思が強そうでキツそうだが、中身は脆い。

・湊春夏（みなと はるか） [C-15『シアター』] ..
（能力詳細不明）]

1年F組。怖がりであるらしく、小動物っぽくおどおどしている事

が多い。

・井房野転子（いぶさの てんこ） 「C－21『クラック』
ヒビを入れる能力」 ..

・津島香利（つしま かおり） 「D－27『グラス』
ガラスを操る能力」 ..

2年E組。津島多々史の姉で、うっとうしいほど元気。眼鏡に度は入ってない。

・埜滝柳果（のだき りゅうか） 「（席番不明・通号不明）
（能力不明）」 ..

2年A組。まどろっこしくて要領を得ないので相手をするのが大変。

・参崎龍（さんざき りゅう） 「C－13『グレート』
幻覚を戦わせる能力」 ..

2年E組。粗暴な印象。戦うのが好きらしい。

・出戸滋忠（でと しげただ） 「C－23『スリップ』
物の上を滑る能力」 ..

1年G組。上背はあるが、ひよろつとした気弱な子。愛中の“はとこ”にあたる。

<立会人>

・真崎（まさき）

寡黙で長身の立会人。甘党でゲーム好きらしいが本人は語らない。

・川藤（かわとう）
20代後半くらいの立会人。スーツを着てはいるが普段何やってるか
は不明。

・桐代（きりしろ）
美形だが奇行が目立つ立会人。男性。夏でも丈の長いパーカーを着
ている。

・星倉然菓（ほしくら ぜんか）
尾岐女子高校2年D組在籍。最近立会人になったらしい。不思議で
変な人。

<10> 力の外覚 人の記憶 (前)

これといって科目に好き嫌いが無い。

文系か理系かと聞かれたら前者寄りだとは思いますが、数学や理科を苦手に思ったことはない。高校生活はまだ出だしたが、赤点や補習のお世話にもなっていない。ともかくそれなりに予習復習を繰り返して、平均点を取るぐらいはできる。

逆を言うなら、人並みに勉強しないことには危うい結果を取りかねない。

期末テストが来週に迫っている、初夏の放課後。

尾岐山高校4階の学習スペースに、ちらほらとテスト対策に励む姿が見られた。

廊下から仕切りなしに続く広めの空間に、6〜8人ほどが囲んで座れるテーブルが5つほどある。円状にずらっと窓が並び、採光が良くて開放感があるのが特徴だ。

静けさを義務付けられる図書室と違い、ここはわりあい気楽に勉強が出来る。1〜Cの教室もこの時期はどことなく空気がピリピリと張り詰めており、どうにもやりづらくて出てきた。

もちろん帰って勉強するという手もあるが、だらけてしまいそうだし電車時間もいまひとつ半端になる。気が向いた今に集中して取り組んでおくのがいいと判断した。

倫理の教科書をぱらぱらと黙読し、重要そうな点をノートに書きだしていく。

ヤマには割と自信があるが、堅実に点を取れそんな重要単語はチエックしておこう。

「おーっす、打川じゃん。ここいい?」

「ああ、好きにしろ」

「んじゃ、失礼するねー」

話しかけてきたのは同じクラス的女子、新見千亜季（にいみちあき）だった。

クラスでも男女の気兼ねなく積極的に話しかけてくるためムードメーカーの様な認識で通っており、副委員長も務めている。

文を書きこんでいる途中だったので、教科書を見たまま顔は上げずに返事だけした。

「ほらー、こっち来なって」

「うん…」

「ん? 他にもいたのか」

「そ、別に良いでしょ? そこ座っても」

新見は斜め前に座り、後からやってきたもう一人の女子が自分の正面に座った。

余裕を持って6人座れる場所である。逆側の隣も空いているのだから、そちらでも構わないというか…居づらくないのだろうか。

書いていた箇所区切りがついたので、一度シャーペンを紙から離し指に挟める。

「倫理なんてやってんの? 数学とか不安じゃない?」

「焦って備えるより今やる気なのをやる、つてのがモットーでな」

「それだと好きな教科しか出来なくない? 点数偏るんじゃないの」

「いいだろ別に。総合点が平均より上なら俺はそれでいいんだ」

「あ、出来る奴のセリフだよそれえ。私は平均行くかも怪しいのに」
「それは普段からやらないからだろ」

「うっさーい」

新見は笑いながら、下敷きで顔をぱたぱたとおどく。赤いトートバッグから出したのはそれだけで、教科書も問題集も出す気配はない。何しに来たんだか、こいつは。

正面に居る子のほうは、テーブルに置いたバッグから静かにノートなどを選んで抜き取り、かたわらに積み重ねているようだった。入学からそろそろ3ヶ月になるが、雰囲気や所作はクラスで見た記憶がないように思える。もっとも全員を覚えてはいないし、こういう静かなタイプは騒がしいC組においてはいつそう埋没気味になる。

「チアキちゃんは、勉強しないの？」

か細い声だったが、声量が少ないだけで聞き取るのに不都合はない。

「んー、まずはさあ。そっちからじゃないかな」

「え、そうかな…うん」

変な会話だ、と率直に思った。

内容に具体的ところがなく、しかし二人の間では成立しているらしい。

気になってそちらに顔を向ける。

やはりその子は、クラスでは見たことのない顔のように思える。

「新見」

「ん、なに」

「こっちの彼女、どちらさん？」

「……誰だと思う？」

「見当がつかないから聞いているんだが。うちのクラスじゃないよな」

「さー、どうかなー」

「何だおい、変だな今日は。じゃあ…」

顔を正面に据え直すと、彼女と目が合った。ひるむでもなく黒目の真ん中をじっと見つめると、一度驚くように顔を横向けたが、そろそろと目を合わせ直した。

初対面の人間に“こう”するのは母親譲りの癖であり、特に直す気もない。

変だとは思うが、こうすると会った人を忘れなくなるのだ。

「直接聞けばいいよな。…えーと、何組の子？」

「でい、Dです」

「へえ、隣だったんだ」

「はい…ええっと…」

「打川慎五。打川でいいよ」

「……その……知ってます」

「ああ、新見から聞いてたか」

「いえ、そうじゃなくて……」

もどかしげに彼女が続けて何かを話そうとするが、あいにく途中で打ち切られた。

「ようっ、打川」

「あん？水戸川…に、草壁もか」

「やあ」

後ろからやってきたのは、同じクラスの男子、水戸川友博（みとがわともひろ）と、もう一人は別のクラスだが同じ中学にいた、草壁帆悟だった。

「勉強なら、混ぜてもらってもいいかな」

「ああ。けどお前、勉強する必要あるのか？あの成績で」

「はは、ひどいな。最近ちょっと忙しくてね、あまり復習が出来てないんだ」

「ほーらこれだけこいつはあ。そんなこと言ってばっちり勉強はしてんだよ。なーんでこの学校に来たかねえ、陽ノ嶋とか一高に行けば良かったろ」

横から水戸川が顔をしかめつつ悪態をつくが、草壁は笑って流す。この二人は小学校からの縁らしく、はたから見たところは“悪友”という関係がしっくりくる。

隣に水戸川、その隣に草壁。

二人が同じ並びに着席すると、今度は新見が口を開いた。

「草壁君って、あの成績トップの？」

「そーだよ、こいつが1位以外だったのは見たことねえや」

「ミトには聞いてないんだけど。ね、そうなの？」

「うん、中間テストは確かにそうだったよ。君はC組の新見さん、でいいのかな」

「えっ、知ってたの？」

「あ、いや。名札に書いてあるから…でも顔は知ってたよ」

「あはは、そう？まあよろしくねー」

「うん、よろしく」

草壁が屈託のない笑顔を見せると、新見もつられて笑った。挨拶が済んだところで、二人ともが勉強道具を取り出し始めた。水戸川はそういうつもりが無いというか、こいつはまず鞆を持って来てさえない。

「あーそーいやあ、F組の数学って、担当が…」

「そうだね、授業がなかなか面白くて…」

「ええー、でも苦手な人だって……」

それから3人して和やかに雑談を始めたようだが、ちょっと気になることがあって会話には参加しなかった。

それというのも、対面に座る彼女の事だ。

会話の交わされている方を見つつも、その子はまだ自分の方をちらちらと見ている。向こうにもまだ言いたい事があるのだろうか。こちらとしても名前ぐらいは聞いておいた方がいいとは思うが。

その様子がどうも気にかかる。

というより、何だか既視感がある。言いたいけど、言い出せないようなその態度に。

訓練生の誰かと重ねてるのかと思ったが、あいつらはだいたいが遠慮のない連中だ。しいて言うなら桜嶋や湊には近いかもしれないが少し違う。

直接は向けてなかった視線を彼女に戻して、しばし観察するようにつめる。

柔らかな髪がウェーブがかったショートカットで、睫毛が長くて小顔、線が細い感じで物腰も柔らかい。

あまり会わないタイプなので余計にどこで見たのかが気になる。

こちらと何度か目が合ったが、もう驚くような様子はない。逆にこちらを観察してるようでもあった。

「……って言わないじゃん、普通！？って突っ込んだら、風間が…」
「……はは、らしいけどタイミングが最悪だな。……むしろそこは……」

「……うはっ！笑わすなや帆悟！ははっ、わははははっ！」

隣の会話もだいぶ興が乗っていたようだが、あいにく草壁が言ったらしいオチの部分を聞いてなかった。

向かいに座る彼女は話を把握していたようで、口を閉じたままおかしように身体をすこし震わせ、顔に左手を当てた。

口元を隠すのではなく、頬に手を添える。

…急に記憶が掘り起こされるような感覚がして。
その仕草が『えくぼを隠す癖』だと、知っていた事に気付いた。

「お前」

驚いて口をついて出た言葉は、小声になった。

笑い声に隠れるような一言だったが、それでも彼女にだけは聞こえたようだった。

「…『ヤヤ』……か？」

疑問というよりは驚きであり、自分の中では確証に至っていた。
多分彼女にとっては、もっと早く。

「…そうだよ、打川くん。ううん…『シン兄ちゃん』」

『ヤヤ』…もとい、八坂谷透（やさかやとおる）が昔のままに、小さく微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5718x/>

リミテッド・スタッフ！ ～超能力先輩稼業～

2011年11月6日11時23分発行